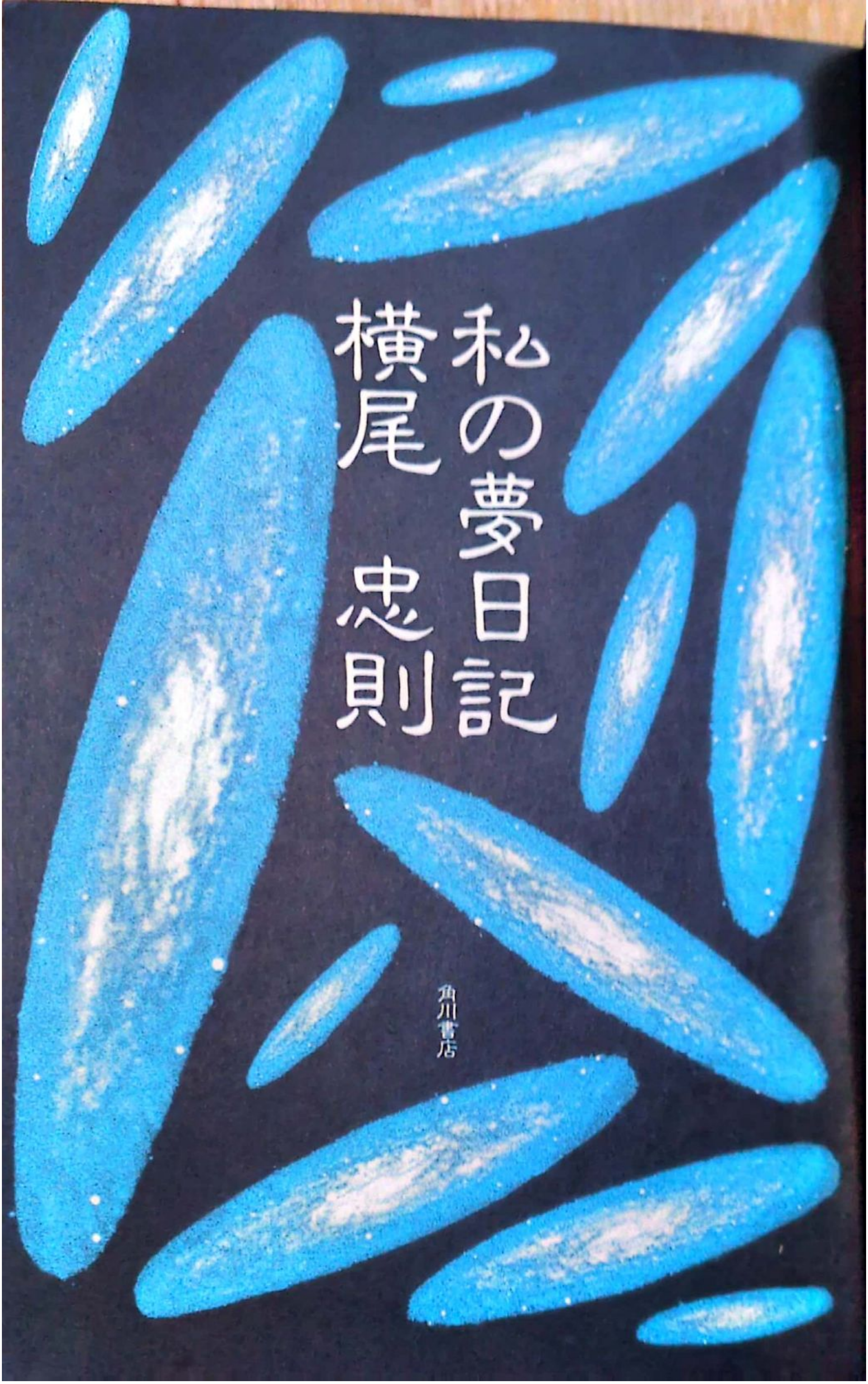


CamScannerでスキャン

「一九五五年―一九六〇年」
ナンビクワラ族の男と蛇――[illegible]　ホイト族と死体――[illegible]　黒分峰と神体――[illegible]
「一九六一年―一九六五年」
黒塗りの新しき町――[illegible]　野球ラブとローン――[illegible]　球体とアンメッパット――[illegible]　急流と白い蛇――[illegible]
「一九六六年―一九七〇年」
消えた乗客――[illegible]　地底人と少年――[illegible]　謎の侵略――[illegible]　水本ヒョウ――[illegible]　斬首の刑と霊魂――[illegible]
人間と透明な円盤――[illegible]
「一九七一年」
光と円盤――[illegible]　政治家と人の怪物――[illegible]　処刑された女と死体――[illegible]　三島由紀夫と死装束――[illegible]
白い女と透明の怪物――[illegible]　料理と怪物――[illegible]　機関と怪物――[illegible]　円盤とカメラ――[illegible]
怪獣とチョコレート――[illegible]　ピラミッドと怪物――[illegible]　メルヘンと母――[illegible]　蝶と祈り――[illegible]
甘き乳との幽霊――[illegible]　男の行く鳥――[illegible]
「一九七二年」
チャレンジャー号と怪物――[illegible]　金星人と円盤――[illegible]　土星人の円盤とアレバンジャー――[illegible]　光の人とバタフライ――[illegible]
女の野心と円盤――[illegible]　神と自転車――[illegible]　宇宙人とハッピーイヤー――[illegible]
お守りの指輪とスクラップ――[illegible]　超物と島と日本列島――[illegible]
「一九七三年」
月の仙女と神――[illegible]　星の一つと仏陀――[illegible]　白鳥と神の字――[illegible]　ローンと紅茶の秋――[illegible]

CamScannerでスキャン

瀬戸内晴美さんと絵の中の家――75　マリリン・モンローと蛇――78　黒い物体とインベーダー――79
巨大円盤と磁力――82　円盤搭乗員と真赤な肛門――85　柴田錬三郎氏と心中――92

一九七四年

マリア様と稲妻――98　母の幽霊と猫――101　サイレンと雲状型円盤――104　円盤とあんこの花――107
啓示と光――109　藤原さんとUFO――110

一九七五年

ジグザグ飛行とテレパシー――112　夜の岩壁と秘密事項――113　福田副総理とゲイ・ショー――114
トンボの羽と赤茶けたサソリ――115　夢と現実――116　懐中電燈と巨星――118　手紙と時間――120
ぼくともう一人のぼく――120　ジグザグ飛行とコンタクト――122　夜空と青空――122　水槽と火星人？――123
海底とUFOの大編隊――124　暗い日とUFO――127　円盤と霜柱――128　白い棺と小野田さん――129
墓参りと読経――130　UFOと船長――132　UFOと明日の四時半――134　夢の中と小亀――138
地球の終末と移行――140　水死と情欲――141

一九七六年

室内競技場と母の幽霊――144　三島由紀夫とそのぬいぐるみ――145　黄金の都市と悪魔――148
野坂昭如氏の死とお巡りさん――152　青年と昆虫――153　西城秀樹と坊主頭――156
プラス・マイナスと地球人――158　大魚と幽霊――159　盲目の女と目玉――160　Wと茶色の子猫――162
万寿屋とペニス――165　まな板と人肉――166　ユダヤの星と世の終り――168　岡本太郎氏と北斗八星――170
大蛇とカブト虫――172　ホッケーと悪阻――176　女の性器と悲鳴――177

CamScannerでスキャン

長嶋監督とオレンジ色のユニフォーム——178　白光体とグリーンの背広——180　しもた屋と娘——181
茶色のセーターと三島由紀夫の亡霊——182　地の底の死者と奇妙な体操——184　地軸の大変動と死の瞬間——187
旅館と手作——188　セロテープと新天地——191　ナイアガラ瀑布と頭蓋骨——192　妻の睡魔と浮上——194
湯舟と女の生首——195　少女達と至福——196　金縛りとどぶ川——197　四つの輪とUFO——199
鳥の絵模様と大山——202　山羊の足と三島由紀夫——205　加山雄三と磁場——207　ポスターと霊力——208
母と九本指の手袋——208　UFOと宇宙人の上司——209　夢の挿絵とサンドウィッチ——212
水上スキーと魚の舌——214　水たまりとタイ焼——215　剝製の海亀と全裸の女性——216　痙攣と夢——219
黒い穴と大日如来——219　ブリキ屋とUFO——220　ちぎれたペニスと肖像画——222　UFO同乗と夢——223
加持祈禱とモスラ——224　火球？と湧水——228　ビルディングと仏様の御加護——230
三島由紀夫と喫茶店——232　長屋と死んだ母——234　神様と骸骨面——235　便器と磁力——236
新聞の切抜きと地球救助作戦——240　キノコ雲と地下室——242　射精と父の首——243　黒い靴下と露店——244
平野威馬雄さんと韓国のブッダ——244　美少女と金属——246

一九七七年

坐禅と恐竜の子——250　小川と桃源境——252　アルバムと天の声——253

一九七八年

母船とカネダさん——256　妻と貸切バス——257　密教行者と百万円——258　キリストの絵とトカゲの尾——259
二人の僧侶と魔王尊——260　大蛇とまずい心——260

あとがき——262

CamScannerでスキャン

●一九五五年――●一九六〇年

CamScannerでスキャン

一九五五年
アラビア人風の男と蛇

夕暮れの草原で一人のアラビア人風の男が、ハンマー投げのように両手に何かを持って体を回転させている。男の手には小さな蛇の尾が握られている。男の回転するスピードが増すにつれて、蛇はだんだん大きくなっていく。ついに男と二十メートルも離れたところにいるぼくの顔の前まで蛇の頭が近づいてきた。いつのまにか、蛇の頭は何かに押しつぶされたように、平らでまんまるい人間の顔になっていた。

一九六〇年
泥水と黒い球体

神戸新聞社の廊下に立っている。急に建物が大きくゆれて傾斜しはじめた。廊下にいた数人の人達がズルズルとすべり落ちていった。
(何か起こったのだろうか?)
ぼくはやっとの思いで窓にしがみついている。窓の外はいつの間にか泥の海だ。六甲山の中腹まで水が押し寄せ、いつの間にか六甲山は海に浮いた島と化している。ぼくのいるのは六階だ。今にも窓から褐色の泥水が入りこんできそうだ。廊下の下に流された人々は次から次へと泥水の中

に沈んでいく。建物もまるで船のように流されていく。ぼくは窓づたいに建物の反対側に廻った。目の前には黒光りした全長一〇〇メートルもあろうと思われる真黒な巨大な球体が水の中から半分頭を出し、視界を閉ざしていた。

一九六〇年
蜃気楼と球体

砂丘を妻子と共に歩いている。地平線の彼方に白骨のような廃墟の街が見える。蜃気楼か？　どのくらい歩いただろう。突然、目の前に鉄の鎖が天から下っているのに気づいた。天を仰ぐと真黒の巨大な物体の底部が見える。
（何だろう？）
ぼくはその場所から出来るだけ離れ、鎖とその物体の実体をさぐろうとした。驚いた！　空に巨大な真黒な鉄の球体が浮かんでおり、その基底部から鎖が地上一メートルばかりのところまで垂れ下っている。何もしらない妻はその鎖を握り今にも下に引っぱろうとしている。

一九六一年―一九六五年

CamScannerでスキャン

一九六二年
展望台と黒い手首

小高い丘をぼくは数人の人達と車を押しながら昇っている。昇りつめた丘の上は池になっている。池の水面は半円型のドーム状になっている。沢山の人々が池の縁の展望台から丸い水面を眺めている。突然ドーム状の水面が崩れ始めた。と同時に池の中央から何やら黒いかたまりが空に向って飛びだした。だが空だと思ったところは実は天井であった。黒いかたまりだと思ったのは切断された黒い手首だった。その手首がピタッと吸盤のように天井にすいついた。

一九六四年
野菜サラダとロープ

大きな劇場のシートに腰を掛けている。他の客席には二、三人の裸の肥満体の老西洋人が野菜サラダを食べながら開演を待っている。舞台では何かが始まろうとしている。ぼくの頭部がステージから投げられたロープに乗ってスルスルと離れていった。これは思想洗脳の実験らしい。劇場の外で宇野亜喜良夫妻に逢った。

CamScannerでスキャン

一九六五年
発疹とアルファベット

場所は郷里の西脇だ。誰かが病気で倒れた。ぼくはその人を抱きかかえてどこかに運ぼうとしている。ぼくの手の平が病人の皮膚に触れて円状に赤く染まった。やがてその部分に黄色の小さな無数の発疹が出はじめた。発疹は微妙に動きながら次第にアルファベットの文字に変っていった。解読不可能。

一九六五年
急流と白い蛇

郷里の川。大雨で増水。急流。川の中央に大きな木の根っ子が逆さになって突き出ている。よく見ると根っ子に大きな白い蛇がからまっている。今にも裂けそうな大きな口を開いて、なんともいえない金属的な悲痛な叫び声をはりあげている。

一九六六年

一九七〇年

CamScannerでスキャン

一九六七年
消火器と乗客

郷里の家の近くの田圃に旅客機が墜落した。赤い大きな消火器を股間に挟んだぼくが、稲の切株のある田圃を走っている。墜落した飛行機のドアのノブが中から動いている。突如ドアが開き、中からボロボロの焦げた衣服を着た人々が、どおっと宙に踊り出た。開いたドアから中をのぞくと、中はまるで熔鉱炉のように、赤一色に染まっている。その中で肩から水筒をぶら下げた乗客が向い合って一列に並んで坐っている。

一九六七年
地震と女学生

郷里の中学校の廊下だ。突如、激しい地震に襲われた。教室の窓ガラスは粉々に割れて散った。体中に扇大の三角型のガラスの破片をいくつも突き立てた女学生が、笑いながら走ってくる。窓の外の遠くの農家がオレンジ色の炎に包まれて燃えている。夕闇の濃紺の風景の中で火の色がとても美しい。

(この火は決して消しちゃいけない!!)

ぼくは次第に傾く校舎にしがみつきながら、そう思った。

1967年——地震と女学生

CamScannerでスキャン

一九六八年五月七日——自宅

宴会と便所

どこかの料亭で宴会が行なわれている。大勢の人達が部屋の中で大声をはりあげながら、てんでばらばらに騒ぎ立てている。
ぼくは急に便所に行きたくなってこの場を立った。部屋の入口のところにいた仲居さんに便所の場所を聞くと、この廊下の突き当りにあると教えてくれた。
廊下は傾きその上狭くて、うす汚れていた。廊下の突き当りの扉を開けたが、そこは便所ではなく、大広間だった。
(変だなあ、確かに廊下の突き当りだと教えてくれたのに……)
大広間に入ったぼくは再び正面のふすまを開けてみた。すると、そこはやはり同じような大広間になっていた。そこで、さらに次のふすまを開けてみると、ここも同じような大広間。
このようにしてぼくは一体いくら位の大広間を通り抜けただろう。
そして、ついにぼくは便所を発見することができた。
便所のある部屋もやはり大広間になっており、その部屋の中央に畳一枚ほどの長方形の黒い穴がぽっかり口を開けており、どうやらこれが便所のようなのである。この風景を見ただけで、ぼくは何だか薄気味悪く、とてもここでは用がたせないような気になってきた。
ぼくはこわごわこの黒い穴に近寄っていった。穴の中は完全に暗黒で、その深度さえも全く計り

知れないほどだった。
穴を覗き込んだぼくは、その中で何かが一瞬チラッと動くのを見た。
（何だろう？）
と思って、穴に身をのりだして覗いたぼくは、まるで喉から心臓が飛び出すほどの恐怖のため、
「ギャーッ!!」
と、大声をあげて叫んでしまった。
真黒な穴の中から、七歳になる長男の英と、近所に住むぼくちゃんの二人が、ぼくを見上げてぼーっと宙に浮いたように立っていたのである。

一九七〇年
洪水とヒョウ

大きな川（郷里の川）にかかっている大きな橋。洪水でもあったのか、橋の両端が流されて橋の中央だけが川の真中に孤立して立っている。ぼくはそんな恐い橋の上にいる。ぼくの他に二、三の友人もいる。川は増水し、水の色は染料を流したように青い。空も透き通ったように美しい青だ。やがて空の一点から何か白いモノがぼくをめがけて恐ろしくゆるやかなスピードでぼくにせまってくる。よく見るとフットボール大の多面体のヒョウだ。あわやぼくはこの大きなヒョウにパンチをみまわれるところだった。遠くに見えた時はスピードがのろいと思っていたが、ぼくの

CamScannerでスキャン

頭の上をかすめて通り越した時はスピードがあった。驚いたことに再び空の一点から第二のヒョウがぼくを襲ってきた。第二のヒョウは友人のS君が腰を引きながら上手に受けとめた。こうして第三、第四、第五、第六と大きなヒョウは次から次へと逃げることも隠れることもできない橋の上のわれわれを襲ってくるのだ。いつの間にか空は青地に白の水玉模様になって無数のヒョウが前方の空から迫ってきた。

一九七〇年一月——自宅
斬首の刑と霊魂

何の罪を犯したのかぼくは、斬首の刑に処せられようとしている。江戸時代？　地平線の見える広大な場所に、荒縄で後手に縛られたぼくは二人のサムライにつれ出された。砂利の地面に正座させられたぼくの背後から一人の男がぼくの体を、しっかりと身動き一つできないくらい強く押さえつけ、もう一人の男は、つき出したぼくの頭を前からひっぱるようにして持っているのだ。こうして長く伸びたぼくの首は一刀のもとに斬り落とされることになっているのだ。処刑される人々はぼくの他にも何人かいた。しゃがみこんで眺めるぼくの後方の地面にも何人かの処刑者がうずくまっていた。いつの間にか処刑が始まったらしく介添人の、

「えい、やっ！」

という声が聞こえてきた。「えい」で一人、「やっ」で二人目の、首が落とされているらしいのだ。

なめらかな「えい、やっ！」の声にも、ぼくは不思議と落ちついているのだ。まるでずっと以前から死を準備していたかのように。それほど恐怖を感じていないのだ。なぜぼくが処刑されようとしているのか、その意味も疑問も考えず、ただただ死刑の順番を待っているだけなのだ。だから緊張などあるはずがない。

しかし、さすがに「えい、やっ！」の声が身近に迫った時は、恐怖は一気に頂点に達した。この恐怖は死の恐怖だけではなく、むしろ斬首の瞬間の肉体の苦痛の恐怖なのだ。今度こそぼくの番だろうと思って、目を堅く閉じて、うんとぼくのつき出す首に、「えい、やっ！」の声だけで痛みを感じたらしい。一瞬は、どうして亀のように首を引っこめるのだ。ただぼくが一つ心配になるのは、もし介添人が斬首に失敗した時のことだ。だから、ぼくは介添人が斬首しやすいように力いっぱい首を前に伸した。

介添人はぼくの斬首にうまく成功した。スッという音がして、首すじに焼けるような痛みを覚えた。ぼくの頭は胴体からきれいに切断され、地面に落ちていった。この感触をぼくは頭の部分ではなく胴体の方で感じとった。だからぼくの頭は切断の瞬間からぼくのものではなくなってしまったような気がした。ぼくは首に熱い痛みを残したまま、深い暗い井戸のような穴に吸い込まれるように、早いスピードで落下していった。意識はまだかなり確かに働いていた。穴に落ちていくぼくは、ぼくの霊魂ではないかと思った。霊魂が肉体から離脱したにもかかわらず、ぼくは痛みを感じているのだ。ぼくは急に心配になってきた。なぜ肉体の苦痛が霊魂にまで伝わってくるのだろうか。ただ、ぼくは、霊魂は永遠不滅のものだと堅く信じているから、もしこの肉体の痛み

が霊魂にのり移ったのならば、ぼくはぼくの霊魂とともに死後の永遠の生涯をこの肉体時の痛みをひっさげたまま生きなければならなくなるのだ。このことを考えるとぼくは急に見えないはずの目の前が真暗になって気を失っていった。

それからどのくらい経ったのか、首のない胴体だけのぼくは死んだ母に腕を取られながらとぼとぼと、ぼくが小学生の頃よく近道をして帰ったどぶ川のある裏道をゆっくり家の方角に歩いていた。我々が歩いていた丁度その辺りにはどぶ川をはさんで石屋があり、そこでは墓石をけずる音が毎日かんかんかんかんかんと響いていた。

家に向っているはずの母とぼくは、今度は小学校へ通ずる急な坂道を登っているのだ。頭のないぼくは首のあたりに包帯をまかれたままソロソロと母に右腕を抱きかかえられるような格好で歩いているのだ。坂道でぼくは何人もの同級生に出逢ったが、相手はぼくが奇異な姿をしているにもかかわらず、それが見えないのか何の気にも止めない様子でどんどんすれ違っていった。この時は幸いぼくの首の痛みもなく、ぼくの霊魂は丁度頭のあたりにある部分に浮遊した状態でぼくの胴体と同じスピードで坂を登っていった。

この後、ぼくは高校に行き英語の授業を受けることになるのだが、この時はちゃんとぼくの頭は胴体と連り、その上頭髪は七、三にきれいに分け、金色に髪を染めていた。

大理石と空飛ぶ円盤

乳白色の大理石で出来た大きな古びた建物の一室から突き出したテラスの端に立っているぼく。テラスから一歩でも前に踏み出せばそこは水面だ。足下の水面の波立ちは静かだが、五メートル前方の水面の波は大海原のように荒れ狂っている。テラスの右は高い岸壁で、その上部は濃い霧の中に消えてしまっている。水平線もやはり濃い綿のような霧の中に溶けてしまったようにやっと十メートル先が見える程度だ。空気感を全く感じない不思議な風景だ。突然右手の凸凹の激しい岩肌の一部が赤く光った。それが消えると次は緑色に光った。岩の中から発している光でもあるようだし、外からまるで懐中電燈で当てた光のようでもある。ぼくにはどういった種類の光なのか想像がつかない。それにしてもこの二つの色の光は何者かに信号を送っているようだ。そうとしか考えられないのだ。その時、左手の天井から一瞬目も眩むばかりの一条の閃光がキラッと輝き、落雷のような大音響とともに、黒銀の巨大な棒状の物体がぼくの前面の水面めがけて物凄いスピードで落下し、水面深く突きささるように水中に没していった。

（一体何が起こったのだろう？）

見ると水面にポカっと巨大な黒い穴があいたまま、水中奥深く貫通してしまっている。地面に穴を掘ったように水にこんな大きな穴があいたのは未だかつて見たことがない。ぼくはわけのわからない恐怖に襲われ、あわててテラスから部屋の中に逃げこんだ。そして大理石で出来た小さな

机の陰に縮こまって身を寄せた。
その時だ！　石で出来た床の下に大きな潜水艦が進入してきたではないか。ぼくは厚い石の床を透してこの潜水艦を見ることができるのだ。この光景にぼくは間近にせまった死の恐怖を感じた。潜水艦の横腹に書かれた白い横文字がかすかに読める。三つの単語からなるこれらの頭文字を左から拾っていくと、U・F・Oと読めた。謎の未確認飛行物体空飛ぶ円盤、U・F・Oではないか！　ついに目撃してしまったU・F・Oにぼくは殺される！　見てはいけないものを見てしまったぼくは当然神の抜きを受けなければならない。
どこにあったのか。部屋の黒い電話が非常ベルのような音をたてけたたましく鳴った。ぼくの心臓の鼓動の激しさは最高潮に達した。受話器を取ったのはぼくの実の父親だ。彼の、
「ハッ!!」
という声にぼくは一瞬首を肩に埋めた。そして目を固く閉じた。ついにぼくの終りがきた——!!

●一九七一年

CamScannerでスキャン

一月

光と円盤

隣の部屋の襖の間から強い光が漏れている。ぼくは襖のすき間に近づいて、隣の部屋をのぞいた。部屋一面が黄金色に輝きその中央に大きな空飛ぶ円盤があった。円盤の一部が開いて、そこから二、三人の搭乗者が降りてきた。宇宙人である。全く人間と同じ姿の宇宙人である。背が高く西洋人のようだ。円盤から降りた宇宙人は部屋の隅にある机の下に潜るようにしながら一人ずつ消えていった。

二月——自宅

高速道路と二人の俳優

人も車もないまるで死んだような真夜中の渋谷。高速道路の手すりに高倉健と鶴田浩二が五、六メートルの間隔をあけて腰を掛けている。ぼくは道路の中央に腰を下ろしている。われわれ三人の他にもう一人誰かいる気配だ。和服の女性のように思えるがその姿はどこにも見当らない。二人の俳優はさっきからしゃべり通しだ。どうやら東映の大川博社長の死後、社長に就任した大川の実弟の経営方針に対する不満が話題になっているようだ。彼等の話には興味はないのだが、話し終るまで待っているのだ。例の見えない女性もぼくと同じ心境で話の終るのを待っているよ

1971年２月――高速道路と二人の俳優

うだ。待ちくたびれてふと見上げた空には無数の星が煌めいている。天に穴があいてそこから光が洩れているような明るさ。星の一つ一つは惑星の形をしていて丸い。無量無辺の宇宙の星々。

二月一五日——午前九時一五分＝自宅
死刑志願と死亡広告

どうしたことかぼくは自ら死刑の執行を希望しているようだ。どうやらぼくが自分の人生においてすべてのことをやりつくしたという理由かららしい。そしてこの死刑志願を決心した以上ぼくは後に引きたくても引けないような状態になってしまっている。

あと数分にせまった死刑執行室は地下のボイラー室のようでもあり、また学校か病院の実験室のようでもある。そしてこの部屋全体がグリーンがかった濃いグレーの色彩で統一されていた。部屋の隅に一つの小さな窓があり、そこには見慣れた風景があった。この風景はぼくが中学一年生の時、いつも教室の窓から眺めていたもので、山があり、林があり、川があり、たんぼがあるという日本の田舎にいくとどこにでもあるごくありふれた風景だ。雨あがりなのか、緑がなんともいえないほど美しく輝いて見える。ところがこの美しい風景をぼくは心の奥のどこかで拒否し、この風景が決して美しいものではないと思おうとしているようだ。もしこの美しい風景に余りにも深く感動すると、どうも現実に未練ができて、死に切れなくなるからだろうか、ぼくは出来るだけこの風景を汚らしいものとして認めようと苦しい努力をしているのだ。

CamScannerでスキャン

いよいよぼくの死刑執行の準備が開始されたようだ。まずぼくのいる大きな部屋の大きな重い扉が大きな音をたてて閉められた。その瞬間、ぼくは急に息苦しくなり、目の前から酸素が急激に減量していくような気がして、

(いよいよ死ぬのか!!)

というまだかつて一度も体験したことのない恐怖感が襲ってきた。自ら死を求めたはずなのに、一体どうしたことなのだろう、ぼくは死を直前にして、少しでも長時間生きのびたくなってきた。部屋の隅々を駆けめぐり、部屋の中にたまっている空気を、まるで水中にもぐる時一気に吸いこむあの方法と同じように、腹の中にいっぱい吸い込んだ。

部屋の中央に解剖台のようなものがあり、ぼくはその上に寝かされた。どのような仕掛けでぼくは殺されようとしているのかよくわからないが、ぼくは急に大きな渦に巻きこまれ、水中深く引きずりこまれていった。水中のイメージはまるでリキテンシュタインの作品の中に落ち込んだようだ。本当は何も見えないのだが、ぼくは水中でキリモミ状態になった状況を強引に視覚化しようと試行しているようだ。こうして造形を頭に浮かべることによって、死への息苦しいプロセスからすくわれるとぼくは考えているらしい。

こうして苦しんでいるかたわらに、やはりぼくと同じように死刑執行の順番を待っている俳優の安藤昇が、ぼくより以前から、悠然として椅子に腰を下し、二、三人の人達と話をしながら死を待ちうけているが、全く平静そのもの。

ぼくは次第に手足や頭がしびれ始め、頭の中には[illegible]

（まもなく死ぬるんだなあ）
と思った。人の話によると、よく死ぬ瞬間走馬燈のように過去の色々の記憶が次から次によみがえってくると聞いたことがあるので、
（ぼくも、そろそろ死ぬんだ、それではぜひ子供の時の記憶でもよみがえらせてみよう）
と懸命にこんなバカな努力を試みてみた。ぼくはこうして死ねる喜びに心なしか笑顔を浮かべながら、キリモミ状に回転するリキテンシュタインの絵の中に落ちて行こうとしている。こうした中でもぼくはなんとか意識を取りもどし、この死の瞬間を理性的に確認してやろうとしている。するとみるみる意識が回復し、もと通りになってしまった。どうも今までの死へのプロセスは死の恐怖から起こった幻想だったのだ。実際にまだ死刑は執行されていなかったのだ。ぼくの周りにいる人達は、ぼくの死刑の準備に忙しく動きまわっていた。
ぼくは本当に幻想の中であと一、二秒で死んでしまうところだった。もし意識的に意識の回復を試みなかったら、あのまま、つまり死のイメージの中で本当に死んでしまっていたかも知れなかった。
こうして正気にもどると、部屋の中にはまだ多くの空気が残っていた。
（この分じゃ何日たっても死ねないぞ）
と思った。次の瞬間ぼくは急に恐くなった。というのもさっきあのまま幻想の中で本当に死んでしまっていたら、今こうして現実に死の恐怖に脅かされることもなかったのに、生きかえった以上、今度こそは、刃物か何かで人工的に殺されるに違いないと思いだしたからだ。もう恐くて、

また気絶しそうになってきた。
ぼくは急に取りみだした。暴れながら泣きながら部屋中を逃げまわった。でもすぐとり押さえられ、優しく、優しくされた。この優しさがなんとも恐かった。いよいよ死の実感が襲ってきた。誰かが二重のドアのカギを閉めてくれといった。いつの間に来ていたのだろう？　田島さん（事務所の女の子）が閉めた。急に身近な田島さんを発見して泣き叫びたくなった。この死の恐怖を彼女に訴えたい気持でいっぱいだ。誰か「死刑をヤメロー！」といってくれないか！　誰かいってくれ！

ぼくはなぜ死ななければならなくなったのだろう？　ぼくはついに係の人達に手術台のような台の上にベルトで体を縛られてしまった。部屋の天井の隅にある換気口のスクリューの回転する音が再びこの部屋の空気を吸い取っているような気がし始めた。

手術台のような台の上で暴れるぼくを静止させるためか、ぼくの体に弱い電気が流された。ぼくはショックに体を激しく痙攣させた。また泣いた。死刑執行者は、執行前に静かにしなければ麻酔注射がきかず、痛い思いをしながら腹を切開しなければならないとか、また電気を体に通した時、一瞬に死ぬことができないとか、こまごました注意をぼくに与えた。もう恐くて恐くて、ぼくはどんな顔をしていただろう。

そこへ高橋睦郎君が現われ、
「死亡広告を出した方がいいのではないか？」

「それはグッド・アイデアだ、でもまた嘘だろうと思われるかも知れない」
といった。こんなぼくの死後の世間の反応が話題にあがると、どうしても死にたくないと思い返した。ぼくがこうして自ら死刑を望んだのも、死の瞬間の死との対決に興味があっただけなのかも知れない、そんな気がしてきた。
ぼくは死ぬことがバカバカしくなり急に死ぬことを止めることにした。生きることを決心したぼくは、何かこれからの人生に大きな夢と希望が無限に横たわっているような気になり、すべての事物に愛の心をそそぎたくてたまらなくなった。そしてぼくの中から怒りというものが全く奪われてしまっているのに気づいた。

四月頃——自宅

三島由紀夫と死装束

新築。日本家屋。長い廊下。障子。中庭。眩しい陽光。木の香り。廊下に立っているぼく。
中庭に面した広い居間に三島由紀夫。あわただしく死出の旅仕度——。今は亡き三島さんに逢った驚きと感動。思わず「三島さん！」と声を掛けた。懐しさがこみあげて、目頭が熱くなるのを憶えた。三島さんの顔は青ざめ、引きつったように緊張していた。
「どこへ行くんですか？」
「もう一度切腹しなければならないのだ！」また死ぬのか！　ぼくは三島さんに死ぬことだけは

止めてほしいと懇願した。だが三島さんの決意は固く、ぼくの言葉を無視した。
三島さんに逢えた喜びもつかの間、ぼくは再び大きな悲しみに突き落とされようとしている。身仕度の出来た三島さんはぼくの前を無言で通り抜けていった。長い廊下を歩く三島さんの白装束の背にきらきらと陽光が飛び跳ねていた。

九月——ロンドン
白い炎と半透明の立方体

漆黒の天空に星がガンジスの河底の砂の数ほど散らばっている。まるで宇宙のまっただ中にいるようだ。ある惑星が滅亡の運命にあり、その時が今来た。見ると一つの流星が白い長い尾を引きながら物凄いスピードで落下してくる。流星は白い炎に包まれている。巨大な球体である。
突然、球体が白煙を噴出したかと思うと無音のまま空中分解した。惑星の崩壊である。すさまじい光景である。(地球もやがてこの星と同じ運命にある)という印象がぼくの内部から湧き上ってきた。
惑星の爆発と同時に空中から無数の一辺が三〇センチ大の半透明の立方体がバラバラと舞い落ちてきた。そしてそれらがぼくには一種の生命体のように思えた。この夜の光景は息を飲むような凄絶な美しさに彩られていた。

九月――パリ

お岩様と尼僧

四谷にあるお岩様の神社に誰かと参る夢だった。以前「少年マガジン」の表紙にお岩様の絵を使用する時頂いたお札を持ってお岩神社を訪ねているのだ。密集した家々の裏庭のような所にあるお岩神社だ。この裏のあき地は畑になっており、有刺鉄線にそって一人のびっこの初老の婦人がカニのように横ばいに歩いている。

「あの女もここに来るようになってから、あんなに歩けるようになったのですよ」

とお岩神社の尼さんがぼくに話しかけた。頭をきれいにまるめたこの尼さんは四十五歳位か、大がらで大きな目をした女だった。黒い袈裟が少し汚れていた。裸の足も土で汚れていた。足の悪いぼくはきっとお岩様のたたりであると信じているかのように、この尼さんに以前頂いたお札を差し出して祈祷をお願いした。百姓家の玄関のようなところが神殿になっていた。尼さんの読経を聞きながら、ぼくは半信半疑ながら足の直るのを念じた。

九月――パリ

湯舟と陰毛

ぼくは母と一緒に風呂に入っている。どこかの銭湯なのだろうか？　それとも旅館の風呂場なの

だろうか？　とにかく辺り一帯非常に薄暗く、湯舟の中は深い池のようにどんより淀んでいる。不思議に湯気が立っていない。ぼくはこの湯舟の中でちょっと泳いでみた。どうしたことかぼくが泳ぐ姿を少し離れた所から自分で見ることができた。こうして湯舟の中でたわむれている時一人の女性が泳ぐように入ってきた。二十五歳位のやや大がらの豊満な肉体の色白の美しい女性だ。湯舟のふちに腰をおろし、両足は湯舟の中、ぼくの方を向きながら長い真黒な濡れた髪を両手の指でくしけずるようにすいている。どこかオノ・ヨーコに似たノーブルな顔つきだ。見ると驚いたことに彼女の黒い陰毛の一部分が真白だ。

もっと驚いたことに彼女の陰毛の長さがなんと一メートルもあるではないか。その長さといい量といいまるで彼女の長い頭髪のようである。湯舟につかったその黒い長い陰毛はまるで大蛇のように湯の中を泳いでいる。指で頭髪をすく同じ仕草で彼女は彼女自身の陰毛を優美にすくのである。長い陰毛をひょいと彼女の左肩にかけるようにして……。上に持ちあげられた陰毛の陰から薄い桃色の陰部がちらっと見える。ぼくはこの女性と交わってみたい一念にかられていった。

一〇月——パリ

円盤とカンオケ

場所は故郷西脇の家の近くだ。フト何げなく見上げた空の雲間を三つの円盤が飛んでいる。青い

空に白く光った楕円形の円盤だ。

あまりの驚きに誰かを呼ぼうとした。するとまるでぼくの心を見すかしたかの如く円盤は急にものすごいスピードで雲の中に消えていった。しかしその時ややひくい空に棒状の白い大きな雲がにわかに現われた。その白い大きな雲の中で円盤が楽しくたわむれているようでもあった。やがてその雲の中からひとつの物体が全体の姿を現わした。それは土星のような形をしたオレンジ色の円盤だった。次々と雲の中から沢山の円盤が現われた。なんともいいようのない戦慄が全身を走った。その時、雲が急に地上に降りてきたような感じがした。雲から運ばれてきたのか、ぼくの目の前に大きなカンオケのような箱が現われた。その中には男と女の老人が腰をかけていた。頭髪は抜け、目は深くくぼみ、皮膚の色はチョコレートのような色で、手足は、枯木のように細く、衣類はまるですり切れた雑巾のようだ。この今にも死にそうなミイラのような二人の老人はぼくに何かを乞うような様子だった。

「何か食べますか？」

とぼくは聞いた。

目でうなずいた老人にぼくは食べものを与えた。嬉しそうな老人の目をみているとぼくは何か非常にいいことをしたような幸せな気持でいっぱいになっていった。

一〇月――パリ

横綱とチョコレート

いよいよ制限時間いっぱいだ。そのことをぼくはワーッという観衆の喚声によって知った。最後のしきりで塩を握る手がふるえているのがよくわかった。相手は元横綱栃錦関だ。負けることは必定だが、もし上手くいけば勝てるかも知れない。立ち上りと同時に土俵の左に逃げて、横綱の後に廻って背後から攻めよう。こんな作戦を立てて、立ち上ったものの体が棒立ちになったまま、一歩も足が出ないではないか。見ると横綱も立ち上ったものの同じ場所につっ立ったままの格好で動こうとしない。目の前には巨きな白い肉体以外のものは何ひとつ映らない。ぼくはこの巨きな肉体に圧倒され、尻もちをついて自ら負けてしまいたくなった。その時横綱がノソノソと歩んできた。意を決してぶつかってみた。足がツルンとすべってもう少しで土俵の外にとびだしそうになった。やっとの思いで立ち直ったものの、ぼくは横綱を背にしたままの格好だ。あわてて向きをかえ、再び横綱の胸にとび込んだ。どうしたことか横綱はいとも簡単に土俵の外に片足を出してしまった。

あっけない横綱の負けだ。行司から勝ち名乗りをうけながらぼくは、横綱にこんな勝ち方をしたのが非常に恥ずかしく思えてならなかった。それから数時間後だろう。ぼくは横綱に勝ったという喜びから、何やらぼくの内部のものが変わりつつあることを感じた。いつの間にぼくの横に来たのだろう。横綱だ。横綱の話によると、ぼくが素人だから負けてやったのだ、という。ぼくは

仮にそれが事実としてもちょっと気にいらなかった。ぼくは反論するように、

「素人を喜ばすより、これから伸びようとするプロの若い連中に負けてやった方が、もっと彼等に自信や勇気を持たせることになるはずだ、なぜそれをやらないのか?」

と尋ねた。こんな会話をかわしているところに誰か大きなチョコレートを持ってきた。コクのある非常にうまいチョコレートだ。チョコレートの嫌いなぼくを魅了したこのチョコレートはどこの製品だろう。いつの間にかぼくはチョコレートのことで頭の中がいっぱいになってしまっていた。

十一月――パリ
どじょうと小林旭

どうも終戦当時らしい。ぼくの郷里の近くに加古川という駅がある。この駅は山陽本線にある駅で西脇行きのジーゼルカーに乗るために、ぼくは連絡ホームの陸橋を渡って、西脇行きのホームでジーゼルカーを待っているようだ。辺りには沢山の人々がぼくと同じように発車時刻を待っている。その人々の格好がどうも終戦当時なのだ。買い出し風の中年のおばさんなどが沢山いる。ぼくはふとこの人混みのホームのコンクリートの上に一匹の大きなどじょうがはねているのを発見した。何を思ったのかぼくは人目につかないように瞬時にこのどじょうを手で握りアッ!という間に口にほうり込んで飲みこんでしまった。

空腹だったからではない。どじょうに決して食欲を感じたわけではない。なぜぼくは生きたままのどじょうを飲みこんでしまったのか、ぼく自身全く理解出来なかった。間もなくすると人混みの中のベンチに腰を掛けていた一人の女学生風の女性が、

「どじょうがいない、どじょうがいない」

とさわぎだした。人々はみな一斉に足下を見、逃げたどじょうをさがし始めた。ぼくが飲みこんだどじょうはどうもこの少女のどじょうらしい。騒ぎはいよいよ大きくなってきた。ぼくの腹の中であばれまわるどじょうの動きがよくわかる。胃が焼けそうな、なんともいえない不快感だ。ぼくはこのホームの人々の騒ぎと、腹の中のどじょうの騒ぎとで、何だか怖ろしくなってきた。ぼくは悪いことをしたのだろうか？　心配になってきた。しかしぼくのこの行為を正当化できることがひとつあった。それは以前俳優の小林旭がやはりぼくと同じようにしてどじょうを飲みこんだという話を想い出したからである。

十一月——パリ
スルメと母

ジャイアンツの柴田が今度二塁手になったという。しかもグラウンドで試合せず、町の商店街のせまい通りで試合をしているのだ。また柴田が語ったところでは、先日版画家の人達と試合をした際、池田満寿夫がホームランを打ったというのだ。ぼくはえらく感心をしながら、

CamScannerでスキャン

「彼はやはり天才なんだなあ」

といった。

次の夢では、どこかの大劇場で妻と一緒に篠田正浩の「心中天網島」を観ることになった。開演時間を待っている時、藤純子のお姉さんの光子さんが現われ、甘納豆をくれた。そして、

「京都へいらした時ははんまに寄ってよし」

といって立ち去った。彼女の笑顔が非常に美しかった。間もなくこの映画の主演女優の岩下志麻が素顔のまま挨拶に立った。

化粧を落した彼女の顔はまるで別人で見る影もなく、篠田正浩が可哀相に思えた。次に再び化粧をして現われた。この時の彼女の美しさはまるで天上のものだった。篠田がうらやましくなってきた。

最後の夢は、見覚えのある数人の仲間と小さな車（馬車なのか、荷車なのかよくわからない）で故郷の田んぼ道を走っている。車の中では昆布とかスルメを食っているようだ。どうやら町のはずれにある小さな村にスルメの買い出しに行くところらしい。いつの間に買ってきたのだろう。車の中はスルメの山になっていた。ぼくはフト母にスルメをあげたくなって自宅の前で車を降りた。死んだはずの母が元気そうに老眼鏡をかけながらあみ物をしている姿をみてぼくは安心した。

十一月

蠟燭と祈り

それはまるで墨絵のようなモノクロームの風景だった。はるかな昔からずーっとこの世は夜ばかりだったかのように、そして決して明日も、明後日も、永遠に夜が明けないというような予感すらする、落ちつきはらった物音一つしない静かな夜だった。それはぼくが生まれる以前にかつて一度見たことがあったと思われる夜に大変よく似ていた。

ぼくは墨一色に塗りつぶされたようなこの風景の中の墨色の草の中に腰をおろしていた。よくわからないのだが多分ぼくは十二、三歳で、飛白の着物を着ており、どうもその雰囲気からしてぼくが生まれる少し前の昭和十年頃の感じなのだ。

ぼくが腰をおろしている草むらの前方は川になっており、その向うには空の黒さとまったく区別のつかないほど真黒な竹藪が、まるで怪物のように大きく横たわっていた。ぼくと竹藪をはさんで流れる川の水は墨汁のように黒く、川の中央にはやはり黒い砂利が敷き並べられた川原があるのが見えた。ぼくが一番不思議に思ったのは、その黒い川原に数百本の、いやもしかすると数千本もあるかもしれない白い蠟燭がびっしり立ち並び、それらが一斉に銀色の灯を燃やしていることだった。

普通ならとっても怖い光景なのだが、この時に限ってぼくはあきらめていたのか、それとも恐怖を通り越してしまっていたのか、すごーく落ちついた半ば安心さえした様子で、この風景の中に

身を沈めていた。

しばらくすると、どこからともなく冷い風が吹いてきた。ぼくは一そう身を堅くし、膝小僧を強く両手で抱きしめ、体を前にかがめる姿勢をとった。その時、川原一面に並んだ蠟燭の灯が風にゆらめいた。

（あっ、この灯は消したらあかん!!）

と咄嗟に胸の中で祈った。ぼくの祈願も通じず、あるブロックの蠟燭の灯は風にかき消され、白い煙が幾すじも黒い空に向って細い糸のような尾を引き、やがてふっと元通りの闇になった。

こうして次第に蠟燭の灯はほとんど消されていった。最後に残った数本の蠟燭の灯が激しく揺れており、ぼくはこの最後の灯が消えることを大変恐れた。

最後の蠟燭の灯が消えると同時に、それでもさっきまでかろうじて空や、竹藪や、川原の区別のついていた風景も今では全く墨一色に塗りつぶされ、ぼく自身の体もこの闇の中に溶解し、きっとぼくはぼく自身が闇になってしまったに違いないと思った。

十二月——ニューヨーク

材木置場と父の幽霊

ぼくは、映画監督の若松孝二と電話で仕事の打合わせをしていた。場所は郷里西脇の家の中。以前彼の作品のポスターを頼まれながら、ぼくの怠慢により、ついデザインしなかったことがある。

ぼくは今でもそのことが心の奥で負担になっている。ぼくはこのことをしきりに気にしながら彼に詫びているのだ。そんな電話のやりとりの最中、ふと後ろを振り向くと父が家の前の材木置場の中をにこにこ笑いながらぼくの方に向って歩いてくるのが見えた。いつの間にかぼくは家の中から材木置場の材木の上に腰を掛けて若松孝二と話をしていた。ぼくは彼に、

「あっ、父だ」

といって電話をすばやく一方的に切ってしまった。死んだはずの父がぼくの目の前に現われたという奇跡に、

(夢ではあるまいか!)

と己れの目を疑ったくらいだ。ぼくはころがるように材木の上から駆け下り、父の所に走り寄った。父の腕を取りながら、

「お父ちゃん」

と呼んでみた。父はただぼくを黙って見つめて微笑んだ。ぼくは現実に起り得ないこの父の出現に度肝を抜かれ、まるで気が狂ったように辺りを見廻した。辺りの風景は日常そのままで、往来を歩く人々も一向に変った様子がない。ぼくはまるで異次元の世界にほうり込まれたようになって、ただ父の周囲をぐるぐる廻りながら、なんとかして父の存在を現実のものとして確かめようとした。ぼくは夢の中で、はっきり父を死者として認知していたので、その姿は幽霊としか思われなかった。ぼくだけに見えるもので現実には父の姿などないのかも知れないという不安と恐怖が、ぼくを混乱させた。

父は材木置場を斜めに横切って家の方に向った。驚いたことには、家の前には、やはり死んだ母が無言で立っていた。ぼくは二度驚いた。母は病人のように青白い顔をしていた。ぼくが母に驚いたのも母を死者として見たからである。ぼくは母にも声を掛けて寄りそっていった。しかし母もただ、つっ立っているだけで一向に母親としての包容力を示してくれなかった。それは幽霊であるがために、現実のぼくとは交流が持てないのかも知れないと思った。とにかくぼくと両親の間には、住む世界の異なる、一線を交じえてはならない掟が横たわっているようでさえあった。ぼくは必死になって両親に声を掛け、なんとかして失われた親子の関係をとりもどそうと努力し、すがるように懇願した。しかし、それはどうすることもできない異なった世界に住む者への空しい想いでしかなかった。

十二月——自宅

男の首と振動

部屋の大きさは十畳ぐらいだろうか。ぼくと男を取り囲む床、壁、天井は全面真白のペンキで塗りつぶされていた。

男は刀を大上段に振りかざし、今にもぼくに切りかかろうと、じりじりとにじり寄ってくるのだった。しかし、男とぼくの間には、これは真剣勝負ではなく単なる芝居の振付による一種の舞踊のようなお遊び事として約束されていたので、どんなことがあっても切りつけられるというよう

な心配はなかった。
しかし、それにしても相手の男の真剣な殺気を帯びた充血した目を見ると、ぼくは今にも一刀のもとに切りつけられるような気がして、なんとか、このお遊びを放棄してしまいたいと逃げ腰になった。ところが一向に男には芝居じみたところがないのである。
ぼくは咄嗟に身の危険を感じ、男がぼくに切りつける前に、ぼくから切りつけなければ、男に殺されてしまうと本能的に察した。
「えいっ！」
とばかり、刀をバットを振るように水平に男の首にあてるようにして、思い切り力をこめて切りつけた。
ずん、という非常に鈍い音を残して、ぼくの振った刀は確かに男の首を切断した手応えを感じた。ところがどうしたことか、首を切断された男は、首をくっつけたまま、なおもぼくに刀を振りかざしたまま静かに近よってくるではないか。
(確かに首を切断したはずの男がまだ生きている!!)
というこの不安が急に私の手応えのあったはずの自信を奪おうとした。
しかしぼくには絶対といっていい確信があった。ぼくとしてはなんとか、一刀のもとに見事に切断した証拠が必要である。
ぼくは再び刀を男の首の辺りに水平にかまえて、男が近づいて来るのを待った。ぼくの刀は何の抵抗感もなくすーっと切断された傷口を通過していった。

(やはり切断されていたのだ!!)

という確信と自信に私は感動した。しかしそれにしても、男はなお、頭上に刀をかまえたまま私に近づいてくるのだった。またしてもぼくは、自信がなくなっていくような気がした。

(なぜ首が落ちないのだろう?)

ぼくは思わず男の立っている周囲の床をどん、どん、どんと地響きを立てて小さな四角の部屋の中を何度も何度も跳びはねながら、その振動で首を床の上に落とそうと試みてみた。

しかし、この肉体的に非常に疲れる試みも無駄に終った。ついに頭にきたぼくは男の背後にすばやく廻り、男の腰を思い切り足で蹴飛ばした。どーっと前にのめるようにして男は部屋の中央に頭から倒れた。

(今に首が胴体からころんと切り離されるぞ!!)

と期待しながら男の首元を覗き込んでいたが、一向にそんな様子もなく、一滴の血さえ流れて来ないのだった。

●一九七二年

CamScannerでスキャン

六月二四日――早朝＝自宅

チンピラヤクザと尼僧

西脇市内にある西脇マーケットの中を実家の隣に住んでいた荒木良子という女の子と一緒に食料品を物色しながら歩いている。彼女はさっきから落ちつきがなく、しきりに後方を気にして何度も歩きながら後ろを振り返る。誰かに追われているようだ。マーケットの中は買物客で混雑している。追手(おって)はかなり近くまで接近しているのか彼女は小走りにマーケットを抜けたかと思うと、マーケット裏の荒地に向って逃げ出した。彼女の後を追ったのは二人のチンピラヤクザだった。彼女はあっという間にヤクザに捕まり、荒地に止めてあった黒塗の車で連れ去られた。

この様子をぼくは少し離れた所から見ていた。だが彼女を救いたいというような気持が起こらなかった。うかつに手を出すとこちらが危険だ。ぼくの周りに二、三人の若者がいて、彼等もこの様子を黙って眺めている。若者は京大の政治科の学生らしい。若者とぼくはそれとなく女の子を捜しに行くことになった。

着いた所は大きな建物の前にあるやや傾斜した広場だった。広場には二、三百人の人々がすしづめになってわいわいがやがや騒ぎ立てていた。どうやら政治に関係ある集会のようだ。ぼくはこんなわけのわからぬ組織に巻き込まれるのもいやだと思い、なんとかこの場から逃れようと考えた。その時一人の中年の男がぼくに声を掛けた。どこかで逢ったことのある人だが一向に思い出せない。この男は肩から航空会社のショルダーバッグを掛けていた。少しめくれたバッグの蓋の

裏には「申神」という二文字が金で刺繍されていた。男の名前か？　それにしては憶えのない名前だ。

間もなく群衆は列を作ってどこかに移動し始めた。ぼくも彼等について畦道のような所を歩いていった。辺りはいつの間にか陽が落ちて暗くなっている。ふと気がつくとぼくは列から離れ一人ぽつんと寺の境内のような淋しい場所に突っ立っていた。京都の清水寺の境内らしい。暗闇の中でたった一か所だけが明るいので近づいてみると、一人の尼僧がスクリーンに映画を写して観ている。この先きぼくは一体どうなるのだろうと思うと急に心細くなってきた。

一〇月二二日——自宅

金木犀と円盤

西脇の家の裏庭に面した狭い廊下から、何げなく見上げた、金木犀の葉陰の間に、月の大きさ位の鉛色の円盤が薄青い空に正円を描いてポッカリと浮いていた。ぼくは一瞬喉もとがぎゅっとしめられるような驚きを感じた。

（円盤だ!!　ついに円盤を目撃したぞ!!）

ぼくはこれを写真に収めなければならないと思い、家の中の父にカメラを要求したが、カメラが見当らないという。

（どうしよう!?　どうしよう!?）

と思うばかりで、何をしていいのやらさっぱりわからない。
この間にも円盤は少しずつ移動している様子で、今にも金木犀の葉陰に隠れてしまいそうだ。
その時、父がひょいと金木犀の葉に手を伸ばすようにして、円盤を両手の中にとらえてしまった。
びっくりしたぼくは、父の両手の中に入っている円盤と宇宙人を見ようと思い父の手を開いた。
手の中には円盤も宇宙人もなく、ただ、一匹の可愛い黄色い小鳥が丸くなっていた。

一〇月二四日——自宅
土星型の円盤とテレパシック

郷里の西脇の家の三軒隣に宇野さんという家がある。その家の前の道路に立ってぼくは夜空をあおいでいる。この辺りはほとんど田んぼになっており、前方の山裾の加古川の手前に下戸田村があるが、夜も遅いのか辺りは真暗で何ひとつよく見えない。
一瞬ぼくは電撃的なショックを受け、山裾にある和布村の新西脇駅の方に目を向けた。
(円盤だ!!)
そこには目も眩むばかりの白光色に輝いた土星型の円盤が川岸にそって並んでいる林の少し上に停止していた。ぼくがこの円盤を知覚すると同時に、この物体は後部から火のようなものを噴射してものすごいスピードで、白い長い尾を引いて川の上流に消えていった。一瞬、
(しまった!!)

と思ったが、もう円盤は家の陰に隠れ見えなくなってしまった。ぼくはあわてて、もしやどこかにいるのではないかと空を血眼になって探し廻った。

その時、北西に向ってものすごいスピードで斜めに降下する一条の白い発光体を発見した。

（あっ、さっきの円盤だ!!）

瞬間にぼくの内部にこのような印象が強く響いた。それと同時に何とも表現しがたい親しみの感情が噴出するように湧き起こってきた。このテレパシックともいうべき内部からの印象は、あたかも円盤がその存在をぼくに知らしめようとしているようにさえ感じられた。

それにしても星ひとつない闇夜が、どことなく不気味に思えた。

一一月一四日――自宅

光の玉とバケツ

場所は夜の西脇。いつもよく通る裏道を家路に急ぐところだ。前方の家並は夜の闇に溶けこんで、ぼやーっとしたシルエットだけを残している。ふと空を見上げると、そこには巨大なオーロラが虹色に輝いて、滝が落下するように見える。オレンジ、黄、赤、紫に彩られた空の緞帳は圧倒的な美しさである。しかもこれだけではない、このオーロラのさらに上空には写真でよくみるアンドロメダ大星雲が非常にゆるやかではあるが大接近しつつあるのだ。この感動的な大空の光景に比較して西脇の家並はどうしたことか、夜の闇の中に吸収されてしまったのか明りひとつ見えず、

CamScannerでスキャン

まるで墓場のようだ。

その時、大星雲の一角から一つの光の玉がものすごい速さで地上に向って一直線に落下してきた。

その光の玉が次第次第に大きくなるにしたがって、火の車のように回転しているのがわかった。

(円盤だ!!)

そう思った瞬間、ぼくはついに目撃したという感激に、身体ががたがたふるえてくるのがわかった。

やがてこの円盤と思われる火の車は友人の岡本忠興君の家の裏庭に落下した。すばやくぼくは落下した地点に駆けていった。ところがそこにあった物体は円盤ではなく、アメリカの駐留軍が使用しているようなバケツであった。ぼくはがっかりして全身の力が抜けていくのを感じた。

一一月一八日——午前九時＝自宅

友人の葬式と円盤

ぼくは高校を卒業するまで兵庫県の西脇市というところに住んでいた。ぼくの家は南旭町といって旧町内に属する場所にあったが道一本隔てて前の家はすでに旧町内には属していなかった。西脇駅からぼくの家までは歩くと二〇分以上、時には三〇分もかかるところにあり、旭町通りという華やかな商店街を通り過ぎたはずれにあった。

ぼくはこの日も旭町の商店街を自転車に乗って町の中心に向っていた。アーケードのあるせまい

商店街の沿道には大勢の女性が悲しい表情を顔いっぱいに浮かべ並んでいる。友人の来住義弘君の葬式を見送っているところらしい。彼とは彼も絵が上手かった関係か小学校時代特に仲のいい友人だった。彼がアチャコになり、ぼくがエンタツになり、よく学校の休み時間に観てきたばかりの映画のマネをしながら、遊んだものだ。学芸会などには彼が太郎冠者になりぼくが次郎冠者になって狂言などをやり、途中で彼がぼくの役、ぼくが彼の役を演じて大失敗した記憶などあるが、今は彼はもうこの世の人ではなかった。

そんな彼の葬式の列の間をぼくは自転車で映画でも見に行こうとしているのか、この商店街の中間から左に折れたところに蓬来座という映画館があったが、ぼくはこの蓬来座の裏手に当るところまで来たところで、何げなく夕闇の空を見上げた。ほとんどこの瞬間ぼくの頭上に二つの黒い丸い物体が南から北に向ってゆるやかに飛行している真最中だった。一瞬ぼくは、

(空飛ぶ円盤だ!!)

と思った。その時ぼくの横に友人のイラストレーターの宇野亜喜良さんがいた。宇野さんもこの物体を認めたが、彼は、

「あれは、われわれの足下を流れる小さな溝の水面に映った電気の光か何かが逆に空に反射してできた一種の自然現象だろう」

といった。ぼくも彼の意見に同意し、高揚した気持もいったん納まったかに思ったが、その時、例の二つの黒い物体の周囲に突然光の輪ができたので、ぼくは、

(これはいいよいよ本物の円盤に違いないぞ!)

1972年11月18日――友人の葬式と円盤

CamScannerでスキャン

と思い初めた。大きな光の丸い輪の中に二つの黒い物体が、目玉焼のような形になって夕闇の美しい空をさらに妖しく彩っていた。二つの黒い物体の周囲と大きい光芒の外輪が美しいオレンジ色の細い光の帯でとり囲まれ、その内部は薄い紫色で、さらに物体の周囲のオレンジの輪の外に白光色の輪が見えるのである。

そしてこの二つの物体を包んだ大きな美しい光はゆるやかに、北の空に遠ざかっていく。なんともいえない感動的な一瞬だ。円盤を目撃したというリアリティがひしひしと全身を歓喜で包む。この感動的な光景を是非女房にも知らせてやろうと思ってそばにあった公衆電話で掛けようとするのだがなかなかかからない。

――しかし、やっとかかった時には、この美しい円盤は今まさに北の山の尾根に隠れようとしている瞬間だった。

一二月五日――午前八時＝高輪プリンスホテル

"神"と自転車

郷里の西脇に八幡神社がある。この神社は市内の北東部にある山の南の麓にある。本殿に通ずるやや傾斜した参道には砂利が一面に敷かれ、その入口には大きな石の鳥居が左右に大小の池をはさんで立っている。鳥居をくぐって本殿までの砂利道の両側は松林になっており、秋祭以外の普段の日はこの辺りは森閑としている。

この参道をぼくは自転車を手で押しながらゆっくりと昇っている。砂利道でしかも少し傾斜になっているために自転車に乗ったままではとても走りにくいのだ。参道を昇りつめたところに山門があり、これをくぐり抜ければ幅のせまい短い石段があり、この石段を昇ればそこは神社の境内になっているはずである。

ところが、この日は石段も神社もなく山門の背後は一畳位の高さの崖でおおわれ、山門をくぐり抜けることができなくなっている。ぼくは山門の左側にやっと一人が通れるくらいの細い道があるのを見つけた。この山道は砂利道より一尺ばかり高いところにあり、山の中に通じる道になっているらしく、ほとんど人が通った形跡がなく、これを道と呼ぶには多少の抵抗があり、ここを自転車を押して昇って行くということは容易なことではなかった。道の右側は、垂直に地面が切り落とされており、左側はその反対に上の方に傾斜していて、この山道は次第に山門の裏側へと右に大きくカーブしている。

ちょうど山門の後あたりまで来た時、前方の林の中にぼくは異様な二人の人物を発見し、

（アッ!!）

と声にならない声をあげたまま、あまりの恐怖のため、その場に釘づけになってしまった。その二人の人物は、一人が老人、もう一人が若い女性で、ぼくの前方五メートルあたりの一段と高くなった灌木の中にうっそうとした松林を背に立っていた。しかもその足は地面から少し浮上していた。

ぼくは一瞬、

（幽霊だ!!）

と思ったため全身が金縛りになり、体中から全ての熱が奪われ、見る見る血液が凍結していくような感覚に襲われ、もう少しのところで気を失うところだった。

ところが次の瞬間この二人の人物が、

（神だ!!）

とわかった途端、自転車のハンドルを握っていたぼくの両手はまるで強烈な磁石によって吸い寄せられたように、ビシャ！　とぼくの胸の前で合掌の形に合わさってしまった。自分の意志力と無関係にぼくの両手は何者かの力によって吸い寄せられてしまったのだ。

ぼくが〝神〟だと思ったその老人は、ゆうに七尺はある大男で、頭頂部には髪がなく、耳の辺りから下に真白な髪が肩まで下り、口もとからも真白な髭が胸のところまで伸び放題に伸び、その表情は人を寄せつけない威厳を誇り、その眼光は恐ろしいほどであった。この人物は仙人のような純白の衣服を身につけ左手には背丈より高い樫の木の太い枝でできたような杖を持っておられた。そしてこの人物の全身からは輝くばかりの金色の光が放射し、姿は半ば透明でさえあった。

この老人の隣の女性はどのような人なのか知らぬが、やや小柄で、日本的な顔立ちをしており、やはり白い衣服に左手には木の杖を持って老人の右手に並んで立っておられた。

このようにしてぼくは、こともあろうに〝神〟を前にして、あまりのもったいなさと恐ろしさに、完全に電気的なショックを受けたように硬直してしまっていた。そしてこの非現実的なまるで夢のような状景に唖然としたまま、どうすることもできなかった。

やがてこの二人の〝神〟は林の中から、ぼくの方に近づき、ぼくの前を斜めに横切って、山門の方へと下りていかれた。しかし〝神〟の足は依然として地面から一尺ばかり離れて宙を歩いておられる。〝神〟がぼくの前を通過される時、ぼくはついに感極まってその場に土下座してしまった。そして口の中で、

（ありがとうございます……）

と何度も何度も、それこそ必死になって唱えた。このことは一種の恐怖でもあったが、全身からは、未だかつて体験したことのないいい知れぬ恍惚感がすさまじいいきおいで噴出してくるのが、ありありと実感できた。

〝神〟の出現と同時にぼくは自転車のハンドルを離し、そして今こうして地面に平伏したままの姿になっているにもかかわらず、自転車は、ただゆらゆらと左右に揺れているだけで一向に倒れそうにもないことに、ぼくはふと気づき、

（〝神〟の力だ!!）

と、この超常現象を感動的な想いでかみしめた。

二人の〝神〟がぼくの前を横切って山門の方に下りて行かれる時、そこにはさっきまではなかったはずの石段ができていた。そしてその石段の中空を伝って下りて行かれた。〝神〟が石段の下まで下りられた時、〝神〟はぼくの方を振り向かれ、土下座したままのぼくの方に女の方が近寄られ、まるで手相を観るような格好でぼくの左手を取って、厳しいがどこか慈悲に満ちた表情で、一言、

「お遊びになられるのですか？」
と意味不明な質問をされた。
ぼくはこの言葉の意味がよく理解できなかったが、恐らくぼくの日頃の快楽的な遊びのことをさしておられるのだろうと考え、
（いいえ、そのようなことは決していたしません）
というような意味を含めて、ぼくはあわてて、
「いいえ!!」
と答えた。

一二月一二日——午前七時＝高輪プリンスホテル

宇宙人とハッピーイヤー

故郷西脇の家の近所に駄菓子屋がある。その駄菓子屋の前で、数人の友人達がだまって青空の一点をまるで何かに憑かれたように眺めている。その中の一人であるイラストレーターの原田維夫君に、
「一体どうしたの？　何か見えるのか？　空飛ぶ円盤を見ているのか？」
と尋ねてみてもぼくの声なぞ耳にとどいていないかのように、彼は映画のストップモーションの画面みたいにまばたきひとつしないで空を仰いだままだ。

（一体、何が見えるのだろう？）
と彼等と同じようにぼくも空を見上げた。
一機の大きなジェット機が白い長い飛行雲を引きながら頭上を飛んでいった。
（どうもジェット機を見ている様子でもなさそうだ？）
彼等の凍結したような表情には何かよほど異常なものを見たあとがありありとうかがわれた。
（きっと、彼等は空飛ぶ円盤を見たのに違いない！）
と思った。こんな風に想像したぼくは急に、自分自身の暗示に動かされ、あわてて周囲の空に視線を走らせた。とにかく、円盤を見たい一心から、彼等がつっ立っている間を右往左往しながら、走りまわった。
その時、どこからともなく一機の円盤が現われた。
（あっ!!）
と息がつまるような衝撃に、ぼくは一瞬身構えた。円盤の大きさは直径五〇センチ位の非常に小さなものだったが、ものすごいスピードでぼくをめがけて飛んできた。ぼくは危うく円盤に直撃されそうになって飛びはねた。ところがこの後、円盤はまるで重力を失ったようにふらふらと糸の切れた凧のように再びぼくの目の前を通過していった。この円盤の飛行状態は明らかに何者かにリモートコントロールされたものに違いなかった。円盤の形は二つの車輪が合わさってできたコマのようで、円盤の一部が赤く他は白い色をしていた。
この円盤が小型円盤だったということにぼくは少々がっかりした。ぼくが見たかったのは、宇宙

CamScannerでスキャン

人自身が操縦するもっと大きな円盤だったのだ。こんなに小さい円盤はなんだか玩具のようだし、またにせ物のような気さえした。しかしこの小型円盤は偵察用のもので上空の円盤よりリモートコントロールされ、地上のさまざまな音を収集しているタイプのものにほぼ間違いはないようだった。

小型円盤とはいえ突然の出現で驚いてしまっているぼくの目の前にさらに驚くべきことが起こった。

（宇宙人だ!?）

身長一メートル二〇センチ位の小人の宇宙人が降って湧いたように目の前に出現したのだ。非常にシンプルなデザインの身体にぴたっとした白い宇宙服のようなものを着用し、頭にはツバが赤い野球帽のような少し頂上がとんがったような白い帽子をかぶり、顔といえば、まるで東洋人のように目がつり上っており、皮膚の色は浅黒い褐色で、感じはなかなか快活だった。

ジョージ・アダムスキーというアメリカのアマチュア天文学者がカリフォルニアの砂漠で金星人と名乗る地球人にそっくりの非常に美男子の宇宙人と会見したということをぼくは知っていただけに、今回のお世辞にも美男子とはいえない小人の宇宙人にはぼくは少々がっかりしたと同時に、実際こうして目の前に現われると、恐怖感が先にたち、宇宙人に逢ったという嬉しさはどこかへ消えてしまった。

とにかく彼がとても不気味に思えたので、ぼくはあわててぼくの背後にあった板塀にぴたっとやもりのように体をくっつけ、できるだけ宇宙人と視線を合わさないようにして、何とかこの場を

切り抜けようと試みた。しかし日頃からぼくは宇宙人に対して親愛の気持を抱いているだけに、このぼくの態度はわれながら感心できるものではなかった。原田君を含む他の友人達もぼくと同じように板塀に背をはりつけて恐怖にわなわな震えていた。そのうちぼくと宇宙人の目が一瞬ぴたっ！　と合ってしまった。

（ハッ!!）

と思って視線をはずそうとしたが、宇宙人の人を射るような強烈な光を放った目の前にぼくは釘づけになってしまった。しかし宇宙人の一見威圧するような目の中に彼の友好的な表情を発見して、ぼくはほっと胸をなでおろし、そして彼の眼差(まなざし)に応えるようにせいいっぱいの笑顔を作って、こわごわぼくの方から握手を求めた。すると彼の方も手を差し出してくれたのでぼくは本当に安心した。ぼくが相手の手を強く握りしめようとしたら、彼は手の平をまっすぐに伸ばして、自分の親指をぼくの親指にちょいとからまして、奇妙な方法の握手をしてきた。宇宙のブラザースは友愛を表現する時、いつもこの方法の握手をするということをぼくも急に思い出し、これに応じた。すると宇宙人は今までとはうって変ったような明るい柔らかい表情に変り、快活なよく通る声でぼくに向って、

「ハッピー　イヤー!!」

といった。

一二月二二日――自宅

大空の地図とうろつき夜太

西脇市の旭町通りの商店街を抜けて家の近くまで来た時、前方に見える山の背後の大空一面に太平洋を中心にした巨大な世界地図が描かれているのに気づいて驚いた。地図は白黒で描かれていた。

地図の北極辺りでキラッと輝く光体があった。ぼくは食い入るように光体を見つめた。突然光体は長い尾を引いて日本列島を縦断し、ニューギニアを通過してオーストラリアから南極に向けて物凄いスピードで落下していった。光体はヨーロッパの中世の天文図によく描かれているような流星のイラストレーションそっくりで、地図と同様色はついていなかった。

ぼくはこの光体がすぐUFOであることがわかった。UFOが南極に消えると同時に、別のUFOがぼくの頭上の青空に出現した。雲間には小さいUFOが沢山南北に行ききしていた。UFOの形体は真空管そっくりで、機体にはグリーンとオレンジが彩色されていた。

場面が変ってぼくは通りに面した米住さんという家の応接間にいた。格子戸越しに外を見ていると一人の浪人が酒に酔ったような足どりで通りかかった。田村亮だ。「うろつき夜太」の格好のままである。

一二月二八日

織物工場と日本列島

実家の裏庭に面した縁側で夕方の西の空を眺めている。板塀をはさんで裏隣は織物工場である。工場の屋根と屋根の隙間からピンク色の夕焼け空がちらっと覗いている。上空はまだ昼間の青空のままである。その上空に白い雲がちぎれて一列に並んでいる。その雲は誰の目にもはっきりと日本列島を描いていることがわかる。

ぼくが雲の日本列島に気づくと同時に九州、四国、本州、北海道の順でたちまち消えてしまった。そしてそれが合図のように隣の工場の中庭に葉巻型のUFOが出現した。ぼくの家の板塀に寄りかかるようにしてUFOはこちらの様子を伺っているように思えた。

CamScannerでスキャン

●一九七三年

CamScannerでスキャン

一月二四日——自宅

母の幽霊と写経

大阪の実の親が現在住む生野区の家の中である。三間続きの小さな家だ。台所のある部屋に何か気配を感じたので、ぼくはその部屋にいってみた。実際には四畳半位の部屋だが、今日は随分広広とした部屋になっている。

ふと、道に面した窓を見ると、そこにはいつの間に西脇から来たのか死んだはずの養母が窓の仕切りに寝そべるような格好で背をこちらにして坐っていた。

（どうして死んだはずの母がこんなところにいるのだろう？　一体何をしているのだろう？）

そう思ってぼくは母の前に廻ってみた。

母は寝そべったような状態で、半紙に筆で般若心経の写経をしていた。母に声を掛けようとして近づいた。だがその時母は見る見る影のように薄くなって、消えてしまった。

（母の幽霊だ!!）

思わず恐怖がぼくの全身を走った。

母に逢えたことが一方で懐しくもあった。

CamScannerでスキャン

四月二日——午前六時・日光

星の十字架と仏陀

母校の西脇高校のグラウンドの片隅の小さなベンチに腰を下ろして、ぼくは野球用のバックネットの方向を外野に当る場所から眺めている。放課後なのだろうか。それとも日曜日なのだろうか。グラウンドには人っ子一人いない。人のいない運動場はいつもにも比べると非常にだだっ広く感じられた。グラウンドを三方から囲むように道がついているのだが、そこを通る人も車もない。すぐこの道から一段高い場所に市役所や保健所があるのだが、そこに出入りする人の姿も全く見られない。

別に人が一人もいない風景などさほど珍しいわけではないが、この一見ありふれた風景が、実はとても非現実的な様相を呈していたのである。ぼくはそのことに、何ら不思議だとも思っていないようだ。

グラウンドには、春の明るい日ざしがふりそそぎ、周辺の樹木や山の緑は鮮やかに映え、何もかもが生々と色をまばゆく輝いている。こうした風景も決して珍しいわけではない。どこにでもある、ごくありふれたものである。ところが、この明るい風景をよりいっそう強調しているのが実は空の闇だった。地表が昼間で空が夜なのである。

地表の風景を眺めていたぼくは、ふと墨を流したような夜空に目を移し、ぼくは圧倒された。幾千もの星層を仰いだ。ここ何年も見たこともないような見事な星空が、他の廃星からも眺

める宇宙空間のように絶対的な美しさを誇っていた。地表と天上の、光と闇の、陽と陰のこのコントラストは生と死の関係を物語っているようにも思えた。

どのくらいの時間ぼくは夜空を眺めていたのだろう。ふと気がつくと中天目指して無数の星が少しずつ移動し、一ヵ所に集合し始めていた。その速度は次第に早まり、まるで磁石に引き寄せられる鉄粉のように、今や完全に一ヵ所に集合した無数の星屑は、まるでシャンデリアの水晶のきらめきのように、ぼくの頭上で輝いていた。やがてこれらの無数の星の塊は徐々に明確な形を造り始めた。それは小さな星からなる立体的な形をした巨大な十字架の彫刻であった。北の空から南の空に向ってパースペクティブに両手を拡げて飛んでいるような格好をした星の十字架は、明らかにイエス・キリストを象徴したものだった。ぼくはこの天上の大いなる神の姿に感激し、今にもぼくの魂は喉から飛び出すのではないかと思われるほどであった。しかし、どうしたことか、この神の出現にぼくはわずかな不安感を抱かされた。それはこの世界の終末の近づいていることの予感につながったからである。

この時南の空に、ある気配を感じてぼくはその方向を見た。

(星の塊だ!!)

さっき十字架を形造った時のように、再び南の空から無数の星の塊が何かを形造りながらゆっくりと近づいてくる。まだ具体的な形は描かれていなかったが、ぼくは咄嗟に、

(仏陀だ!!)

と思った。

北の空の十字架を求めるように仏陀が徐々に近づいてくる。少しずつ形がはっきりしてきたが、これは巨大な仏陀の涅槃像だ。
世界の二大聖人が今ぼくの頭上で交わろうとしている。

五月三〇日——午前九時=自宅
白馬と神の守護

以前は地下室にでもなっていたのだろうか。現在は建物が全て取り壊され、地下室であっただろうと思われる部分のコンクリートの壁と柱だけが地下面から地上の高さまでその姿をむき出しになっていた。まるでローマやアテネにある古代遺跡のようだ。地下面からは背の高い雑草がびっしり生い茂っている。この地面にぽっかり口をあけた地下の廃墟の面積はおよそ一五メートル四方はあるだろう。少し高い位置からこの場所を見れば、子供の雑誌によくある迷路を形どったクイズの図形そっくりである。この地下の建物は以前相当堅牢なものだったのだろう、柱の直径が一メートルもあり、壁の厚さだけでも五〇センチはあった。
この柱や壁の上を十数人の人々が歩き廻っている。この中の一人にぼくも加わっているのだが、他に、身動きひとつしないでそそり立った壁の上でうずくまったままの老人もいるようだ。所々に壁と壁の間に板の橋が渡してあり、どの場所にも自由に行けるようになっており、みんな子供のようにはしゃぎながら、この少し危険な遊びを結構楽しんでいる様子である。

ところが一人の背の高い痩せた眼鏡をかけた外人の男が板の橋を渡ろうとして足を踏みはずし地下の雑草の茂った地面に転落した。打ちどころが悪かったのだろうか、地面にうずくまったままなかなか起き上れない。他の人々は柱や壁の上から倒れている外人を覗き込んでいるが、誰も助けてやろうとする気配もない。

ぼくもどうしていいのかわからないままうろうろしていると、一軒の日本料理屋が目に入った。料理屋は地下の廃墟を見下すように隣接して建っている。ぼくは壁の上を小走りでこの建物の中に飛び込んだ。中には顔見知りの仲居さんがいた。彼女は品川の高輪プリンスホテル内の「若竹」という日本料理屋の仲居さんである。

店の中に入ってしばらくした時、何ともいえない霊気を帯びたような一種不思議な風が吹き始めた。風は次第に雨をともなった強風に変り、空はにわかにかき消すように暗くなり、雷鳴が轟き大地が裂けんばかりに激しく流れ狂い始めた。外ではさっき倒れた外人がその場にひざまずき両手を組み合せ、必死に神に祈っている姿が稲光りの中で青白く見えた。この時ぼくはこの暴風雨はあの外人の念力によって起こされたものに違いないと察した。その理由はよくわからないが、きっと彼の神通力が自然の力を変えたのだろう。

やがて流れ狂う暴風雨と共に白い馬に乗った大軍が突然大空から現われた。ぼくはこの様子を料理屋の部屋の窓からまるで映画のスクリーンの中の世界を観るようにして眺めている。窓の向うにはいつの間にか大きな池が出現したかと思うと池の水は突如竜巻状になって天に吸いこまれていった。とにかく建物の外ではすさまじい光景が展開されているのだ。嵐の中で祈り続けていた

外人はいつの間にか祈りを止めている。どうやらケガが回復した様子だ。しかし屋外は依然として猛り狂い一向に収まりそうにない。そのうち押し寄せてきた白馬の大軍とおそらく別の大軍だろうと思われる軍勢が敵味方に分れ弓矢で戦闘を交わし始めた。まるでスペクタクルズな史劇を見ているようなこの光景はなかなか現実のものとは思えなかったが、突然建物の中に彼等が放った矢がびゅんびゅん飛び込んでくるにいたって、ぼくは初めて現実的な恐怖感に襲われこの逃げ場のないせまい店内をどこへ隠れればいいのだろうと、ただうろうろするだけだった。

その時、一本の矢がぼくの胸に命中した。死につながるこの恐怖とショックに、ぼくは、悲鳴をあげた。ところがこの当ったはずの矢は体に刺さらずにはね返って足もとの地面に落ちた。あまりの不思議さにぼくは面くらったが、次の瞬間体の中から何ともいえぬ熱いものがこみあげてくるのを感じた。それは至上の平和と永遠の安心感だった。この奇跡によってぼくは神の力で守護されているという実感に大いなる喜びを感ぜずにはおれなかった。

九月一三日——午前九時二三分＝高輪プリンスホテル

ロープと紅蓮の炎

西脇の自宅の前。空はまるで墨を流したようにどす黒い。ぼくはさっきから円盤を捜すため空を見上げている。

すると、ぼくの頭上一、二メートルのところに何かロープのようなものが上空から引きずられな

から移動していった。もしかすると円盤ではないかと思ったが、次の瞬間、それが間違いなく落下傘であることがわかった。何かに引っかかったのかよれよれになった落下傘が、ロープをたらして流れるように落ちていくところだった。この落下傘をぼくはしばらく目で追っていたが、ふと気づくと、落下傘が落ちていく方向の空に、ものすごい黒煙を尾翼から噴きながら黒い大きな飛行機が市の中心に向って降下していくのが見えた。

（飛行機が墜落する！）

ぼくはあわててすぐ向いに住む遠藤さんの家にこのことを知らせるために飛びこんだ。

「大変です!!　飛行機が落ちます!!」

その時、大音響とともに、市の中心が真赤になり、吹き寄せてくる爆風にぼくはもう少しで倒れそうになった。

（家の中には両親が寝ているはずだ、早く助けなければ!!）

と思ったぼくは家の玄関まで走って来たが、すでに家の中は紅蓮の炎が渦巻いており、今にも家が崩れ落ちそうになっていた。それでもぼくは玄関から炎をかき分けるようにして家の中に飛び込んだ。炎の中で母は玄関の方を背にして台所の板間に坐っていた。

（母は無事だ！）

と感じたぼくは、母をそのままにしてすぐ隣室にいるはずの父のところに走った。炎に包まれて寝床から這い出そうとしている父の姿が見えた。

（父も生きている！）

CamScannerでスキャン

安心したものの、炎はすでに家中を包んでいる。一刻も早く外へ連れ出さなければならないと思いながらも、どうしたらいいのかまるっきり判断がにぶってしまい、気ばかりあせるだけだ。

その時、長男の英がいないのに気がついた。

（さっきまで外にいたはずだ！）

両親をそのままにしてぼくは再び外に飛び出した。外はどこもかしこも炎に包まれた家ばかりで、全く手のつけようがない。ぼくはこんな火の海の中を錯乱したようになって、

「英クーン!!　英クーン!!」

と、長男の名を叫びながら走り廻った。

九月二一日――指宿観光ホテル
瀬戸内晴美さんと絵の中の家

原稿を印刷所に持って行かなければならないというのに、ぼくの足は映画館に向っている。映画館の中ではすでに沢山の人々が映画の始まるのを待っていた。ぼくの隣の席には妻と思われる女性が座っている。そこへ友人のアメリカ人カメラマン、フレッド・アンドリュウスが現われた。彼の長髪は、いつの間にかイガグリ頭に変っていた。ぼくは彼と雑談を交わしたが、今日に限って英語が上手くしゃべれるのに驚いた。

その時、一人の体格のいい男が何やら大きな声を張りあげながら中央の通路をスクリーンに向っ

CamScannerでスキャン

て歩き出した。顔を見ると美男で知られる映画俳優の宝田明だ。フレッドが「あの男は誰だ？」と聞いたので、「ギャング映画やホームドラマを演るムービー・スターだ」と教えてやった。ぼくは宝田明がステージに上って挨拶でもするのかと思った。が、彼は観客の中に知人を見つけその人と大きな声でしゃべり始めた。

いつの間にかぼくは映画館の外に出ていた。そこへ印刷所の人がやってきて、

「現場の人達が待っているので早く来てください」と不機嫌な顔をしていった。丁度、目の前に酒屋があったので、（酒でも買って行かなければまずいだろうか？）と思っていると、こちらの心の中を読み取ったかのように、

「酒でも買ってくだされば……」といった。

印刷所は家内工業化した小さなシルク・スクリーン印刷をやっているところだった。気がついてみるとぼくはいつの間にか瀬戸内晴美さんの家を訪ねようとしていた。瀬戸内さんの家はぼくの郷里の実家の前に建っている四軒続きの長屋の一番端れだった。そしてその隣の家をぼくが買うことになっているようであった。

ぼくは珍しく白いスーツを着て、頭には高校時代の学生帽を被っている。

「ごめん下さい」と声を掛けると、奥の方から瀬戸内さんのいつもの若々しい透き通った声が聞こえた。

「いらっしゃーい」

瀬戸内さんの家は小さな部屋が三つ縦に並んで、玄関を入ると細い土間が部屋にそって裏に続い

ていた。十歩も歩くとすぐ裏に出てしまいそうだ。瀬戸内さんは奥の部屋に若い女性二人と、もう一人瀬戸内さんの息子さんと思われるような十二、三歳の男の子と一緒に忙しそうに動き回っていた。

瀬戸内さんはぼくの顔を見るなり、たった今描き上ったばかりの一枚の肖像画を見せながら、「どう？」といった。ぼくは何か気のきいた言葉を探さなければと思った。「そうだね、文学者にしてはうまいね」といった。瀬戸内さんは黙っていた。「文学者にしては」という言葉が少し気にいらなかったのかも知れない。

肖像画の人物はサーカスのピエロのように真白にドーラン化粧をしていた。目が大きく女の子のような顔をした美少年だが、どこか生気のない弱々しい印象を与えた。背景はグリーン一色に見えた。しかしよく見るとグリーンの中に建築中の日本家屋がうっすらと描かれており、沢山の人達が作業をしているのが見える。

気のせいか人々が動いているように思えた。確かに動いている。まるで自分が画面の中に入って、実際の建築中の家を見ているように。

どのくらいの時間、ぼくは絵の中に入っていたのか、気がついてみると瀬戸内さんの家の外にいた。自宅に帰ろうと家の前まで来た時、昔高校を卒業して間もないころ加わっていた市の演劇活動の中心的人物米川米一氏が父と玄関先きで話していた。彼はかなり酒に酔っている様子だった。支那帽を被り、アフガン製の足まで隠れる長いコートを何枚も重ね着してふらふら息を切らしながらやっと立っていた。ぼくに気づいた彼は、ぼくの方に近づいてきたが思うように歩けず、ぼ

くに寄りかかるように倒れかかった。楽しいことでもあったのか、笑いながらぼくに話しかけてきたが、少しからんでいるようでもあった。

九月二三日——午前六時三〇分

マリリン・モンローと蛇

校庭か公園のような所に一軒のガラス張りの建物がある。アメリカの建物のようだ。店内の壁にはマリリン・モンローのポスター（白黒写真）が沢山貼ってある。ポスターのバーゲン・セールらしい。店主は成城の吉田書店のおじさんである。ポスターは見る見るうちに売れていった。ぼくが店内に入った時はあと二点で終りだという。しかもその二点は、一つはポスターではなくマリリン・モンローそっくりの女性そのものが商品なのだ。値段を聞くと三〇〇ドルだ。そして他のもう一つもモンローのそっくりさんで、彼女は1950年代のドレスを着用しており、値段はたった五ドル。一日一五分だけ家に来てくれ、ポーズをとってくれる。ぼくは買おうか、買うまいかと思案している間に二点（二人）共売れてしまった。

ふと西脇の実家に松岡きっこを待たしていることに気づき、急いで帰宅した。彼女は大きな鼻をしてその先が赤くなっていた。裏にいる母を呼びに行くと、母は一匹の大きな鯉を犬に見せながら、犬の頭をしきりにぶっていた。隣に住む演劇評論家の河竹登志夫さんの庭の池から犬が鯉を盗んできたらしい。犬は頭をぶたれる度にむき出した歯を地面のコンクリートにゴツゴツとぶつ

けて痛そうな表情をしながら怯えていた。ぼくは母に「そんな叱り方をすると恐怖心を与えるだけで躾にはならないよ」と母を叱った。
ふと足元を見ると、そこには二年前行方不明になった猫のシロとクラスメート（高校）の井上孝君が現われた。
場所変って……、小学校の運動場。茶色のガラガラ蛇が細長い四本の足をつけて歩いている。さらに別の所に足つきのガラガラ蛇を背中に乗せて歩く犬。その後をまた青大将を背にした犬。蛇と犬が無限に続く……。
この異様な風景を見ているぼくの方に高校生の一人が一匹の緑色の蛇を投げつけた。蛇はぼくの体の一部をかすって後ろにいた二人の女性の頭の上に落ちた。二人は一斉に大きな悲鳴をあげた。

一一月二七日——午前五時四五分＝自宅
黒い物体とインベーダー

「あそこがゴールだよー」
と森さんが目の前に横たわる山の中腹辺りを指さして説明している。
この森さんという人は「芸術生活」誌にぼくが連載している〈日本原景旅行〉の取材旅行にいつも車の運転をしてくれている三〇歳になる建築学科の大学生である。
森さんが指さすゴールと目される場所はまるで額のタンコブのように少し出っぱっており、辺り

CamScannerでスキャン

いような木が、木も生えておらず、不思議なことにこのタンコブから上は濃い霧に被われ、どんよりとした鉛色の夕方の雲と一体をなしていた。どうやらこの山はぼくの郷里にある西脇小学校の正門前の山のようだ。

ぼくとぼくと、もう一人の友人らしき男の二人はこの山の裾にある道をスタートラインとしてタンコブ目指して駆けのぼろうとしているところだ。

「ドン」二人がスタートした。

ぼくはいつか体操の時間に習った息を鼻から二度続けて吸い、次に口から吸い込んだ息をハッ、ハッと吐き出すマラソンの呼吸法を応用しながら一気に駆けのぼった。山の傾斜は三〇度位で、ゴールまでが意外と近かったので、難なく到達したようだ。

次にぼくはやや小高い丘のようなところに別の非常に親しい友人と思われる人と一緒に立ち、眼下に広がる郷里の田園風景を眺めている。この小高い丘が、さきほどの山の中腹にあったタンコブかどうかは定かではない。タンコブから見下す風景ではなくむしろ反対側の町の南に位置する山から見下した風景に似ているが、そうかといってその場所からの正確な風景でもない。

(おや？ あれはなんだろう⁉)

さっきから田んぼの上、一〇メートル位のところにゆらゆらと動く黒い物体が見える。

「アッ!! 円盤だ!!」

ぼくは思わず叫んで、横にいる親友らしき男の横腹を肘でつついて、円盤に見つからないように草木の陰にしゃがむよう指示した。

卵形をやや平ったくしたような円盤はわれわれの位置から二〇〇メートル位の前方にあり、全長五メートル位の大きさのものだった。ぼくはこの円盤を見て初めて気がついたのだが、さっき森さん達と山を駆けのぼった時、山の中腹辺りに、これとよくにた物体があったような気がしてきた。そしてこの円盤はズッとわれわれを監視し続けていたのではなかろうか、とふとそんな考えが頭をかすめた。

ぼくは親友らしき男をその場に残して、あわてて円盤の方に駆け寄ろうとした。すると円盤はスーッと一〇メートル位上昇すると、ぼくが進んだ距離分だけ円盤の方も後ずさりするように移動した。ぼくは内心いよいよ円盤を見たぞ！　という感動と喜びで相当興奮しているようだった。円盤を追うのを止めてぼくは円盤に全身全霊注意をはらって、その一挙一動を観察することにした。間もなく円盤は上昇し空中で不思議なジグザグ運動を始め出した。この動きはまるで愉しくダンスでもしているように見えた。そして気がついたことはこの円盤は、二枚の皿からできているようだった。二枚の皿はちょうどヨーヨーのように中心でつながれ、この心棒は赤く彩色されていた。だからさっき丘の上から見た卵型の円盤とは異なっているようだった。ところがヨーヨー型の円盤を見た瞬間、ぼくは再び驚きに近い感動に襲われた。というのも以前ぼくが夢の中で見た円盤とあまりにも酷似していたからである。夢が今日の出来ごとを予知していたからである。

やがて田んぼから飛び立った円盤はどこかの大きな倉庫の中に入って行った。この倉庫の内部は天井が高く、大勢の人々が忙しそうに働いていた。どうやらここは運送会社のようである。円盤

が倉庫の中に入っていったのを人々は気がついているのだろうか？　それとも気がついていないのだろうか？　とにかくそんなことにはおかまいなく人々はただ忙しくコンテナーを押しながら動き廻っているだけである。

倉庫の中に飛び込んだ円盤はしばらく高い天井付近で浮遊していたが、やがて、フラフラと重力を失ったように舞い降りてきた。そして驚いたことに鉄製のコンテナーに姿を変えてしまった。

ぼくはこの光景をまの辺りに見てあまりの恐怖に今すぐにでもこの場から逃げ出したくなった。この倉庫が円盤の地球への侵入場所であり、ここで次々コンテナーに姿を変えて、地球上の各地にインベーダーとなって運ばれているのではないか？　そうだとすればここで働いている人々は宇宙人なのか、それとも宇宙人に指図されて働いている地球人なのだろうか？　と色々想像をたくましくしている間に、ぼくは円盤の大変な秘密を知ってしまったことに恐ろしくなってしまい、このことはどんなことがあっても絶体他人には公言しない方がいいと自分自身に強く言いきかせながら急いで家路に走った。

一二月八日――午前九時＝自宅

巨大円盤と磁力

外で、

CamScannerでスキャン

「円盤!!」

と叫ぶナッちゃんの声が聞こえたのでぼくはあわてて裏の前栽の方に走っていった。前栽には父の好みの木蓮や梅や木犀など色々の樹木や草花が植えてあり、それらの樹々の間から見える西の空は黄金色に輝き、赤、黄、青、緑、紫と次々にプリズムの色が変化するように、夕空全体が虹色に染めぬかれていた。しかもそこには、太陽と月と星が同時に在った。この光景は超一流の画家の筆によっても表現不可能なほどの凄絶な美しさで、静寂と聖なるものが辺りを支配していた。ぼくは一瞬この息をのむような美しい光景の中でしばし呆然とつっ立ったままだったが、ふと我にかえり、急いで、円盤を捜し求めたが、それらしきものはどこにも見つからなかった。

(きっと円盤は表通りに出た方が見えるかも知れない……)

と思ったぼくは玄関の方に走っていった。ところが表通りに出て空をあおいでみたが、さっき裏庭で見たようなあの美しい夕焼の光景はどこにもなく、空一面ただどんよりとしたまるで深い海の底のような濃紺一色が重っ苦しくおおいかぶさるようにぼくの頭上にあった。

ぼくの郷里の家の南側と東側には長屋が並んでいた。何げなくふと南側に隣接する長屋の屋根越しに空を見上げた時、ぼくは一瞬心臓が凍りつくほど驚いてその場に足がすくんでしまった。

(円盤だ!!)

それはもう巨大というよりほかに表現はない。どす黒い濃紺のしたたるような海に似た空に、黄緑色に透明に光った摺鉢型の円盤が、四五度の角度でジリジリと落下してくるではないか。円盤の直径だけでも何十キロもあると思われるもので、まるで他の惑星が地球に大接近したような錯

覚をおぼえるほどである。この摺鉢型の円盤は月世界からアポロが帰還した時のあの摺鉢状の宇宙船に非常によく似ており、もしかすると、そのものではないかと思われるほど型が酷似している。そしてその巨大な円盤の落下するスピードは無気味なほどゆるやかではあるが、しかしもはや相当地球の表面ぎりぎりのところまで接近していることは、辺りの空気の変化がそのことを証明している。

この巨大な円盤が長屋の屋根の陰にかくれて、ほんの数秒経った時、ぼくの体内は猛烈なショックを受け、それと同時に円盤が落下したと思われる方向に強烈な磁気の力が働き、ぼくは体ごと引き寄せられそうになった。ぼくはやっとの思いで地面に両足をふんばり、なんとか磁気の力から逃がれようと必死になって反対方向に歩みだした。それは泥沼に体を奪われた時のように非常に困難な脱出だった。

日頃円盤を愛し、そして聖なるものと思いつづけているはずのものが、どうしてこんなに恐怖的な存在としてぼくを襲ってきたのかどうしても理解できなかった。

それでもまあなんとか円盤の強烈な磁気からやっと遠ざかることはできたものの、まだ非常に危険な状態が続いていることだけは確かだった。ぼくはこの時、

（いよいよ死ぬんだなあ……）

という自分自身の終末と同時に世界の終末を予感した。ぼくの背後にはすでに十年も前に死んだ両親が、家を後にして、ぼくと同じように逃がれようと必死になっているが、ぼくはもう決してこれ以上逃がれることなど絶対不可能なことだと思った。

一二月一一日——午前一〇時三〇分＝自宅

円盤搭乗員と真赤な肛門

今日も円盤をさがそうとして郷里の自宅の前の道に立って空を見上げていた。空は雲ひとつない、とても美しい淡い青色をしていた。なんだかふと今にも円盤が現われそうな予感がした時、雲ひとつなかったはずの北東の一角にポッンと細長い白い雲が現われた。

（おや？　どうしたのだろう!?）

と思って眺めていると、雲はみるみる外側から、まるで綿菓子が溶けていくように、小さくなっていった。この時ぼくは内心ハッとして、もしやこの雲は円盤の周囲によくできるというホースフィールドと呼ぶ磁気を帯びた雲ではないかと直感した。

（絶対この雲の中に円盤があるに違いない！）

と決め込み、そして祈るような気持で、

（どうか円盤でありますように）

と強い思念を送りつづけた。

雲の変化は次第にスピードを上げていった。そして今まさに雲が消えんとしたその瞬間、とって変ったように、白銀色にまばゆく輝いた葉巻型の円盤の姿が、澄んだ透明な青空の中に出現した。

「空飛ぶ円盤!!」

ぼくの体の中に一瞬電撃的なショックが走った。それは一種の恍惚感といいかえてもいいようなものであった。そしてまたこの鮮烈な光景は、まるでぼくにとっては神の出現を想起させるに充分な感動的な一瞬でもあった。雲一つない澄みきった青空に、くっきりと真一文字に線を引いたように、浮いているこの円盤は金属的というより、むしろ蚕の繭のような柔かい光沢を放ち、物体自体が生命ある聖なるもののように感じられた。円盤の位置は相当上空にあったが、推測するところによるとかなり巨大な母船型の円盤であることがわかった。

ところがその母船はほんの二、三秒で、フッとかき消すように、青空の中に吸い込まれて、後にはもと通りの青一色の空が静かに広がっているだけだった。

「アッ!?」

と思わず声をあげたぼくは、あわてふためいて、広い大空を血まなこになって捜しまわった。この驚きようといったら本当にぶざまなものだった。そして今しがたぼくが眺めていた方角とまったく反対側の南西の空に、まるでぼくが気がついて振り返るのを待っていたかのような、また気のせいか、ぼくを見下しているようにも感じられる円盤を、再び発見した時は、ぼくは思わず、

「いた!!　いた!!」

と声を上げてしまったほどだ。円盤は今度はホースフィールドに囲まれず、裸の状態で鈍い金属的な光を発光しながら、静止していた。ぼくは一刻も早く家の中にいる誰かを呼ばなければと思い、あわてて、玄関に向って駆けた。

その時、上空の円盤はスーッと横に空を切るように移動を始めた。そのスピードはかなり早い。

（一刻も早く誰かを呼ばなければ、円盤が消えてしまう！）
そう思ったぼくは玄関から怒鳴るように妻を呼んだ。この時の妻のイメージが不思議に母親のイメージとダブっていたのはなぜだろう。——まあこのようなことはどうでもいい。とにかく妻が外に出るまでの時間がいやに長く感じられた。彼女が外に出て空を仰いだ時は、さきほどの円盤が、物凄いスピードで大空を自由自在に駆け巡っている最中だった。スピードがあまりにも速いために、円盤自体の形がつかめず、ただ白い長い尾だけが青い空に無数の線画を描いていた。そのうちこれらの沢山の線が突然一か所に集合し、尾の沢山ある巨大なくらげのような形に変形し、空いっぱいに唐草模様のようなこれまた巨大な図形を描いたが、それはまるで極地のオーロラ現象を見ているような感動的な光景であった。どのくらいぼくはこの大空のページェントを眺めていたのだろう。ほんの数秒間の出来事だったかも知れないような気もする。
ふと気がつくと、いつの間にかぼくは家の前から離れ、どこか全く別の場所に立っていた。妻も一緒である。そして目の前に大きな円盤が着陸していた。ところが、このことは感じるだけで実際肉眼には円盤の姿が見えない。この見えない円盤から搭乗員らしき男がぼくの前に現われ、円盤に乗るよう勧めた。見るとこの男はイギリスのロックシンガーのデビッド・ボーイである。彼とはまんざら知らない関係ではないので彼が円盤の搭乗員であることに、ぼくは安心して円盤に乗ることにした。透明の円盤だったが、どこに入口があるのかは感じですぐわかった。まるでモノレールにでも乗るような気分で、ぼくは円盤の中にひょいと飛び乗った。入口はエレベーターのドアーのように左右に自動的に開いて、ぼくを中に入れてくれた。円盤の外には妻と他に二、

CamScannerでスキャン

三人の人達とデビッド・ボーイがいた。ぼくの後に続いて妻が開いたままの入口から乗ろうとした時、ドアーは自然に閉じられた。

円盤の内部の様子はこの目でもはっきり見ることができた。ぼくのいるところは丁度六畳位の広さで、内部には素朴なシンプルな形の椅子以外には何一つ装飾らしいものは見当らなかった。

入口のドアーが閉められた途端ぼくはあわてて椅子に腰を下した。ベルトも手摺もなく、腰と背をささえるだけのやや丸味を帯びたL字型の何の変哲もないデザインの椅子が部屋の隅に一つあるだけである。ぼくは円盤が急に飛び立つと大変だと思い両手で椅子の底を持ち上げるようにして抱きかかえ椅子に体を密着し、目を堅く閉じた。

椅子に腰を下すなり、円盤は物凄いスピードで上昇し始めた。相当のスピードで上昇しているにもかかわらず、ぼくの体と椅子はピタッと密着し、全くシートベルトを必要としなかった。

その時、部屋の内部で妻の声がした。一瞬ぼくは、おや!? と思ったが彼女が部屋の中にいるはずがない。デビッド・ボーイは円盤が飛び立つ瞬間に確かに円盤に乗った気配はあったが、ぼくとは別の部屋にでもいるのだろうか?――妻の声は本当に部屋の中でしゃべっているように聞こえるが、実は彼女が地上でしゃべっている声を特別な装置で、この部屋の中でも聞こえるようにしてあるらしい。一種のテレパシックな機械なのかも知れない。

この思いもよらぬ体験にぼくは少々とまどい、不思議な感動と同時に、いくらかの不安も手伝い、何が何だか夢のようで冷静な判断が全く取れなくなってしまった。

(これからぼくは一体どこへ連れて行かれるのだろう?)

と、思った時、上昇していた円盤は急に大きく角度を変え、やはり依然としてスピードは落さないまま、今度は斜めに下降し始めた。ベルトもないのにぼくの体は椅子から転げ落ちるというようなこともなかった。ぼくはやっと安心して、堅く閉じていた両目を開けた。円盤はなおも角度を次々変化させながら想像を絶する高速で飛行を続けているようだ。ぼくはいつの間にか体をささえていた両手を椅子から離していた。

間もなく、目の前に恐ろしく背の高い橋桁が何本も見えてきた。深い谷間に架かった橋の下を円盤が飛行しているのだろうか。ぼくを乗せた円盤はこの橋桁の間を少しもスピードを落さないで、S字形にくねくねと腰をくねらすようにして飛んでいく。ぼくは今にも橋桁に激突するのではないかと、ひやひやしているのだが、これが驚くべき正確さでまるで芸当でもするかのように身をひょいひょいとかわしながら飛んでいくのだからぼくはただただ唖然としてことのなりゆきを見ているだけであった。

それでもたった一回だけ円盤の先端が橋桁の角に一ミリか二ミリかすめてコンクリートから一瞬白い粉が散ったが、別に大したことではなかった。

ぼくはここで始めて不思議なことに気がついた。さっきから外の風景を眺めているのだが、この室内には窓らしいものは何ひとつないのである。では一体なぜ、外の風景がこんなにはっきりと見えるのだろう。つまり、室内が透明になり、まるでぼくの体が円盤になって空中を飛行しているような感覚なのである。しかしぼくの体は何かの強烈な力で椅子に固定されている。ぼくを取りまく壁が見えないので不安だといえば不安だが、別に大気の抵抗感もなくそういう意味では室

CamScannerでスキャン

内にいるのと全く変らずあり、むしろ快適なくらいだ。

このようにしてぼくはかつて経験したこともないような光景に次々に出くわし、まるでＬＳＤのトリップをしているようなスーパースペクタクルズな体験に充分満足しているようだ。次々と展開する光景を少しでも多く記憶に留めたいと努力するのだが、あまりにも目まぐるしく展開するために、いちいち記憶することが非常に困難になってきた。

（ぼくはたった今、想像を絶するような未知の体験をしているのだ！）

このことを考えるとぼくは自分の幸福感が頂点に達し、ついに涙が流れてきそうになった。

（このことは絶対誰にも語れない。いやたとえ語ったとしても、誰一人としてぼくの体験を信じてくれる者はいない。そうだ絶対誰にも語らないことに決めよう）

と、こんなことを心に誓いながら、なお飛行を続ける円盤にすべてを託すことにした。

いつの間にかぼくを乗せた円盤は地底のトンネル内を飛んでいるようだ。炭坑のトンネルのようでもあり、洞窟のようでもある。

（ここは一体どこだろう？）

この地底には誰一人いないが、何かの工場のようでもある。そうかといって近代的な機械があるわけでもない。むしろ原始的な作業場といった方が正しいかも知れない。この洞窟内はあまり明るくはないが、それでもジーッと目をこらしていると色んなものが次々と見えてくる。何やら遺跡のようなものがあるのが見える。いつか写真で見た南米の巨石像だ。どうもインカのものらしい。もしやここはその昔神々の住んでいた都ではなかったのだろうか？　少々暗くて確認できな

いが、洞窟のあちこちに沢山の像があるようだ。

(まだぼくは円盤の中にいるのだろうか？)

室内が透明になって外が見えるため、ぼくは円盤内にいるのか、それとも円盤から降りて外にいるのか、その辺の感覚がどうもはっきり知覚できない。

像の実体がはっきりつかめないまま、あちこちと眺めまわしている間に、ひとつはっきりした石の柩のようなものの側面に描かれた男女の交接の図を発見した。ところがぼくはこのあまりにも人間臭い絵を見て少々失望してしまった。しかし、その反面また安心もした。というのも日頃ぼくは円盤をとりまく諸々の事柄を非常に聖なるものと考えているからである。しかしぼくはこの神々の性の営みの図を見て、

(性なるものは、やはり聖なるものに違いない)

と即刻考えをあらため心に強くこのことを印象づけることにした。

いつの間にか円盤を降りたぼくは、この洞窟の入口近くのややだだっ広い、しかし薄暗く、製材所の材木置場にも見えるし、あるいは炭焼小屋にも見えるような場所で一人の外国人がせっせと仕事をしているのを見ていた。

暗い場所から外に出たぼくはここが一体どこなのかよくわからなかったが、妻やさっきの友人らしき人達がいたので、やっと安心した。しかしあまり早く帰りすぎたので少々がっかりした。また円盤に同乗したわりには少しも興奮していない自分を淋しく感じた。いつの間にかデビッド・ボーイも現われ、ぼくの仲間達と握手し、ぼくもデビッド・ボーイと別れて、家に帰ることにし

た。いつの間にか陽が落ちて辺りは夜の闇にすっかり包まれてしまっていた。
郷里の家の近所に河野さんという木工屋さんがあるが、その家の横が道路から一段と低い、田んぼになっているが、その田んぼの中で、何か白くうごめくものをわれわれは発見した。闇を通して田んぼをのぞきこむようにしてみると、そこには大きなベッドが一つ置いてあり、そして道路を背にした一人の汚れた白髪の外人の老人が全裸になってしきりにシーツに頭を埋ずめ両手でシーツを荒々しく掻きむしり、非常に苦しげに身もだえながらしゃがみこんでいる。しかし老人の全裸の後姿が何んとも醜悪で、しかも股間からは腐ったような肛門が真赤にはれ上ってたれ下っている。この情景をやはりぼくの後から歩いて来ている妻も眺めているかと思うと、この世にも醜い老人の裸が異様なエロチックな臭いをはなった。たとえようのない悪臭が、ぼくの鼻をついてきた。ぼくは思わず息を止めてその場を立ち去った。

一二月一七日——高輪プリンスホテル
柴田錬三郎氏と心中

辺り一面墨を流したような、何んとも現実感に乏しい水墨画のような風景が目の前に展開した。夜の海辺。砂浜に打ち寄せる波頭が、不気味に光る。波の音一つない。この沈黙の風景は一切の時の流れの中に塗りこめられて、凍結したかの如く身動きひとつしない。ここはまさにわれわれが肉体を脱ぎ捨てて、先ず最初に訪れるべき彼岸の地に似ている。

ぼくはこの風景を十万億土も離れた此岸から超望遠鏡で覗いているような気がする。その証拠にこの風景のフレームは妖しく円形に滲んで、さらに奥深い闇の中に溶け込んでいる。望遠鏡の画像中央の波打際には一足の女物の下駄と、男物のマントのようなものが、うずくまって砂と一つになっている。

ぼくの脳裏に一条の閃光が走ったかと思うと、それは音声にこそならなかったが、しかしそれよりさらに巨きな印象がぼくの中心から突きあげてくる精神感応(テレパシー)によって、この浜辺が松江湖畔であり、そしてさらに驚くべきことに、柴田錬三郎氏が心中したことを伝達してきた。

(柴田先生が心中をした!)

ぼくの内部から木霊(こだま)がはね返ってくるように、何度も何度もこの言葉が震動しながらぼくの全体を被いつくしていった。

ぼくは混乱しているのか、落ちついているのか自分でもわからないまま、黒のスーツをとりあえず着なければならないと思った。いつの間にかぼくはずっと以前住んでいた祖師谷の家の中にある洋服ダンスの前に立って、古い黒のアイビー調のダブルのスーツをいきなり着こんだ。しかしズボンが、臑毛がのぞくほどあまりにも短過ぎて、まさかこのまま柴田先生の霊前に現われるわけもいかず、ただただ困った、困ったと思っているだけであった。

CamScannerでスキャン

●一九七四年

CamScannerでスキャン

四月二日——午前六時三十分●自宅

マリア像と惨劇

教室の外で何か異常を感じたぼくは、急いで小学四年生になる長女とともに教室から飛び出し、廊下に面した窓際に駆け寄った。ぼくの他にも何人かの生徒も同時に廊下に出てきた。廊下の窓には鉄の柵がしてあり、外に出ることはできなかった。何人もの生徒が一斉にこの窓際に駆け寄ったために、一番前にいたぼくは後ろからぐいぐい押される形になってしまった。だからぼくの足もとにいる小学四年生になる長女が押しつぶされはしまいかと心配したが、間もなく、みんな静まり、これから展開されるであろう外の光景に、今や遅しとかたずをのんで見守っている。何が始まろうとしているのかは、一向に誰も知らない様子だが、それでも、何かとても素晴しい光景が展開するだろうという予感がみんなにあったことは確かだった。だからぼくはこの機会にぜひ長女にも見せておくべきだと思い、彼女を窓際の一番いい場所に立たせた。鉄の柵を握りしめている両手が少しずつ汗ばんで来るのを感じた。

窓の外は美しく晴れわたったどこかヨーロッパの田舎の風景といった感じで、われわれが覗いている窓は相当高い場所にあり、風景を眼下に見下しているようであった。目の真下には若草色をした広大な丘が左手から右手にゆるやかに放物線を描いており、この丘の向うには濃い緑色の森がしばらく続き、森の背後は二つの山で囲まれた深い谷になっていた。このV字型に仕切られた空間からは遥か彼方にまで連山が何重にも連なって見え、決して日本では見ることのできないよ

うな雄大な大自然の風景を展開していた。
このような風景をしばらく眺めている間に、ふと気がついてみると、手前の丘の上空にきらきらと小さく光る光の粒子のようなものが現われた。それは最初澄みわたった空の青さと同化してはっきり見ることができなかったが、この光の粒子の数が増すにしたがって少しずつはっきりしてきた。一つ一つの光の粒子は空中でぴょんぴょん飛び跳ねているようで、やがてこれらの無数の粒子は虹色に輝き始めた。
(これは一体何だろう?)
と思った瞬間、無数の輝かしい光の妖精達は、見事なマリア像を造り始めた。
(マリア様だ!!)
あまりの驚きに声は喉にひっかかって音にならない。まるでスーラの動く点描画を見ているような光の芸術作品だ。誰が見てもマリア像だとすぐには解らないかも知れないが、これは疑うことなくマリア像なのだ。それが証拠に次の瞬間、マリア像はイエス・キリストに姿を変えた。マリア像を形成していた光の粒子が一瞬一か所に吸収されていくように集まったかと思うと、ぱっ!とかき消されてしまった。それと同時に、イエス・キリストの巨大な胸像が空中に出現したのである。眼下に見えるなだらかな丘の上にほとんど覆いかぶさるほどの巨大な像である。このイエスの像はもはや光の粒子からはなっておらず、もっと実像に近い姿であった。ただ胸から下は姿は見えず、胸像だけが丘の中空に浮いているのだった。髪の毛は頭の中央で左右に二分され両肩に美しい三角形のウェーブをたらしていた。そして鼻の下の髭は顎鬚とつながり、頭髪と共に褐

体を焦がしていくかの様な光を浴びたように、あの光が輝いていた。僕はんもうた
を払っていたが、その世界に触れた瞬間だけはわれわれの方に向けられたままである。
れていたもうひとつの世界が、われわれの瞬間に出現した時間は、マリアの消滅と同時にほんの一瞬で出来事へと変わった瞬間に、けっしてはてしない巨大な箱に姿を変えていった。箱の形をしていたそれは、さらに建物がそびえていくようにみるみる大きくなった。やや長い箱の形をした、力が込められたものだった。あらゆる方を見渡した色彩でメキシコの民芸品のような装飾をまとっていったけれど、ところがそれはマリアがキャンバスになり、メキシコ人がこのように見合わせたかのようにしていったかのように描かれてしまったのか。ぼくの想像力ではとてもその謎を解けないような気がした。

その空の側面の風景の中に描かれている厚色のまばらしい箱は、ぼくに色々の楽しいことを期待させてくれた。

ところがそんな空想もつかの間、今まで陽光を浴びて美しく輝いていた風景に一瞬暗い影がさしたかと思うと、青い空がにわかに灰色に変化し、どこからともなく暗雲がたちこめ、見る見るうちに辺りは夜のように真暗になり、風を伴った雨が降り始めた。雨足はますます激しさを増し、ついには嵐になってしまった。空の雲間から青白い光の矢が幾重にも屈折し、それがまた何本もの枝葉に分かれ、地面にたたきつけるように落下してきた。辺りの空気を震わすような大音響がぼくの脳天から足の裏を走り抜けていった。

稲妻が天地に橋をかける瞬間そのものが静止して視界を青白く染め抜いた。この時間が止った

1974年４月21日――マリア様と稲妻

CamScannerでスキャン

瞬間あの巨大な箱の上部がささくれだって大きな真黒な口をぱっくり開けているのがぼくの目に映った。すさまじく吹きつける風雨に箱の上部はすでに半ばちぎれてしまっている。まるで藁屋根の翼がちぎれて飛ぶようにどんどんはがされて行く。箱の中身は夜の闇よりさらに黒く、底なしの闇であった。

さっきまでのあの神聖な光景がたちまち恐怖と不安と絶望、そして荒々しい怒りに満ちた状景に変容してしまったのだ。

鉄格子つきの窓から離れたぼくは逃げるようにして、もとの教室に戻った。教室には誰もいないように思えたが、突然教壇の上で一人の女が踊り始めた。女は黒い衣裳を身に纏い官能的な表情としぐさで、どうやらぼくを誘惑する積りらしい。女は教壇の上からぼくがいる足もとの床の辺りまでにじりよってきた。どこかで見た女である。そう、女優の加茂さくらだ。その彼女がぼくに燃えるような視線を投げてくる度にぼくはさっきのあの窓外の聖なる状景を想起し、とてももう一歩勇気がでないのである。ぼくの顔の中に彼女に対する無関心の表情を読んだ加茂さんは、踊ることを止めようとした。すると彼女はぼくからすーっと急に遠ざかって行くような気がしたので、ぼくはあわてて、心の中で、

(止めないでくれ！　もっと続けて！)

と叫んだ。もう一度アタックしてくれればぼくは彼女の中に入ることができると思ったのに、彼女はまるで潮が引くように情熱の炎を消していった。

そして彼女は、

「もう知らん！　止めた！」
といって、この場からふっとかき消すように姿を消してしまった。

五月五日——午前三時三七分＝自宅

母の幽霊と猫

ふと気がついて下腹部を見ると勃起したペニスがズボンの中から腹部に垂直に立ってズボンとシャツの間からその頭部を覗かせている。このことに気がついたぼくはあわててそれをズボンの中に押し込むようにして、
「トイレにでも行ってこよう！」
とみんなにわざと聞こえるように言って、この場を立った。
どこかの家の大きな日本間の一室らしい。二十畳もあろうと思われる畳の部屋には沢山の人達が寝そべっていたり、あるいはあぐらをかいたりして、何の用があるのか、とにかく集まっているのだ。この人達はぼくが現在出演しているＴＢＳの連続テレビドラマの「寺内貫太郎一家」の出演者のようでもあり、あるいはもうすでに亡くなった親戚の人達のようにも見えるのだ。
トイレに立ったぼくはいつの間にか実家の縁側にいる。ところがこの縁側にはどこから運ばれてきたのか家具や荷物が山積されている。ぼくはこの山のような荷物の間に便器があるのではないかと思って、捜し廻っている。いくら捜しても便器が見つからないのでぼくはついに女房を呼ぶ

ことにした。
疲れた女房はいつの間にかぼくの母になっている。山積された荷物の一つに腰を下した母は、
「この白髪一本抜いてんか」
と、自分の頭髪のなかから一本の白髪を選び出して、ぼくに頼んだ。ところが、その一本に手が触れた途端、母の頭髪はすべてまっ白になってしまった。
「これ一本くらい抜いても仕方ないよ」
と、ぼくは母に白髪を抜くのを止めるようにいった。母は白髪になってしまったことを非常に気にして、
「染めたらどうやろか？」
と、聞いてきたので、ぼくは、
「白髪の方が奇麗だからこのままにしておいた方がカッコーいいよ、でももし染めるんだったら若い娘のように茶色に染めたらどう？」
と、ぼくはトイレのことなどとっくに忘れてしまって母とこんな会話をかわしていた。
と、その時、もうひとりの母が縁側の隅に突然現われた。
（アッ!!）
と、声にならない声をあげたぼくは一瞬金縛りになったまま身動きひとつできないほどの強烈な恐怖感に襲われた。
（母の幽霊だ!!）

今まで話しあっていた母はもうすでに消え、幽霊としての母だけが、目の前に立っている。母は真白になった髪を奇麗に後にとかし、身だしなみもきちんとしている。ただ母の表情がとても冷たく、ぼくをキッ！　と睨みつけている。

（なぜ母が幽霊になって現われたのだろう!?）

ぼくはこわごわ母の幽霊に近づき、

（どうして出てきたの？　何か用があるの？）

と、尋ねようとしたのだが、あまりの恐怖にどうしても言葉が声にならないのだ。それでもぼくは思いきって、

（何かいいたいことがあるの？）

と、口唇だけを動かして母に伝えようとした。ぼくの口唇の動きを読んでくれたのか、母は大きく頭を下げてうなずいた。この時母の姿は真白になり膝から下は消えて見えなくなった。

そしてさらに次の瞬間母はスーッと小さくなって一匹の猫に変ってしまった。しかしその顔だけは母のものだった。

猫になった母はぼくの衣服の腕を銜えてぼくを台所の方に連れていこうとした。一体母がぼくに何をしようとしているのか、わからないだけにとても怖ろしく、今にも気を失いそうになった。

猫になった母は一言も語らずただぼくを台所から裏口の井戸のある所に連れていった。

その時、家の脇にまるで黒い煙のようにぼーっとした得体の知れない二人の男が立っているのに気がついた。

「誰だ!!」

声をあげても返事がない。

ぼくはこわごわこの不審な男達に近づいていった。本当はこんな男達に関わらずに、猫になった母の幽霊に連れられながら、母のいいたいことを知りたかったのだが、どうやらぼくはこの二人の男に関わらざるを得なくなってしまったようだ。

いくら声をかけても返事がないのでぼくはいきなり若い方の男にブルース・リーばりに殴りつけたが、決定的なパンチが入らなかった。ぼくの片腕の中に猫になった母を抱いていたためにどうも力が入らなかったようだ。ぼくが殴りつけた右腕を取った相手はぼくの拳に猛烈に強く爪を食い込ませてきた。強烈な痛みを受けながら、ぼくは最悪の事態になってきたことを察し後悔したがその時はすでにどうにもならなくなってしまっていた。

七月一日——午前八時=自宅

サイレンと雲状型円盤

サイレンの大きな音でふと目を覚ますと、ここは西脇の実家の六畳の間だった。ぼくは急いで前栽の垣根越しに南の空に目をやった。空はスモッグで汚れているのか、奇妙なピンク色をしていたが、別段火事の様子はなかった。

突然、家の近くからマイクを通じた大きな声が響いた。

「地球の皆様、ただ今宇宙人が円盤で来襲中です。あわてないで冷静に判断して行動して下さい!!」

一瞬ドキッ! としたが、もし円盤が来ているのなら、ぜひ見たいと思って、母を連れて急いで、外に飛びだした。空を見上げると、そこには月の四倍もあろうかと思われるドーナッツ型の白い雲状の円盤が五機V字型に編隊を組んで東の方から飛来してくるところだった。ぼくはこの五機の円盤に目をうばわれていたので気がつかなかったが、他にも沢山の円盤が来襲しているような気がした。

「円盤だ!!」

と思わず叫んだぼくは、両手を高く拡げながら円盤の方へ走り寄った。

この時ぼくの心に響いたことは円盤の大挙来襲は、地球の滅亡から人類を救済するための計画で、いよいよその時が、来たのだということだった。ぼくは一心に円盤に救いを求めた。ぼくの横にいる母も、そのことを感じたのか、頭上の円盤に手を合わせて祈り続けていた。

地上ではなおも先ほどのマイクの放送とサイレンの音がますますけたたましく鳴り響いている。この胸騒ぎのする音を聞いていると、ぼくも何やら不安になり、円盤が恐怖の対象に変っていくような気がした。しかし、円盤に対する考え方は急変できず、たとえ円盤に襲撃されてもぼくは円盤を信ずることに心を固め、空に向って大声で、

「円盤さん!! 降りて来て下さい!!」

と叫んだ。

すると円盤は空から舞い降りて来た。さっきのドーナッツ型の雲状円盤は下降を始めるといつの間にか二枚の皿を中心で連結したヨーヨー型の赤と白に配色された円盤に変った。こうしていざ目の前に降りて来ると、多少の恐怖はあったが、それより嬉しい方が強かった。

そしてそのうちの一機がぼくの背後に降りて来た。直径三メートル位の、円盤のかたわらには搭乗員の一人と思われる宇宙人が立っていた。アダムスキーが会見したような美しい金髪の西洋人風の宇宙人を想像していたぼくは、このあまりにも日本人そっくりの宇宙人に少しがっかりした。というのも、この宇宙人の顔が知人の編集者の片岡さんにそっくりだったので、どうも現実感がないのだ。

宇宙人はいったんぼくの家の前の垣根の影に姿を消したが、再び現われ、ぼくにいきなり小石を投げてきた。びっくりしたぼくはこの小石を両手で受けながら、少し声を大にして、

「危ないじゃないですか！」

と、いうと、

「すみません。われわれの惑星の引力と地球の引力が違うものですから、ひょいと投げたものがこんなに強くなってしまって……」

といいながら、さらにもう一個の小石を投げて来た。ところがこれもさっきと同じようにぼくには強く感じるのだった。

（ちっとも分ってないやつだなあ！）

と思いながら、彼の次の行動を待っている時、再びあの大きなサイレンの音が聞こえて来た。

七月七日――午前五時三〇分＝自宅

円盤とあんこの花

外に円盤が飛来してきているような予感がしてぼくと母は急いで寝巻の上に何だか変なごわごわした洋服を着て家の外に飛び出した。その時一人の頭を丸めた背の高い男が現われて、ぼくの前に手の平を差しだした。ぼくはこの男が夕食の出前の料金を取りに来たような気がしたので、ぼくはポケットの中にあった小銭を彼の手に渡した。すると彼はどこかへ去っていったが、どうもあの男はグル・マハラジから知恵を貰ったはずのプレミィのようである。

男が消えたのでぼくはさっきから気になっている空を見上げた。すると予感が的中したのか、大きな円盤が数機ものすごいスピードで、頭上五〇メートル位のところを近くの朝鮮人部落の方向に飛んでいった。直径五メートルはあろうと思われるこれらの円盤の底部には黒い太い線で何やらシンボルのような図形が描かれていた。

とっさにぼくはこの図形には何か宇宙人と地球人の秘密が隠されているような気がしたので、何とか、正確に見究めようとして、円盤の後を追っかけていったが、何しろあっという間に飛んでいったので、図形を確かめることは出来なかった。

（ついに円盤が去ってしまったか……）

と思って、何げなく後をふり向いた時、第二のグループの円盤がやはりものすごいスピードで飛

んできた。これらの円盤はさっきの形とは違い、真赤なくらげのような半透明のもので、夜空に美しくとけこんで見えた。次から次へとあまりにも沢山飛んでくるので、ぼくは思わず、

「すごい!!」

と叫んだ。

そしてこれらの円盤も第一のグループと同じように朝鮮人部落に侵入していった。最後に飛んできた一機は朝鮮人部落に通ずる道の中央辺りで自転車に乗っている人の上に降下し、アッという間に小さいドラムになってしまい、自転車の荷台の上に収まってしまった。

（何だ！　つまんないなあ……）

と思ったぼくは、再び本物の円盤を捜そうとして朝鮮人部落とは反対の方向に歩いていった。長屋にはさまれた道路を通り過ぎると、そこは見透しのいい田畑と前方に山が見える風景なのだが、いつもの様子とは少し変って、そこはまるで箱根の強羅のようにあちこちの岩肌の間から煙が噴き出しており、白い地肌が基調ではあるが、まるで辺りは虹のように色とりどりの色彩が散らばって、何とも表現しがたい美しさと不気味さを漂わせた幻想的な風景を展開していた。夜にもかかわらず、この風景だけは真昼間なのである。現実の風景というより、まるで霊界の風景といった方が正しいかも知れないが、とにかくかつて体験したことのない光景であることだけは確かである。

ぼくはどこからともなく臭ってくる硫黄の臭いをかぎながら、しばらくこの奇妙な風景を眺めていたが、いつまでたっても円盤もでてきそうもないので、再び長屋にはさまれた道を引き返し、

家の前まできた。家の前の垣根には何とも奇妙な花のつぼみのようなものをつけた植物が植わっており、誰かがこの植物の説明をしていた。花のつぼみと思われるものはどうやら、おはぎのあんこのようなものでできており、ぼくにはこれが何を意味しているのか、どんなに頭をひねって考えてみてもさっぱり判らなかった。

八月一五日——マリンアベニュー八七四の借家バークレー（カリフォルニア）
啓示と光

西脇の自宅の前。眩しい陽差が辺りを黄金色に染めている。ぼくは誰ともつかない人物に、今しがた受けたばかりの宇宙からの啓示を語り伝えている。何者かがぼくの口を借りて膨大な宇宙の真理を語らせているのだ。とても早口だ。語りながらそのしりから言葉を忘れていく——。それに従って辺りの風景が白く霞んでいくように思えた。「人間を含む全ての万物の生命の根源は光から発している」
この言葉だけ不思議と記憶していた。

一二月頃——自宅

藤原さんとUFO

夢のビジョンはなし。印象だけ。北海道の藤原さん！
アメリカに三〇〇。日本に六〇〇。これは三〇〇万とも六〇〇万ともとれる。UFOが飛来する数のように思えたが……。

CamScannerでスキャン

三月一日——午前六時
ジグザク飛行とテレパシー

実家の近くに駄菓子屋がある。その前に立ってぼくは空を仰いでいる。青空の中に白い細長い雲が三つ縦に並んでいる。その近くを十二機のＵＦＯが編隊を組んでゆっくり飛んでいる。と突然ＵＦＯの編隊は物凄いスピードで降下したかと思うとぼくの頭上二〇メートルのところをかすめて隣村の下戸田の方に飛んでいった。ＵＦＯの大きさは四、五〇センチの小型円盤だった。ぼくはＵＦＯの後を追って走った。ＵＦＯは明らかにぼくの意志をキャッチしているように思えた。ぼく〈想念を送れば通じるかも知れない〉と思ったぼくは走りながら、〈ジグザグに飛んでみて下さい〉と心の中で念じた。編隊をパッとくずすとＵＦＯは思い思いにジグザグ飛行をやってのけた。テレパシーが通じた！　ＵＦＯが傾いた時、アダムスキー型ＵＦＯであることがわかった。ＵＦＯの周辺はホース・フィールドによってバリヤ（壁）ができていたので、アウトラインは陽炎のように揺れ動いて見えた。

ＵＦＯとぼくの周波数は完全に共感し、一体化しているように思えた。ゆるぎない親密感が主体と客体を完全に統合してしまっていた。ふとぼくは彼等に自分の望みをお願いすれば叶えられるような気がした。〈どうぞぼくの我欲を取り除いて下さい。そしてぼくの魂を正しい方向に導いて下さい〉。手を合わせて叫んだ。ぼくの想念に反応を示した一機のＵＦＯはまるで小鳥が舞い降りるようにしてぼくの肩に止まった。全身を至福の感情が駆け抜けた。ぼくは今の言葉を口の

中で何度もマントラを唱えるように繰り返しながらＵＦＯと一緒に走り続けた。

三月八日――午前一一時一五分＝自宅
夜の岩壁と秘密事項

夜の海に突き出した岩壁の上には沢山の人々が寝そべっている。高校のクラスメイトの面々に混じって、ただ一人北海道の藤原さんがいる。ぼくの横で他の連中と同じようにごつごつした岩肌に身体を横たえている。

ぼくは彼からさかんに宇宙人のことを聞きだそうとしている。彼は有名な宇宙人とのコンタクティーである。

「宇宙人に関する最新情報を教えてよ」

「ほとんどが秘密事項だから……もし横尾さんがこのことを知ったら、あまりの驚きにショックを受けるかも知れない」

「それはぼくだけが驚く内容？」

「そうではなくて、精神的に未熟な人々には大きな打撃になるでしょうね」

「そういう意味じゃぼくだって未熟だ……もし教えてくれればぼくだって精神的に高い境地を目ざそうとするから……」

「………」

四月二六日——午前八時・自宅

福田副総理とゲイ・ショー

神戸の六甲山の麓に立っている。六甲山はまるでヒマラヤのように高く、神の座のように白く透明に輝いている。ぼくの脳裏をふと掠めた光景は、その山が崩壊して神戸の街がその下に埋まっているところだった。

それにしても余りにも高過ぎる、どうして登ればいいのだろうと思っていると、次の瞬間テレポートしたかのように、ぼくは頂上近くの回転展望台の下にいた。展望台から数人の幼児が次々と下に飛び降りている。何んと危険な遊びをしているのだろう。幼児達は喜々とした声をあげて、止めようとしない。もっと近づいて彼等の様子を見たいと思ったら、すでにぼくは展望台の中の螺旋状の階段の途中にいた。ぼくの横に若い恋人が一組抱き合っていた。

しばらく階段を昇っていったが、あんまり汚いので屋上まで昇るのを止めて、途中の出口から外に出ることにした。出たところは山の中腹で沢山の出店があって人で賑わっていた。右手に細長い建物があり、その軒下に人が集まっていた。何でも福田副総理が来るというのだ。やがて数台の車が到着し、沢山の人々が車から降りて、建物の中に入っていった。ぼくには誰が福田副総理かわからなかった。車から降りた人々の中にぼくは柴田錬三郎氏の姿を見つけたので、「先生！」と声を掛けた。先生は何もいわずに黙って建物の中に消えた。

そのうち福田さん達が再び建物の中から出てくるだろうと思ってぼくは外で待つことにした。そ

CamScannerでスキャン

こへ二台の救急車が現われた。車体の白と屋根の赤ランプが非常に印象的にぼくの目に飛び込んできた。恐らくカムフラージュのための車で福田さん一行が乗るのだろう。ぼくは救急車の後の開かれたドアから中のソファー兼ベッドを眺めながらそう思った。間もなく建物の中から人々が出て来て二台の救急車に分乗した。だがぼくはまたしても福田さんを発見することができなかった。救急車が去った後、ぼくは建物の中に入っていった。長い広い廊下に面していくつもの部屋が並んでいた。その中の一室に入った。部屋の中には日本髪を結った一〇人ばかりのゲイボーイが踊っていた。選ばれた者だけがこのショーを観ることができるそうで、ぼくもその一人だとわかった。靴を脱いで座敷に上った時、突然靴下の悪臭が臭ってきたのでぼくは急いで靴下を脱いだ。靴下だけでいいのにぼくはパンツまで脱いでいた。「横尾さんどうしたの?」という女の声で後を振り向くと、そこには三社連合の渋江さんが立っていた。ぼくは返事に困って、足下のパンティを穿こうとしたが、それはいつの間にかぼくの事務所の山本嬢の黒いパンティに変形していた。入口はゲイショーを一目観ようとする若い女性で鈴なりになっていた。

六月二三日——自宅
トンボの羽と赤茶けたサソリ

西脇。玄関の外の石床が明るい陽差しを受けて眩く光っている。そこにプラスチック製の昆虫が落ちている。一つは四枚のトンボの羽。もう一つは赤茶けたサソリ。トンボ羽とサソリを拾いあ

げたぼくは、サソリの背にトンボの羽をくっつけてみた。するとこの奇妙な形をしたプラスチックの昆虫はいきなり生物と化してパクパクと飛び立った。
どこからともなく一匹の猫（どうやらぼくの家の飼猫のようだ）が現われた。猫は昆虫の後を追った。昆虫は上手にいちじくの木の枝の間を抜けていった。昆虫が猫に殺されないためにぼくは猫を家の中に閉じ込めた。
昆虫は地面を這ったり、飛んだりした。手に取ろうとするのだが、ぼくはどうもこの見慣れない姿が気持悪くてなかなかつかまえる気にならない。

七月二日

夢と現実

渋谷の栄町通りの坂を昇っている。どうしたことか両足の膝が重く、足を前に出すのがやっとだ。以前神戸にいた頃、これと同じ症状になったことがあったっけ……。
いつの間にか坂は路地になり、アパートの階段にさしかかった。階段を踏みしめる足に力が入らず昇りつめるまで時間を要した。階段の途中まで昇った時、上の方で弟の政博の姿が走り抜けたように思えた。昇り切った所の足場は狭く、立っているのがやっとだ。下は広い居間。西洋風のホール。
階段の頂上だと思った所が実はホールの中央に建っている石の柱の上だった。目が眩むような高

さ。思わずしゃがみ込んだ。恐る恐る下を見る。柱の周囲は人間の高さにカーテンで仕切られている。更衣室のように。中に一組の男女。映画に出てくるような美男美女。二人は抱き合っている。柱の上のぼくの存在には気づいていないようだ。そのうち彼等は露骨な姿で愛し始めた。お互いの肉体を貪るように。

ぼくは見ない方がいいと思った。というより気づかれるのを恐れた。それにしてもどうにかしてぼくの置かれているこの状況を切り抜けなければならない。足元が震え、身体が揺れだした。真逆さまに墜落するかもしれないという恐怖感。いっそ墜落した方が恐怖感から解放されるかもしれない。そう思ったが、勇気なし。墜落は留まるより怖い。

ふと脳裏を掠めたのは〈これは夢ではないか？〉ということだった。そう思うといよいよもって夢に思えてきた。夢だから飛び下りても安全だ。〈だが待てよ、もし夢でなければ——〉。迷いが生じた。

しかし、夢か現実かを確かめる必要がある。冷静な判断を要す。〈このような奇妙な状況は夢に決まっている。ぼくの肉体はベッドの中だ。柱の上で怖がっているぼくはぼくの意識だ。これは幻想だ！　だから飛び降りても平気だ。ホールの床に落ちる瞬間に目が覚めるにきまっている！〉

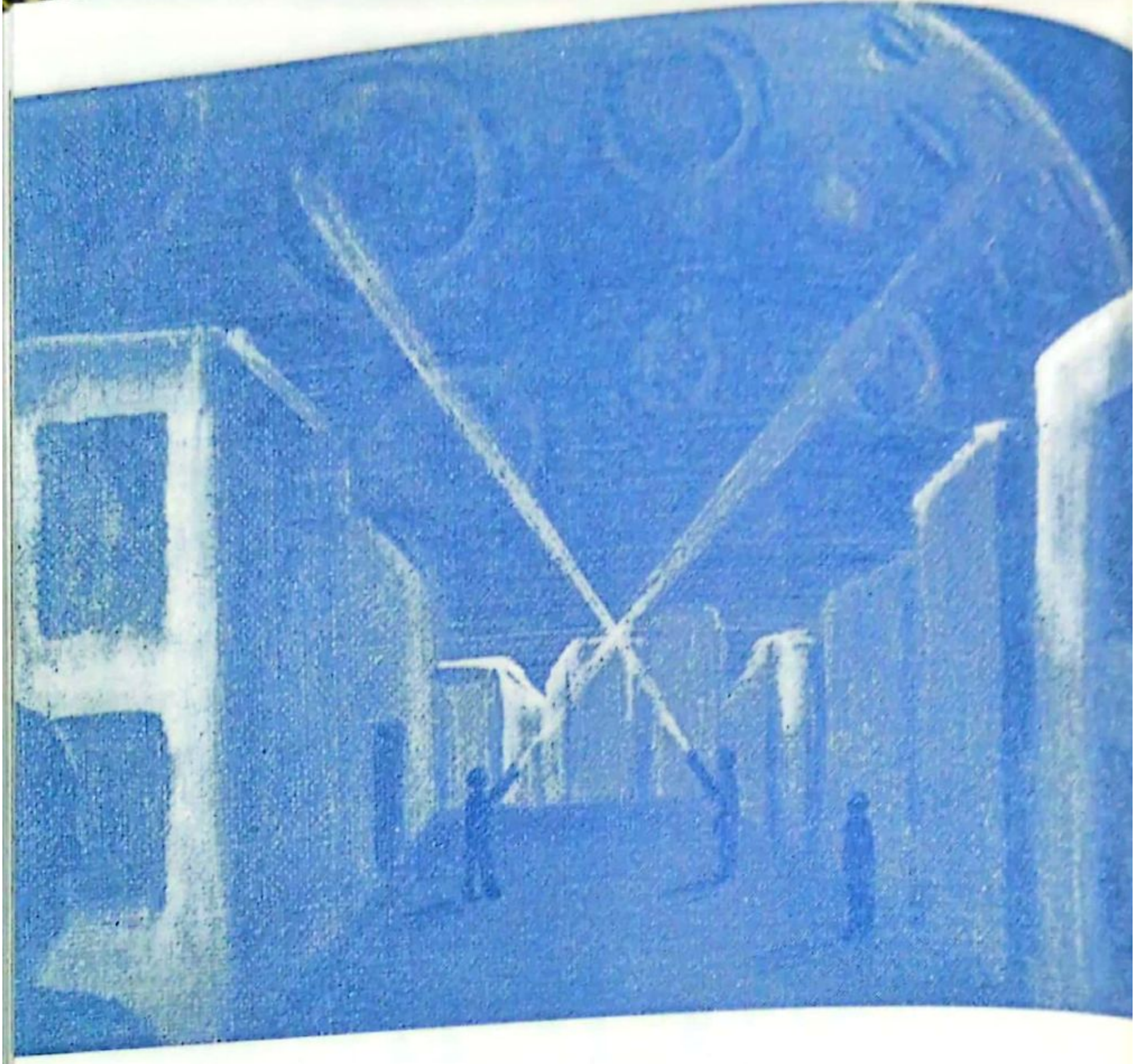
だがもしぼくの判断が誤まっていれば大怪我か、死ぬ。〈どうすればいいんだ！〉

七月五日——自宅

懐中電燈と巨星

西脇駅前の目抜き通りに消防署がある。消防署といっても無人で消防車を格納した車庫と火の見やぐらが立っているだけだ。西脇の町は夜の九時にもなれば人通りも絶え辺りは真暗になる。消防署の前の道路で数人の黒い影が蠢くのが闇を通して幽かに浮かび上っている。突然彼等の中から数条の光線が夜空に向って放たれた。それらが懐中電燈の光であることはすぐわかった。光線は驚くほどの高みに達した。星一つない夜空はどんより曇っているように思えた。空に向って放たれた光線は雲にまで達しているのか、数個の大きな白い円光が上空で揺らめいている。しかし目が光に慣れるに従って、円光の中に映し出されているものがとんでもない物であることに気づき、ぼくは驚きと恐怖のためもう少しでその場にしゃがみ込んでしまいそうになった。円光が獲えた物は雲ではなく、巨大な惑星の地表の一部だったのだ。地球の一部としか思えないほどの距離に接近した巨星が視界いっぱいにのしかかり、今にも地上を押し潰さんばかりだった。まるで、その存在を闇の中に隠し、地球と人類の様子を幽かに監視しているかのように思えた。それにしてもいつの間に地球にそれほどまでに接近したのだろう。夕刻にはそこには何もなかったというのに。

このようなかつて人類が経験したことのないような緊急事態が発生しているのにもかかわらず、町はいつもと変らず静かに眠っている。懐中電燈を照らしている数人の黒い影とぼくだけが間も



1975年7月5日——懐中電燈と巨星

なく過ぎようとしている世の終りの証言者として立ち会わされているかのようだ。次第に恐怖が胸を絞めつけ始めた。

八月四日——観方ー物像山（大分日分の夜）

手紙と時間

夢のビジョンの記憶が全くない。ただ一通の手紙だけが印象に残っている。

観念1——現在ぼくが存在しているのは単なる偶然ではない。ぼくを生んだ両親、その先祖に至る人間関係と、もうひとつはぼくの前世。そしてそのまた過去世。そういった諸々の事柄の結果とぼくは無縁ではない。

観念2(A)——われわれが日常知覚経験している時間の概念は正しいものではない。時間はもっと自由自在なもので個人的だ。人の一生に時間の長短はない。

観念2(B)——これからの（未来）の時間は今まで通りに進行しない。一日一日の時間が少しずつ狂ってくる。また同時に季節の順列も狂うだろう。

八月二三日——午前七時三〇分ーまで

ぼくともう一人のぼく

夜行列車の寝台車のベッドのように、周囲がかこまれているベッドでぼくは横たわっている。どこからともなく弱光がぼくの周辺を柔かくとりまいている。

突然目の前に不思議な光景が見えた。横になって寝ているぼくの真前（まんまえ）、五、六〇センチ位のところに、ぼくが今顔をこうして横にしているように、もう一人のぼくがぼくと同じ格好でぼくを見ているではないか。これは一体どういうわけだ。もう一人のぼくがいる？　信じられない。

だが、もしぼくが超越瞑想の三昧（サマーディ）の状態にあるならば、心観（ビジョン）としてもう一人の自分を見ていてもちっとも不思議ではないはずだ。

もう一人のぼくは長髪で長い髭をつけており、その瞳はぼくを凝視したまま口元には微笑さえもらしている。しかし首から下の胴体は見えない。だが、目の前の自分は驚くほど実在感があり、こちらがかえってニセモノではないかと怪しくなるほどであった。

なぜこんな現象が起こったのかぼくには全く理解できなかった。ぼくは自分の存在に自信を失くしそうになったので急いで自分の体を触った。その結果どうやらこちらの方が本物のように思えたが、絶対的な確信はなかった。というのも肉体が果して本当の自分かどうかという疑問が起こってきたからだ。やはり真の自分、つまり真我はどうやら目の前のぼくではないかと思った瞬間、目の前のぼくはその通りだといわんばかりにパッと姿を消してしまった。

もっと長時間真のぼく自身と対面していたかっただけに、突然の消滅が何んとも残念でならなかった。消えてしまったもう一人のぼくの足元には二本の裸の女の足がふとんの中からにょきっと上に向ってつっ立っていた。ぼくはこんなものには全く興味がなかった。

八月二四日――午前四時三〇分・自宅

ジグザグ飛行とコンタクト

空を眺めていた。数機のＵＦＯ出現。大きな輪を描いている。ジグザグ飛行しながら、一機がぼくに接近。いきなり目の前に宇宙人。どこからどうして現われたのか？
親しみのある顔。人のいい東洋人の青年といった感じ。身長はぼくと同じ位？ 彼はぼくに近づいて、「あなたにコンタクトを始めます」といった。次の瞬間宇宙人の姿はなかった。

九月三日――午前四時

夜空と青空

西脇の生家の六畳の間で眠っていた。目を覚ますと夜だった。窓越に見る夜空には無数の星が瞬いていた。そのせいか、月夜のように辺りは青白く光っていた。よほど空気が澄んでいるのだろう。濃紺の空に輝く星はいつもの何十倍も何百倍も美しく、重なり合うように密集していた。
こんな夜にはきっとＵＦＯが現われるに違いない、という確信が起こってきた。どの位夜空を仰いでいたのだろう、ふと気がつくと夜空はいつの間にか昼間の青空に変っていた。ぼくの他に三人の人がいた。一人は以前からＵＦＯとコンタクトしている富士市の佐藤さん。四人で空を仰ぎ

ながら歩いている。やがて青空に少しずつ雲が現われ始めた。いつしか空全体が灰色の雲で覆われてしまったが、われわれの頭上だけが円くぽっかりと穴を開けたように青空が覗いていた。佐藤さんが思わず声をあげて頭上の青空を指差した。見ると青空が薄い靄のようなもので蔽われようとしているところだった。佐藤さんの説明によるとそれはカムフラージュされたＵＦＯだという。ぼくの目にはっきりＵＦＯだとわかったのは、靄のようなものが消えて、その後に底部に三個の着陸ギアーを付けたいわゆるアダムスキー型のＵＦＯが出現した時である。ＵＦＯは全体に薄いベージュ色をしており、着陸ギアーだけが美しいエメラルドグリーンに輝いていた。しかもＵＦＯの内部には人が乗っているのがわかった。人の姿は肉眼では見えなかったが、一種の精神感応によってそのことがわかった。彼等は白い実験服のようなものを着ていた。われわれがＵＦＯを目撃していた時間はほんの数秒の間だった。やがて雲がＵＦＯを包むようにして隠してしまった。

九月一七日——午前八時三〇分＝自宅

水槽と火星人？

どこだかわからないが随分明るい街の中の広場という感じ。そこに砂の一杯つまった巨大なガラス張りの水槽がある。陽の光を受けて砂の一粒一粒がキラキラ輝いている。ガラスの側面にそって蟻が巣を作っている。まだ充分に砂が固まっていないので、いつ何時砂が陥没して蟻の巣がつ

ぶされてしまうか知れない。今のうちに砂を固めてやった方がいいと思ってぼくは砂の表面を手で強く押さえた。強く押さえ過ぎ蟻の巣はたちまち崩れ、蟻どもは砂の中で身動きできない状態になってしまった。蟻が大変だ！　大変だ！　と叫んでいるのがテレパシーでぼくに伝わってきた。

ぼくは水槽の反対側に廻った。そこの砂はすでに固まっていた。砂は上部には大きな空洞ができていた。そして空洞には綺麗な水が溜まっていた。奥は海の底のように青く神秘的な世界に見えた。そしていろんな種類の海の魚が泳いでいた。そんな中で一匹奇妙な生物がいるのに気づいた。くらげ？　火星人？　（頭部が三角形、足が二本）。その生物はぼくに気づいたのかふらふらと水槽の奥に歩くように消えていった。その生物と入れ違いに岩影から現われた一組の男女。二人共きちっとスーツを着用している。水中だというのに呼吸が困難な様子もない。

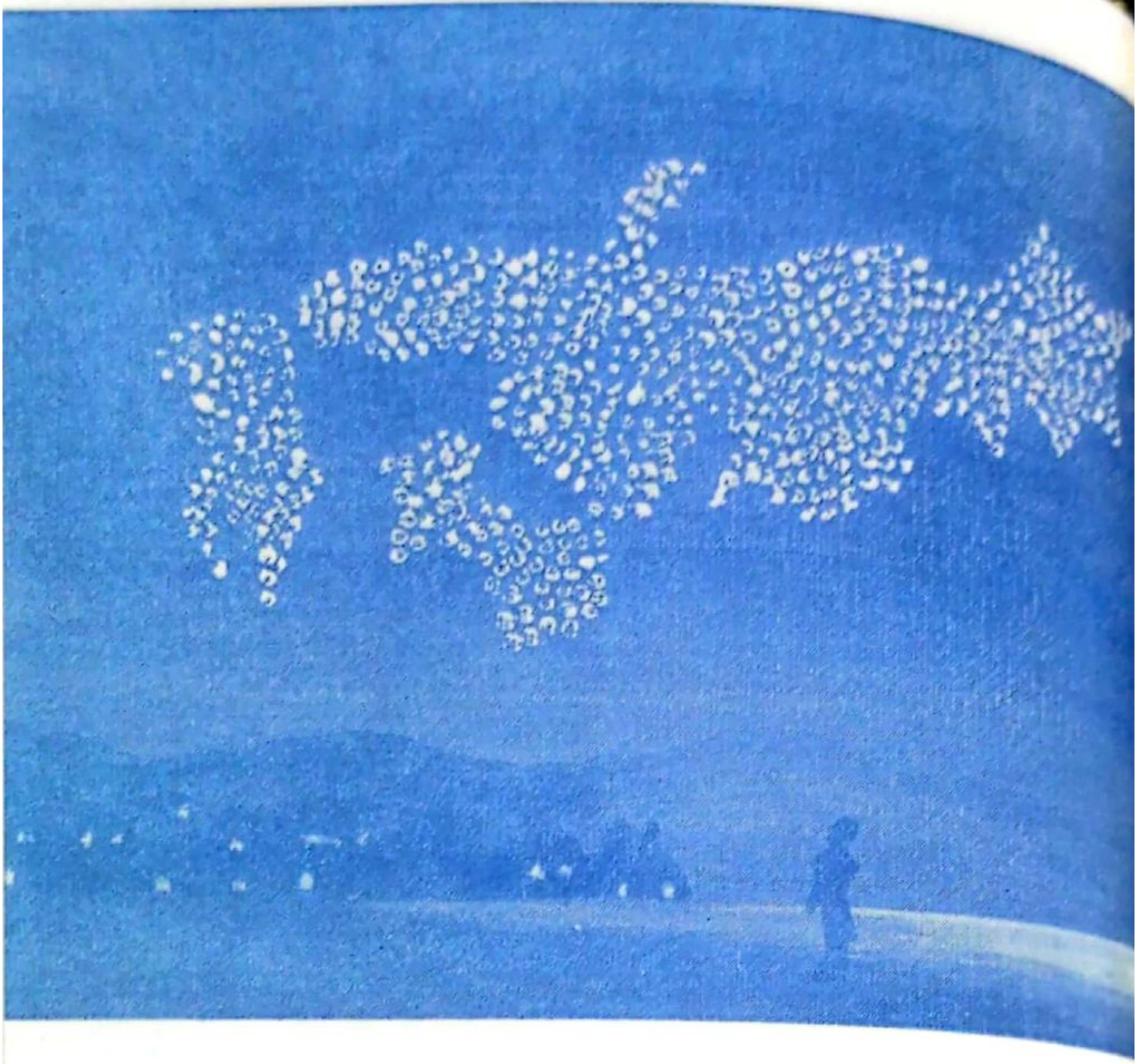
見るとまだ水槽の一部に蟻の巣がある。いずれ水の浸蝕を受けるにちがいない。そう思ったぼくは、再び砂の表面を手で押した。〈これで砂が固まって大丈夫〉。

水槽内に射し込んだ陽光。ゆらめく光の粒。青、白、青、白。

九月二〇日——自宅

海底とUFOの大編隊

ごつごつした岩が突出している崖下の波打際にしゃがみ込んで、ぼくは夕方の海を見ていた。ふ



1975年９月20日——海底とＵＦＯの大艦隊

CamScannerでスキャン

と気がつくとたった今まで足元にひたひたと打ち寄せていた小波はいつの間にか消え、海面はまるで鏡の表面のように平らになり、しかも透明度がうんと深くなり、数十メートルの海底が間近に見下されるようになった。と同時にぼくは体の重心を失い、このまま海底深く真逆さまに墜落していくような錯覚に襲われた。

いや事実ぼくの体はすでに地面から離れ、谷底のような海底に落下する寸前だった。透明度があまりにも深いため、ぼくはつい海水があるのを忘れてしまっていたのである。地面から離れた体は、波一つない海面をまるで宙を泳いでいるかのように何の抵抗もなく進んでいった。やや浅瀬に辿りついた時、ぼくは今泳いで来た方を振り返って驚いた。いつの間にか海水はどこに消えたのか一滴もなく、そこには深い谷間が大きな口を開けていた。

急に夕闇が襲ってきて、辺りは見る見る間に夜の闇の中に溶解していった。ただ一個所前方の高い断崖の頂上の小屋にだけ灯りが点っていた。奇妙な不安感がぼくの全身を走り抜けた。と、その時ぼくの背後に、強列な視線を感じて思わず振り向いた。

漆黒の夜空に無数のオレンジ色に輝く無数の光点の群を見たのだ。夜空の星を一堂に集めてもこれだけの数は集まるまい。ざっと一〇万以上はあるだろうか？　この光点の群がＵＦＯであることは瞬時にわかった。さらに驚いたことには、無数のＵＦＯによって日本地図が描かれているではないか。だがどうしたことか北海道は本州の北部と繋がり、四国は紀伊半島沖に移動している。ＵＦＯの大編隊による歪な形の日本列島は、夜空いっぱいにゆっくりと右から左に移動していた。瞬間的にぼくの脳裏を走ったのは日本の滅亡のイメージだった。ＵＦＯがわれわれに最後通達を

しているように感じ取られた。

ぼくは半ば自失同然、ＵＦＯの壮観さに心を奪われていた。その時、夜空に、ＵＦＯが描いている日本列島に重なるようにして一枚の絵が表われた。それは地殻の変動を示した図であった。それによるといたる所に山が隆起し、また平野の部分にはずたずたに亀裂が走り、関東平野は完全に壊滅していた。ただ岡山と広島の県境だけがかろうじて原型を留めていた。ぼくは神に祈るような気持で、一刻も早く多くの人々に終末が間近に迫っていることを知らせなければならないと思ったが、気が転倒しているためただおろおろしているだけだった。それでもやっと数十人の人人に知らせることが出来たが、彼等が空を仰いだ時にはすでにＵＦＯの編隊は空の端に姿を消し、かろうじて三、四機のＵＦＯだけがゆっくりと移動しているのが遠くで見られただけだった。

九月二五日——午後四時頃・自宅

暗い日とＵＦＯ

ビジョンのない夢。何日も夜のような暗い日が続いた後、ＵＦＯが大挙飛来する。

一〇月一一日——午前五時＝自宅

円盤と霜柱

夕方。西脇の生家の前。美々と二人。彼女が五、六歳の頃だ。いきなり美々がぼくの後方を指差して、「円盤！」と叫んだ。振り向くとぼくのすぐ後の地面に直径四メートル位のチョコレート色をした半透明のゼラチン状の円盤がまるで生きもののように機体を脈動させながら道路いっぱいに横たわっていた。円盤はぼくを見つめているように思えた。

と、円盤は急に回転しながら少し地面から浮き上った。浮上しながら円盤は落下傘のような形に変形していった。地上から三、四メートル浮上したところで物体は突然消えた。と同時に地面には一人の宇宙人がすっくと立った。身長は二メートルもあろうか、肌はやや浅黒い。サミーデイビス・JRに似ていないこともなかった。彼の腕には霜柱のようなものが付着していた。そっと触れてみると、まるで氷のように冷たい。ぼくは直観的にこの宇宙人は南極の地下の基地から来たことがわかった。彼は非常に愛嬌があり、終始微笑を絶やさなかった。彼が初めて口を開いた。

「地上には三〇分以上滞在することが不可能です」

誰かが、「横尾さんと友達ですか？」と彼に質問した。

「横尾さんは友達以上のものです！」

宇宙人の返答にぼくは感激して声も出なかった。

一〇月一四日——午前七時＝自宅

白い棺と小野田さん

郷里の生家の前に田んぼをひとつ挟んで上月さんの家があった。この家の前にぼくを含めた二、三人の人達が集まっている。上月さんの家の誰かが亡くなったようだ。そしてこの家の奥の間に棺が安置されているらしい。しかし、玄関先きからは真暗で、何も見えない。家の中がボッカリと大きな黒い口を開けたようだ。で、玄関を一歩入ると、無限の暗闇の中に吸収されてしまいそうで、異次元への入口を想わせる。

ぼくはこの闇の中に引きずり込まれそうになりながら、じっと闇の奥に意識を集中させていた。すると闇の中で白く動くものが見えた。

と見るうち、そこから白い棺が音もなく、レールの上を滑るように、ぼくを目がけて近づいてきた。何か見えない意志によって動かされているように思えた。そしてこの棺と共に、暗闇の中から亡霊のように、畳一枚もあろうと思われる大きな写真がスッと現われた。そこには軍服姿の小野田さんの全身が写っていた。たとえようのない不気味な感じであった。

ぼくは、腰を抜かさんばかりに驚いて、この出来事を近所の人々に知らせるために走った。が、数人の人達を連れて戻ってきた時にはすでに棺も写真もなかった。ぼくの説明を聞いた人々はみんな家の中の闇を覗き込んでいた。すると全くさっきと同じように、再びあの白い棺が死の闇の中から這いずるようにして現われた。今度は写真はなかったが、全員恐怖のどん底に叩き込まれ、

顔色は死人のように蒼く変って、その場に身体を硬直させたまま立ちすくんだ。
やがて少しずつ恐怖がしずまり、一人の手によって棺の白い布が剝がされた。棺はドブ板で作られた粗末なものだったが、それがかえって不気味だった。ぼくはこの汚い棺をもっと新しいものに取り換えるべきだとみんなにいったが、もとのままの方がいいというのが大方の意見だった。
ぼくはこんな粗末な棺では決して仏が成仏できないように思えた。ぼくは心の中でこの仏が何卒(なにとぞ)成仏してくれるようにと念じ続けた。

一〇月三〇日――午前一〇時＝自宅
墓参りと読経

草月の奈良さん(現フィルム・アート社)と二人で西脇の両親の墓参り。砂利道を自転車で行く。夜。なぜこんな時間に墓参りなどするのだろうと考えながら。ぼくは夜中の墓場を想像して少々怖くなった。
途中銭湯に寄る。後で来るための予約金を払うために。ポケットから五〇円一枚、一〇円三枚、計八〇円。番台のおばさんに払う(西脇の旭湯のおばさん)。銭湯の外に出た時、裸の女の姿が頭の中でちらつく。(どうやら女湯の入口から入ったようだ)。二人は再び墓がある済林寺に向う。
様子がいつもと変り、新しい砂利道がついている。いつの間にか辺りは昼のような明るさに変っている。二人は自転車を降り、手で押していく。道路の左手は崖になっており、下方に家々の屋

CamScannerでスキャン

榎。右手は白い土塀が長々と続く。道路の突き当りには立派な山門。門の前で二人は自転車を止めて中に入った。寺の境内は二人が立っている場所よりずっと低い所に広がっていた。高台から見下すようにして境内の端にある廊下に目をやった。
数人の人達が廊下を歩いてきた。その中に民岡君（この寺の副住職）がいた。思わず「タミオカクーン」と声を掛けた。彼はぼくに気づいた。ぼくも境内に駆け下り、彼の後を追った。だが途中で見失った。奈良さんの姿も見えなくなっていた。二人を捜している間に廊下を伝って沢山の信者達がこちらに向ってきた。彼等は廊下に面した部屋に、二、三人ずつ消えていった。信者達の大部分は年輩の婦人だった。中には女子高校生もいた。
彼等の中にたった一人少年がいた。彼は小さい頃から信仰の道を求めていたことをぼくに語って聞かせた。少年が手にしていた本は彼が自分でデザインしたものだった。文字のレイアウトが驚くほどうまい。学校を卒業した後ぼくの助手になってくれないものかと思った。
やがてどこからともなく沢山の人々が現われて読経が境内いっぱいに響き渡る。長い読経が終って、人々の中から民岡君が再びやってきた。不思議な安堵感。

一一月一〇日

UFOと船長

西脇の実家の庭先きで小学五年生の長女が空に向って、UFOが来るようにと、テレパシーを送

っていたが、思わず大きな声を上げたものだから、ぼくは振り向いて彼女が指差す空の一角に目をやった。雲間から覗く青空に銀色に輝いたフットボール状のＵＦＯが確かにあった。
やがてＵＦＯは次第にわれわれの方に向って降りてくるように見えた。次の瞬間ぼくと長女が立っている足元の地面に麦藁帽子型の直径四〇センチ弱の銀色の小型ＵＦＯが降りてきた。恐らく上空のフットボール状の母船から発射された偵察用小型円盤であろう。間近にＵＦＯを見て感動したぼくは急いで手にしようとしてＵＦＯに触れて驚いた。ＵＦＯは熱を持っていた。熱が冷めるまで触れないようにと長女に注意をしてしばらく待った。熱はすぐ冷め、ＵＦＯを手にして調べたが、どこにもこれといった特徴は見当らなかった。
そこへ妻と中学二年生の長男が家の中からもめながら現われた。咄嗟にぼくは上空の母船からわれわれの様子が全て見られているような気がして、
「母船のスクリーンにわれわれの姿が映し出されているかも知れないから注意しなさい」
と妻と長男を叱った。
少し時間が経ってわれわれ四人は見知らぬ小さなビルの屋上にテーブルを出して一人の宇宙人らしき人物を混じえてお茶を飲んでいた。彼はどことなくぼくの知人に似ていた。
「今こうしているわれわれの様子は上空の母船では全てわかっているのですか？」
と宇宙人らしき男に尋ねた。彼は言葉を発するかわりにうなずいた。ぼくの中から彼は母船の船長だという印象が起こってきた。

一一月三〇日
UFOと明日の四時半

郷里の八幡神社に通じる参道の砂利石を踏みしめながら歩いている。黄昏時である。周囲は青一色の中に溶け込もうとしている。東の山はすでに空の青さと一つになっている。そんな山陰から突然一機のUFOがぬっと現われた。皿を二枚合わせたような典型的なUFOである。機体は燃えるような神々しいオレンジ色に包まれていた。何物をも寄せつけないような輝きと美しさは超越的であった。かつて見たどのUFOよりも数段崇高な印象を受けた。

UFOの大きさは目測で直径一〇メートル強と判断した。非常にゆっくりと大きな半円形を描きながらぼくの後方から接近してきた。いつの間にかオレンジ色から白光色に変っていた。ぼくの頭上で機体を四五度傾けたかと思うと次の瞬間底部から三個の球体の着陸ギアーを覗かせて、着陸の意志を示した。この時ぼくの脳裏に〈二、三日前、尾道の藤松君という高校生が目撃したUFOと全く同じだ〉という印象がおこった。

こんな大きなUFOが低空を飛べば大騒ぎになるのではないかと心配していると、案の定数人の主婦と子供達が駆けてきた。UFOは彼等におかまいなく、ぼくの頭上で静止したままだ。下から見るUFOはとてつもない大きさでぼくにすっぽりと掩い被さっているように思えた。近くで見る機体は半透明で何か霊的な力を持っているように思えた。〈ぼくの所にUFOが来た!〉という喜びと感動より、むしろ恐怖に近いものを感ぜずにはおれなかった。超越者と遭遇した時に

CamScannerでスキャン

起こる畏怖の念が恐怖に変るのだろうか。

いつの間にかＵＦＯは道の中央に着陸しており、その傍に一人の宇宙人が立っていた。白いウェットスーツのような宇宙服の男はぼくと同じ位の身長で、しかも顔は日本人とさほど変らないように思えた。恐怖感は全くなかった。宇宙人はぼくに近づき、ぼくの両手を力強く握り、

「私はあなたに本当に、本当に逢いたかったのです」

といった。

感動のあまりぼくは口がきけなかった。宇宙人にどこから来たのかを聞きたいと思ったが、どうしても言葉にならなかった。宇宙人はあふれんばかりの親愛の情をぼくに投げかけてきた。ぼくの中からたとえようもないほどの懐しい感情が一気に込み上げてきた。それはまるで再会した時の喜びにも似たものだった。

少しずつ目撃者が増えてくるような気がしたので、ぼくは宇宙人を参道に面した林の中に匿うようにして連れ込んだ。ぼくは色々な質問をしたいと思ったが何一つ気のきいた言葉が出てこないのにいらだった。宇宙人は林の中に入るなりレシーバーのような器械で大気圏外に滞空していると思われる母船と連絡を取り始めた。まるで軍隊のような規律正しい口調だ。母船からの緊急連絡により宇宙人はすぐ帰らなければならないとぼくに告げ、

「今度はいつ逢えるか？」

と聞いた。

「いつでも、どこでもいいです」

「場所と時間を指定してほしい！」
「では成城の自宅の近くで逢い、そこからあなたの宇宙船で外国でもどこでもいい、好きな所に連れていってくれませんか？」
ぼくの要求に対して、
「そのことはできない！」
「それではこの林の奥に小さな空地があるからそこにして下さい」
「よろしい。明日の四時半！」
言葉では四時半といったが宇宙人の送ってきたテレパシーでは四時半から五時の間という時間の幅があった。
宇宙人と再会を約束してぼくは一目散に、UFOが飛び発ったのも見送らないで仕事場にいるアシスタントの山本、井伊両君に告げるために参道を駆け昇っていった。
仕事場は西脇にあった。ぼくがこの見慣れぬ仕事場に着いた時、二人は畑の中に立って山の一点に視線を向けていた。昼の風景である。やがて沢山の人々が集まってきた。「プレイボーイ」の編集者島地勝彦君もいる。やがて平野威馬雄さんが現われた。ぼくは内心この人達には今の話は秘密にしなければならないと思った。

一二月六日——午前九時三〇分＝自宅

夢の中と小亀

夢の中で目を覚ます。寝室のベッドの傍に一人の和服の女性が微笑をたたえて座っている。〈神戸の大島のママだ〉。パジャマ（ピンク）のままで彼女の前を通り次の部屋のドアを開けた。そこには外人の男がいた。パジャマ姿を恥じ、ぼくはあわててもとの寝室に戻り洋服に着替えた。大島のママは外人の男を見ると、思わず彼の胸に飛び込んで、熱い接吻を交した。子供達（息子と娘）のいる前で困ったものだと思ったが、外人の習慣とあらば仕方あるまい。

場面が変って、ぼくは長い廊下を歩いている。廊下の両側には部屋が並んでいる。部屋の中では沢山の人々があわただしく動き廻っている。どうやらぼくは彼等のメンバーの一人で、忘年会（だと思う）の準備におおわらわ——。

部屋の一室。机に向って絵（日本画？）を描くぼく。正面に黒い着物姿の大島のママ。彼女の注文に応じて日本画を描いているのか？

「こんな大きな絵はこれっきりで、あとは色紙にしてほしい」とぼく。絵を描くのを途中で止め、ぼくはトイレに立った。

トイレは細い廊下の突き当りにある。トイレのガラス戸を開けると、冷たい風が吹き込んだ。ガラス戸の向うは外で、地面に便器があった。いつ現われたのかぼくの横に大島のママのおばあちゃんが立っていた。

「京都よりここは寒いさかいに……」と彼女。

便器が置いてあるすぐ後は湖になっていた。鏡のような水面はずっと遠くまで拡がっていた。向う岸には背の高い樹が一列に並んでいた。そしてその背後には銀嶺が澄んだ青空の中に聳え立っていた。息を呑むような美しい景色である。

景色に見とれていたがふと足もとに目を移すと、便器の脇に数匹の亀やスッポンがいるのに気づいた。ぼくはその中の一匹の小亀を手でつまんで湖面にはなす積りで投げた。湖面に落ちた小亀は驚いて、手足をばたつかせ、首を蛇の鎌首のようにもたげて岸辺に戻ろうとした。大島のママのおばあちゃんは、この亀は海亀だから淡水では苦しいのだといって、おばあちゃんは湖の小亀に何やら棒切のようなものを投げた。それは小さい帚だった。おばあちゃんの説明によると帚には塩分が染みているという。小亀は帚に食いつき、それを咥えて岸辺までほうほうの体でたどり着いた。

再びおばあちゃんは足もとに落ちていた亀の足（ちぎれた）を拾って湖水に投げた。湖水に落ちた亀の足は仰天。岸辺に向って必死に泳いできた。この亀（足だけ）も海亀だったのか……。実に奇妙で恐ろしい情景というほかない。

用便を足すのを忘れたのか、気がつくとぼくは元勤めていた日本デザインセンターの運転手が運転する黒塗の車に乗っていた。どこかの地下鉄の駅に向っている。車中誰かの批判をしている。地下鉄の駅に着いた時、電車はすでにホームにあった。切符も買わずに改札口を通り抜け電車に飛び乗ろうとした。その瞬間電車のドアは閉った。

CamScannerでスキャン

ぼくの後から運転手が切符を買ってホームに来てくれた。地下鉄の壁にはB全サイズの横一（横長にデザインしたもの）のポスターが貼ってあった。赤と青の文字が立体的に描かれたタイポ・グラフィ（文字主体）のポスター。一目で福田繁雄の作品だとわかるものだった。現在京都で開催されている評判の催物のためのポスターのようだ。間もなく次の電車がホームに入ってきた。

一二月一一日——午前五時三〇分＝自宅

地球の終末と移行

夢のビジョンとしては広大な青空に白い雲だけだ。

ぼくは、このビジョンをかなり高度な空中から見ているようだ。また、この空のビジョンは宇宙人によってぼくの脳に投影されている脳内視の光景のようである。

次にぼくは宇宙人からのテレパシーによって次のような想念を受けた。

それによると、地球をとりまくバンアレン帯が、ある星からの強烈な宇宙線によって、地球自体が非常に危険な状態に達しており、明日七月二四日に地球上に大きな異変が起こる。

そこで、宇宙人は人類を救うために地球上の電波媒体（メディア）、たとえばテレビ、ラジオ、電話、などを通して人類に危険が迫っていることを通告しているのだが、大部分の人々はこのかれらからの通告がテレパシックな方法によるため、たとえテレビを見ていても受像をキャッチできる人間とできない人間がおり、人類のすべてに伝達できないで困っているという。

そして明二四日には大挙宇宙船が地球にやってきて、できるだけ多くの人々を他の星に移行させることになっているようだ。

ところが大部分の人々は明日に控えた最後の審判を信じようとしていない。そこでぼくはできるだけ多くの人々に全てを捨てて、この地球から離れる用意をするように呼びかけなければならなくなったが、果してどれだけの人々が宇宙人からのメッセージを信じてくれることができるだろうか。

ここで再び脳内視のビジョンが現われた。

巨大な母船が人類を乗せて宇宙空間を移行している状景である。

この夢の中の宇宙人からのテレパシーで最も強烈な印象を受けたのは「バンアレン帯」と「移行」というこの二つの言葉だった。

日時場所不明

水死と情欲

ぼくは深い川の中に何か非常に大事な品物を落とした。その大事な品物を拾うために川底深く潜った。いくら潜っても川底に到達しない。次第に息が苦しくなってきた。そこで慌てて水面に浮上しようとした。だがよほど深く潜り過ぎたのか水面は一向に現われない。そしてぼくはついに息が切れてしまった。

どのくらい時間が経ったのか、ふと気がつくとぼくはいつの間にか川底近い水中に浮いたままだった。だが不思議なことに水はなく、そのためか呼吸も困難ではなかった。水もないというのにぼくの身体はまるで泳いでいるようにすいすいと川底の空間を浮遊している。この時ぼくは初めて自分が死んだことに気づいた。ふと暗い川底の岩陰を見ると、そこに一人の女性が裸で仰むけになったまま、まるでぼくの体を待ち受けるようなポーズで横たわっていた。早速ぼくはこの女性に抱きついていった。ところがどういうわけかこの女性にもぼくにも性器がないことに気づいた。それでも突き上げてくる情欲は押さえることができず、無理矢理に女の上に激しく重なっていった。

数分間かそれとも数時間か、確認できない時間が流れた。ふと背後に人の気配を感じてぼくは振り返った。川底に正座した霊人（死者）たちがずらっと一列に並んでいた。それはかなり遠くの川底まで続いているように思えた。

十一月四日には大型宇宙船が地球にやってきて、できるだけ多くの人々を他の星に移住させることになっているようだ。

ところが大部分の人々は明日に控えた最後の審判を信じようとしていない。そこでぼくはできるだけ多くの人々に全てを捨てて、この地球から離れる用意をするように呼びかけなければならなくなったが、果してどれだけの人々が宇宙人からのメッセージを信じてくれることができるだろうか。

ここで再び脳内視のビジョンが現われた。

巨大な母船が人類を乗せて宇宙空間を移行している状景である。

この夢の中の宇宙人からのテレパシーで最も強烈な印象を受けたのは「バンアレン帯」と「移行」という二つの言葉だった。

日時場所不明

水死と情欲

ぼくは深い川の中に何か非常に大事な品物を落とした。その大事な品物を拾うために川底深く潜った。いくら潜っても川底に到達しない。次第に息が苦しくなってきた。そこで慌てて水面に浮上しようとした。だがよほど深く潜り過ぎたのか水面は一向に現われない。そしてぼくはついに息が切れてしまった。

CamScannerでスキャン

どのくらい時間が経ったのか、ふと気がつくとぼくはいつの間にか川底近い水中に浮いたままだった。だが不思議なことに水はなく、そのためか呼吸も困難ではなかった。水もないというのにぼくの身体はまるで泳いでいるようにすいすいと川底の空間を浮遊している。この時ぼくは初めて自分が死んだことに気づいた。ふと暗い川底の岩陰を見ると、そこに一人の女性が裸で仰むけになったまま、まるでぼくの体を待ち受けるようなポーズで横たわっていた。早速ぼくはこの女性に抱きついていった。ところがどういうわけかこの女性にもぼくにも性器がないことに気づいた。それでも突き上げてくる情欲は押さえることができず、無理矢理に女の上に激しく重なっていった。

数分間かそれとも数時間か、確認できない時間が流れた。ふと背後に人の気配を感じてぼくは振り返った。川底に正座した霊人（死者）たちがずらっと一列に並んでいた。それはかなり遠くの川底まで続いているように思えた。

● 一九七六年

CamScannerでスキャン

一月一四日——午前一〇時・自宅

室内競技場と母の幽霊

非常に大きな建物の内部。室内競技場？　一段と高くなった床の上を妻を捜しながら歩いているぼく。辺りには数人の人がいる模様。足もとがおぼつかない。ぼくの行く手に一人の外人の男がうずくまるようにして床に腰を下している。彼の横を通り抜けようとした時、この外人は一言、二言ぼくに文句を言った。恐らく、ヒトノマエヲトオルナ！　と言ったように思う。ぼくも嫌な奴だと思った。

建物の内部にもう一つ小さな建物があった。プレハブの建物？　それにしてもお粗末なものだ。ぼくはこの建物の中に妻がいるような気がした。ドアを開けて中を覗いた。狭い床にはふとんが敷かれ、妻と思われる女の頭が半分ふとんの中から覗いていた。驚いたことには枕元のストーブから真白な煙と赤い炎が吹き出していた。ぼくはいい所に来たと思いふとんの中の妻を起こそうと思い掛ぶとんを剝がした。妻だと思ったその女性は十年前に死んだ母の幽霊だった。母の真白な顔はぼくを無表情のまま見つめた。全身に氷のように冷たい恐怖が走った。大声で母の幽霊に向って「お母ちゃん！」と叫ぼうとしたが声が出ない。金縛り状態だ。恐怖は津波のように押し寄せてきた。「成仏して下さい！」と再び叫んだが、声にならない。母の幽霊はぼくを見つめたまま一向に消えようとしない。ただ不思議なことにストーブの煙だけは見る見る消えていった。恐怖にもかかわらずぼくは母の顔にぼくの顔を近づけ声にならない声で母の名を呼び続けた。す

ると次第に母の顔が少しずつ和らぎ、驚くほど若さと美しさを取り戻し始めた。まるで歌舞妓の女形のように超越した美しさに変っていった。思わずぼくは「美しい！」と叫んだ。だが声にはならなかった。母が現世に残した執着がこの美しさによって消されていくような気がした。さらにぼくの中に「許される」という思いが同時に起こった。

一月一五日――午前六時＝自宅

三島由紀夫とそのぬいぐるみ

広い体育館のような所に大勢の人々が椅子に腰を掛け、間もなく開始されようとする三島由紀夫のショーを今や遅しと待ちわびている。場内は特別の照明もないのにいやに明るい。ぼくと中学二年の長男は観客席とは少し離れた場所に立っている。

やがてステージの左の袖から三島さんが水着姿で現われた。心なしか顔色が青白い。上半身は例のボディビルで鍛えられた見事な筋肉が波打っていた。三島さんは太いロープでゆわえた大きな青色の浮き袋のようなものを背負っており、小走りにステージの中央まで進んだ。観客一同はこれから一体何が始まろうとするのか誰一人知らない様子だ。固唾を飲んで三島さんの一挙一動を見守っているだけである。

ステージ中央の三島さんの表情は緊張しているのか非常に固い表情である。いよいよショーの口火を切るべく、背の浮き袋にゆわえられたロープの端を思い切り引っぱった。ロープがどこかに

ひっかかったのか、うまく作動しない。一瞬、三島さんの青白い顔に焦りの暗い影が走ったのが、ぼくの立っている場所からも明らかに感じとられた。周章てた三島さんは何度も何度もロープを引っぱったが、ついに作動しない。

観客はいち早く三島さんのショーの失敗を見てとって、動揺し始めた。観客の動揺に三島さんはますます奈落の底に落ちていくような険しい表情に変っていった。ショーが失敗したと知った三島さんはつとめて冷静をよそおいながら、もと来た方向に引きあげ始めた。楽屋でロープが作動するようにセットしなおして、再びステージに帰ってくるつもりなのかも知れない。三島さんがステージを去り、入口の手前まで来た時である。

いきなり入口から飛び出して来た人物がいた。そしてその人物は三島さんと真正面からぶつかるように対面した。その人物は何んと三島由紀夫そっくりのぬいぐるみではないか。三島さんよりひとまわり大きいこのぬいぐるみは三島さんと同じく水着ひとつの姿にロープをまきつけた青い浮き袋を同じように背負っている。三島さんのショーが失敗と知った関係者がいち早く代役のぬいぐるみを出演させてこの場を何んとか切り抜けようとしたようである。

自分とそっくりのぬいぐるみといきなり対面した三島さんは一瞬立ち止まった。そして決定的に打ちのめされたような表情は、あまりの屈辱に人形のように硬直してしまっていた。三島さんにとってそれはとりかえしのつかない出来事となった。

ぬいぐるみを後に三島さんは場内から姿を消していったが、ぼくはこの偽の三島由紀夫のショーなど毛頭見る気がしなかったのでこの場を引きあげることにした。場内を出たぼくと長男、そし

CamScannerでスキャン

ていつの間にか現われた五年生の長女の三人で螺旋状の鉄の階段をどういうわけか昇っていた。
三島さんは毎年一日だけ霊界よりこの現界に姿を現わし、そしてみんなの前でショーを披露することになっていたのだ。ところが今日のあの屈辱的な失敗のため、おそらく二度と再び霊界からわれわれの前には姿を見せなくなってしまうのではないかと感じられた。脳裏をかすめたこんな考えがぼくを思わず悲しみのどん底に引き落としていった。もう二度と逢えないのかと思うとぼくははり裂けるほどの胸の痛みを感じた。

鉄製の手摺の上を綱渡りのような格好で歩いていた長女が、急に足を踏みはずして頭から真逆さまに落ちようとしていた。ぼくは咄嗟に頭から落下していく長女の片足に飛びつくようにして両手で足首を握りしめた。長女の体重が重く、ぼくの体までがぐいぐいと下方に引っぱられていく。下を見ると何重にも階段が螺旋状になっており、まるで深い渦の中に引きこまれて行くような恐ろしい感じがした。もう駄目だと思った瞬間、どうしたわけかぼくの手に信じられないような強い力が加わり、長女をあっという間に難なく引き上げることに成功した。まるで奇跡が起こったとしか考えられないほどの力がぼくに働いたのだ。

長女が助かったという安堵感がぼくをその場にへたばらせてしまった。

一月三〇日――自宅

黄金の都市と悪魔

ゴルフ練習場によくあるような鉄柱の照明塔が二つ、暗い夜空に向って建っている。それぞれの照明塔の上部には六個の白銀色に輝く、電球が並んでいる。場所は西脇の実家の近くだ。
ぼくはこの六個ずつ幾何学的に並んだ計十二個の電燈を下から仰いでいる。しばらくすると、突然一方の照明塔の中から青白く光輝した物体がひょいと飛びだした。ぼくはこの物体がすぐさま円盤であることを知覚した。しかし飛び出した円盤は細い光の尾を引きながら再びターンしてもとの照明塔の中に消えた。ところが今度はもう一方の照明塔の中から同じような円盤が飛び出して、そしてさっきのと同じようにターンして、また照明塔の中に消えていった。
この二つの円盤が現われて消えるまではほんの数秒の出来事だったが、突然の円盤の出現と、その霊的なまでに美しい姿に、ぼくはまるで夢を見ているような気分で照明塔を見上げたまま、その場にしばし釘づけになったまま、呆然と立ちすくんでいた。
照明塔の中に消えるぐらいだからそんなに大きな円盤ではなく、せいぜい四、五〇センチの小型円盤に違いないと思ったが、円盤が現われた時の照明塔の高さは何百メートルもの高さに延長されたような気がした。すると小さく見えたはずの円盤は、もしかすると実際にはもっと大きなものだったかも知れない。こんなことを考えている時、何やら照明塔の上部に二つの動くものが見えた。間もなくそれらは、二人の宇宙人であることがわかった。全身を緑っぽい灰色に光ったアノラック風のタイトになった宇宙服を着た二人の宇宙人が、まるで水中を泳ぐような格好で空中からゆっくりと舞い降りて来るではないか。ぼくの方に近づくにつれてはっきりしてきたことは、片方はどうやら小さい宇宙人である。あるいは少年の宇宙人かも知れない。全身宇宙服で身を包

んでいるのだが、顔の部分だけがかろうじて外に出ている。
やがて二人の宇宙人は、地面から一メートル位の所まで降下し、ぼくが立っている周囲をゆっくりとひとまわりして、丁度ぼくの前に現われた。その時ぼくは一人の大きい宇宙人の横顔をよく見ることができた。彼の容姿はまるで西洋人の貴婦人のような高貴な美しさをたたえていた。皮膚の色は夜のせいもあってか、こころもち緑色を帯びていた。男性の宇宙人だと思えたが、もしかすると女性かも知れない。
二人の宇宙人が空間を泳いでいるので、ぼくは自分が海底に立っているような錯覚をおぼえた。ぼくの前方を泳ぎ過ぎる時、大きい方の宇宙人の表情に一瞬恐怖の影が走ったように見えた。何か危険を察知したのだろうか、二人の宇宙人は急に泳ぎのスピードをアップして、ぼくが立っている左方にあるせまい道路の方に逃げるようにして急いでいった。
そのせまい道路の両側には家が建ち並んでいるのだが、宇宙人達がその家と家の間の道路に消えていった時、道路の両側の一番手前の家を残して、道路の奥の方のごくありふれた現実の風景は突然その姿を消した。そしてそこには信じられないような光景が展開した。そこはいつの間にか黄金色一色に塗りつぶされた光り輝く別天地となり、一目でわれわれ人間が住む世界ではない、より高度なバイブレーションをもった神の国に変った。ぼくはさっきから自分が海底にいるような錯覚をしているから、この別天地がまるで竜宮城のある海底の風景のように思われてならなかった。
黄金の都市の内部は天からオーロラが下り、地は珊瑚のように美しい木々やまだかつて見たこと

のないような華麗な草花で覆われ、それらが全て黄金色の光を発しており、何もかも超越した世界だった。ここは不老不死の世界で永遠と無限が大いなる知恵と力によって支配されており、何ものをも近づくことを拒絶しているように思えた。

二人の宇宙人がこの世界に姿を消して間もなく、彼等の後を追って数人の悪魔が現われた。悪魔達は中世のヨーロッパのエッチング版画で描かれたような肉体をしており、いかにも悪魔という感じだ。彼等は我れ勝ちに先を争うようにして、二人の宇宙人が消えた別天地の中にまで追いかけて行こうとした。

ところがどうしたことか、悪魔達は別天地の入口を入った所で、大きな悲鳴をあげながら、ものすごい力で跳ね飛ばされるように入口の外へほうり出された。このことに驚いた悪魔達は、まるで犬が尾を股間にはさんで逃げるような格好で再び夜の闇の中に消えていった。

この光景を見ながらぼくは、悪魔には別天地のバイブレーションが合わなかったことを知り、人類が宇宙人と波長を合わせるためには自らの内なる悪魔を追放しなければならないのだなあと、思いながらいつまでもこの神の国の入口に立っていた。

二月九日――午前六時＝自宅

野坂昭如氏の死とお巡りさん

野坂昭如氏が死んだ。大変なショックを受けた。三島由紀夫氏に続いて野坂氏。二人の死は先き

の日本を暗示しているようで暗い。野坂氏の死がそんなに社会的影響があることとはならないが、ぼくは残されたお嬢さんのことがふと気になった。でも結局はいつも一番気になったのは、野坂氏の死の原因だ。自殺、事故死、病死、いずれか。

どちらにしても野坂氏の生き方は命を縮めるような生き方だった。こんな生き方は真似すまいと自分にいい聞かせる。そこへ一人の若いお嬢さんが、昨日（十二月九日）急死なさったばかりのお嬢さんが、この時お話できなかったという言葉がふと頭をよぎる。「野坂さんは、あなたは未来をリードしています」（夢の中ではなく本当に昨日はそういったのだ）。

野坂氏の中ではあれだけ一人で必死に動き回っている。野坂氏の死がまた世間に忘れられてしまうのではないのか。ここ九年の人達はかなり心配だ。シャーマンとしての私の死も知らない。どうしてぼくがこんなに早く野坂氏の死を知っているのだろう。不思議だ。家の壁に飾ってある野坂氏の書画が妙に輝いて見える。

平成二十七年十二月十日——

昼寝と遊泳

西脇（元総理）の未来の夢の前説を見ていた。ボートに乗っていたところ、もう一人の前に立って来た。今時の中は全く照明がなく、辺りは暗闇き1つやきない状態でくぼやっていた。

「ああ、そうだよ。こんなに沢山の昆虫を小さな籠の中につめこんで！ 逃がしてやれよ」
「だって実ちゃん（小学五年生の長女）にあげようと思って採ってきたのに……」
T青年はやや憮然とした表情で、度の強い眼鏡の奥からぼくを睨みつけるようにしていった。
「それはありがたいが、このままじゃ虫は圧死してしまうし、第一残酷だよ」
彼はぼくに理を以て返されたと、怒りだした。
「とにかく逃がしてくれ！」
彼は玄関の戸を思い切り強く閉めて表に出ていった。しばらくして彼の後を追ってぼくも外に出た。驚いたことには、家の前は見渡す限りの大平原だった。そしてそこにはもっと驚くべき残酷な光景がぼくを待ちかまえていた。大平原一面に、地平線の彼方まで何百、何千、何万、いや億という数の昆虫が、すべて頭をもぎとられ胴体に肢をつけたままで同じ方角を向いて並んで立っているではないか。しかもこんな無残な姿になりながら、彼等は依然として生き続けているのだ。ぼくはこの怒りと悲しみに満ちた、目をおおいたくなるような悪夢的狂気の世界を前にして今にも頭がくらみ、その場に失心しそうになるのをやっとの思いでささえて立っている自分を発見した。T青年の残虐さより、ぼくは頭をもぎとられたままの姿で生きている昆虫達と、その驚くべき宇宙的な無限の数に、ぼくはぼく自身の重心を失いそうになった。
やっとの思いで家の中に飛び込んだぼくは丁度部屋にいたT青年をつかまえて、あらん限りの憤怒を込めて怒鳴りつけた。しかし彼はこんなぼくの怒りにも何食わぬ顔で、しかも薄ら笑いさえ

1976年2月21日——青年と昆虫

CamScannerでスキャン

浮かべたその表情はどこか怖ろしい気さえした。

「そんなに気に入らなきゃ、ぼくを思い切りぶん殴ってくれてもいいですよ」

といって、ぼくの前に彼は顔を突き出した。

「貴様のような面をぶん殴るような拳はぼくにはない！」

ちょっと格好いいことをいったかも知れない。

やがて彼は少しは反省したのか、ほうきを持って表に出て行った。少し経って出て見ると、沢山の昆虫の死骸はきれいに一か所にまとめられていた。大分気持が落ちついてきたぼくは、彼をあんなに叱ったことを少々後悔したが、この際あのくらい呶鳴りつけた方がかえってよかったかも知れないとも思った。しかし彼を殴りつけなかったことは、怒りっぽいぼくが一歩進歩した証拠に違いない、と自画自賛するぼくだった。

二月二四日——自宅

西城秀樹と坊主頭

青山墓地の近くで西城秀樹と数人のとりまき（マネージャー）と逢う。ヒデキとこうして逢うのはテレビ・ドラマ『貫太郎一家』以来だ。彼に声を掛けると、「十七日に来て下さい、十七日だったら逢えます」といった。美々が逢いたがっていることを彼はよく知っているからだ。

場所が変って西脇。実家の前に長屋がある。その一軒が高尾さんの家だ。家の中から顔を出した

[illegible]

のは高尾さんではなく、玲鈴師（総持寺で修行していた雲水）だ。ぼくの姿を見た彼は、「横尾さんよく似合うじゃないですか！」と声を掛けた。ぼくはいつの間にか頭を剃髪して、僧衣に身を包んでいる。ぼくは自分の坊主頭を手で撫でながら、テレて、「よく似合うでしょう！」と笑った。

どこからともなく現われた母が「お坊さんなんかになると、この後は死ぬより仕方ないじゃない？」といった。母の言葉を打消すように、「冗談じゃない、この後には悟ることがあるんですよ」といった。

二月二十九日——自宅

プラス・マイナスと地球人

海に近い河口の桟橋に立ってぼくは青空を眺めていた。近くに空港でもあるのだろうか、空には沢山の飛行機が飛びかっていた。そのうち奇妙な物体が空に幾つも現われ始めた。最初はこれも飛行機かな？　と思って見ていたが、違った。これらの物体は十字架型をしており、沢山集まって空に色んな形を描き出した。プラスとマイナスの記号を縦に並べたり、横に並べたり、時にはプラス・イコール・マイナスという式を作ったりもした。これらの物体が描く記号が何を意味しているのかぼくにはよく理解できなかったが、恐らくＵＦＯの仕業には間違いないように思えた。やがてこれらの物体はどこへともなく消えてしまったが、それに代って今度は巨大なストライプ

の模様が入った気球状の物体が出現し、空を飛んでいる飛行機を片っ端から物体の中に吸い込んでいった。ぼくはこの物体が非常に恐ろしい存在に思え、もしこれがＵＦＯだったら嫌だなあと思いながらこの情景を眺めていた。

沢山の飛行機を飲み込んだ物体はまたしても忽然と姿を消してしまった。と同時に大型のフェリー・ボートがぼくの立っている栈橋に入ってきた。下船を待つ人々が甲板にひしめき合っていたが、どうしたことか全員が何かを恐れている様子だった。ぼくは直観的にこの船に宇宙人が乗っているような気がしたので船の方に近づいていった。間もなく船の客が一斉に降りてきたが、彼等を見るなりぼくの顔面の筋肉が引き吊るのを覚えた。彼等はよほどの恐怖に遭遇したのか、まるで廃人のような深い悲しみと暗い表情を皺の一本一本に浮かべていた。

しかし、これが地球人の本当の姿かも知れないという想念がぼくの中から急に湧き上ってきた。ぼくは恐ろしくなり、彼等から逃げるようにしてこの場を去った。

三月三日——成城

大魚と幽霊

沖の釣船。二、三人。魚が釣り上る度に、ぼくは魚が可哀想に思えて仕方ない。自分で釣るのは止める。誰かが五〇センチもある大魚を釣り上げた。釣り上げられた魚は大きな口を開けて苦しそうだ。しきりに暴れる。魚の口の中を覗いたぼくは驚いた。内臓も骨もない。ピンク一色の空

洞。誰かがその空洞に死んで白くなった小魚を五、六匹投げ込んだ。小魚は大魚の腹の底で折り重なった。

さらにそこに大きな魚を口から突っ込んだ。釣り上げられた大魚は苦しそうに大暴れしている。口に針がささったまま。残酷な人達だ。たまりかねてこの場を去る。

新幹線の車中。デッキにいるぼく。列車は大きな駅に停車中。レールを一つ挟んでホームがある。外人の女がホームを往来している。金髪に赤いワンピース。見たことのある女だ。思いだそうとしてしばらく見ていた。思い出せない。

突然デッキの窓の外に男が現われた。茶の洋服。宙に浮いている？　膝から下は消えている。〈幽霊─〉。そう思った。全身凍るような恐怖！　つい先っき見た男だという観念が起こったが、さてどこでだ？　思い出せない。押し寄せる恐怖ますます激しい。ぼくと関係ないはずの男が、なぜぼくを見つめるんだ。客席に逃げ込んだ。走った。ぼくは「ウワーッ!!」という叫びをあげたように記憶する。

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]

らしき女は右手に。ぼくは左手に。二人はまるで恋人のよう。身体をすり寄せながら、時々声をあげて笑う。女は赤と白のパジャマのようなものを着ている。頭にはビニールのヘア・キャップ。ぼくはこの二人がまるで自分とぼくの母親の姿の生き写しのように思えた。

ぼくは一人で坂を昇っていった。坂の途中に大きな家。その中に立っている自分。土間のようなところ。薄暗い家の中に男二人。黒光りのする板間に坐っている。左の男は藤竜也のよう。彼はぼくを見るなり、自分の両目に指を突っこんだ。目玉を外に出すため？

「やめて下さい」。ぼくは思わず叫んだ。

「一体どうしたんですか？」と訊くと、演技の時、目に力を入れ過ぎたために左目の目玉が飛び出したのだという。そして出し入れが自由になった目玉をぜひぼくに見せようとするのだ。冗談じゃない、こんな気味の悪いもの見たくもない。断る。

総持寺に向うぼく。横に藤竜也。墓の中を通りながら、彼「これでぼくもやっと自由になった。こんな汚れたコートを着ていても平気だ」。黒いレインコートに手を入れたまま。ぼくを見て笑った。彼の気持がわかるような気がしたが、何だか気味悪い。

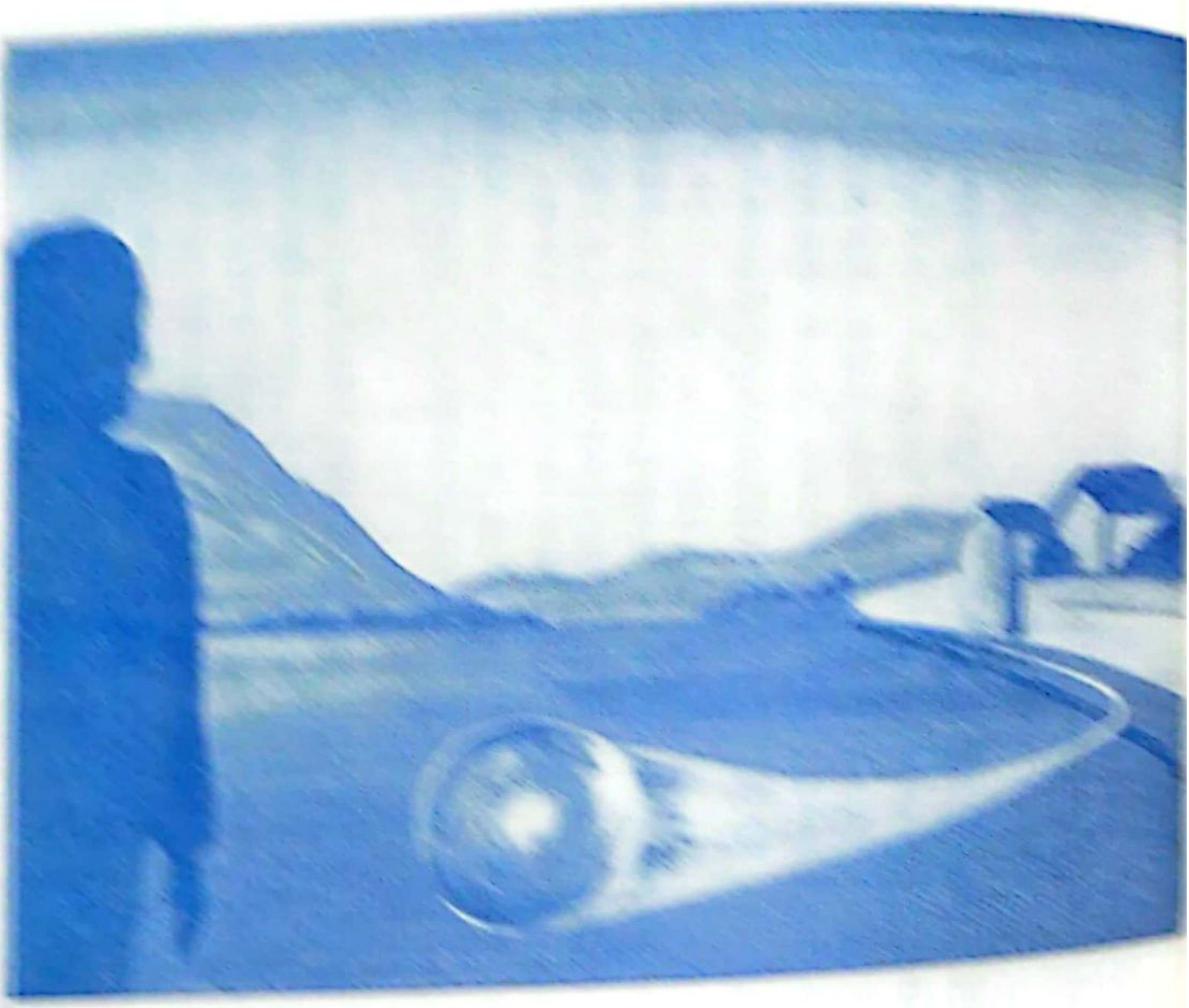
総持寺では渡辺監院が数人の僧侶と読経中。四谷シモンもいる。彼の黄色いジャンパー。うろうろと落ちつかず。ぼくは廊下に座った。そこが水で濡れている。雑巾で拭く。拭き方に熱意なし。自分は甘えているようだ。総持寺に何度も来ているせいか。これではいけないと思う。

三月一〇日——自宅
Wと茶色の子猫

数人の友人と愉しげに談笑しながらテラス状になったビルの屋上から星空を眺めている。空気は山のそれのように澄み、身心共に非常に爽快である。しばらくしてからぼくはみんなと少し離れたビルの端に移動した。そしてしばし、鉄製の手摺りに寄りかかり、夜空の宝石を散りばめたような星の瞬きに心を奪われていた。こんな素晴しい夜にはきっとＵＦＯが現われるに違いないという考えが頭をかすめた瞬間、星の一つが右から左に空を切るようにスーッと動いた。そして、突然大きなＷの字を二つ描いて消えた。

最初に動き出した時はＵＦＯかどうかは疑わしかったが、二つのＷの字を描いた時はさすがに感動し、身震いした。というのも、ＵＦＯがぼくの気持を察したのか、一目でＵＦＯとわかるように飛行をしてくれたからだ。ぼくの意識はＵＦＯと完全に一つになって通じ合っているように思えた。コンタクティーに選ばれるかもしれないという予感が起こってきた。ＵＦＯの出現を知らせようと思って離れたところにいた友人達に大声を上げたが、彼等が空を仰いだ時にはＵＦＯはすでにそこにいなかった。

ある日、ぼくは郷里の阿江さんという人の家に遊びにいっていた。この家の前は田んぼになっており、左手に道路があった。ぼくは何とはなしにボーッとして家の中から外の風景を見ていた。ふと見ると地面から一メートル位の高さに直径二〇センチ位の白銀色の球体が浮いており、それ



がやがて道路ぞいにかなりのスピードで飛んでくるところだった。（ＵＦＯ）というイメージが頭を掠めた。まるでこの物体は意識を持っているのかぼくの想念に応え、急に角度をぼくの方に変えたかと思うと物凄いスピードで迫ってきた。まるで生物のようだ。この物体が小型ＵＦＯだとわかった時は気が転倒するほど嬉しかったが、いざぼくを目掛けて飛んでくる段になってぼくはある種の恐怖感を覚えた。やがて小型ＵＦＯは閉っていたガラス戸を突き抜けて部屋の中に飛び込んできた。ガラスが破れる大きな音がしたにもかかわらず、ガラス戸は傷一つ受けていなかった。

部屋の中にころがっている物体は目玉の形をしているように思えた。この物体を手にしたところ急に形が変形してまるでチェスか、壺を逆にしたような形になった。と同時に球体時の光沢は完全に消え、土器を手にしているような感触に変った。

思わぬ闖入者に驚いたのはぼくばかりではない。部屋にいた数人の知人はぼく以上に驚いており、この物体が偵察用の小型円盤であると説明しても、なかなか理解できないような不可解な表情を浮かべているのだった。

小型円盤との遭遇はぼくにとっては大事件だった。コンタクティーに選ばれた喜びと責任と同時にいい知れぬ不安感も伴った。ＵＦＯによってぼくの今後の運命が握られているかと思うと、何だか怖くなってきた。もしぼくがコンタクトした宇宙人が悪魔(サタン)的でなければいいがとも思った。

しかし、コンタクティーに選ばれたという事実は避けられない。この物体から受ける想念波動だろうか、ぼくの内部からコンタクティーとしての使命感が次第に力強く湧き上ってきた。自分と

いう個人を越え、地球と宇宙を結ぶ重要な役割を演じなければならないという覚悟も不思議なことに自然に起こってきたのである。まるで自分が今日から宇宙人の一員に生れ変ったような不安と期待に満ちた奇妙な気持である。全てぼくの意志の及ばぬところで作用しているカルマの働きなのかも知れない。

このようなことを考えながら、ふと手の中を見るとぼくはいつの間にか一匹の茶色の子猫を抱いていた。さっきまで手にしていた物体が知らぬ間に子猫に変ったのだろうか。いずれにしてもUFOとこの子猫が深い因果関係で結ばれているような印象を受けた。今日の出来事やぼくが受けたUFOからの想念は他人に語っても理解されるものではないだろう。

三月一四日——午前五時?
万寿屋とペニス

蓬莱橋（西脇）の袂に椿の巨木がある。その近くに万寿屋がある。——そんな風景が見える。どうやらぼくはその万寿屋から出てきたようだ。

そんなこととは別にぼくのペニスが根元から断ち切れ、薄い皮一枚でぶら下っている。別に痛みはない。が、早いところ医者を見つけて手術して貰う必要がある。どこへ行けば手術をして貰えるのか？　その上今日は日曜日。〈困った、困った〉。

どのくらい歩き廻ったのだろう、気がつくと子供の頃両親に連れられてよく行った玩具屋の前。

ついにペニスは睾丸だけを残して根本から完全に切り取られてしまった。切断されたペニスの切り口は丁度竹輪を輪切りにしたように中央に小さな穴（尿道）が開いていた。ちぎれたペニスを手にしながら、ぼくは黴菌の培養を恐れた。気持は焦るばかりだが、医者が見つからない。誰かが差し出した液状のメンソレータムをペニスの断面にこってり塗りたくって、結合してみたが、歩いているうちに落っこちてきた。再び切断されたペニスを手（左手）に、もう一度医者を捜すことになった。だが医者はどこにもいない。いいようのない不安感と絶望感が襲ってきた。見ると手の中のペニスはいつの間にか縦に割れている。竹輪を縦に開いたように、半円形の溝がペニスの中央に走っていた。——嗚呼。

三月〇日——自宅

まな板と人肉

まな板の上の人間の肉。四〇センチ×三〇センチ大に三段に積みあげられた人肉。マグロのトロに似た美しいピンク色。ところどころに黒ずんだ色。背の肉のようだ。ぼくは人肉を食う用意をしている。あまりの美しさに全く抵抗はない。むしろ抵抗する方が気取っているように見える。間もなく他の人達も食べ始めることだろう。

1970年4月7日——ユダヤの星と蛍の祈り

四月九日——日曜

ユダヤの星と雪の降り

建物に挟まれた道路の中央に立って青空に描かれた大きな白い図形を見ている。自然現象なのかそれとも何者かによって描かれたのか、そこにはユダヤの星を形取った籠目模様の印が描かれていた。今しがたぼくはこのユダヤの星を発見したのか、それともずっとここに立ってそれを見ていたのだろうか、全く時間の観念が定かではない。

青空にくっきりと描かれた白光に輝くユダヤの星はぼくに何か重要なメッセージを伝えようとしているかのように思えた。ぼくの内部から次第に熱いものが込み上げ、気分が高揚してきたかと思うと、急に奇妙な恍惚感が襲ってきて、何ともいえない宗教的な気分に包まれていった。そしてどこからともなく、この空の超自然現象がＵＦＯと関係があるという感応が強く働いてきた。

そして次の瞬間ぼくはここにはいなかった。巨大としかいいようのないドーム状になったカマボコ型の建物の中に立っていた。いきなりこの場所に瞬間移動したのか、ともかくぼくは見知らぬ奇妙な建物の中にいるのである。恐らくこの建物の内部はＵＦＯの母船か或いは、どこかの地下に建造されたＵＦＯの基地のようでもある。建物の内部は全て銀色の金属で出来ていた。ドームの長さはちょっと想像もつかないほどの距離があり、奥の方まで見通すことは不可能だ。ドームの中央には大きな機械のようなものがいくつもあったが、何のためのものか全く見当もつかない。

この建物の中にいるのはぼくだけかと思ったが、実はもう一人ぼくの友人のインテリアデザイナーの倉股史朗さんも一緒だった。この時初めて感じたのであるが、彼はすでにＵＦＯと度々コンタクトしており、しばしばこの場所に来ていたのである。ここに導いてくれたのも倉股さんだったのだ。異星人は彼を通じてか、あるいは独自な方法でもってぼくを長期に渡って観察していたのかも知れない。いずれにしてもこの場所に連れてこられたことがぼくにとっては何にもかえがたい喜びなのである。こうしてここに来た以上恐らく重要な使命を与えられるに違いない。喜びと不安が相克する中を、彼の後について歩いていった。われわれ二人の他には全く人影は見えなかった。

しばらく行った所で、彼はぼくをその場に残して建物の外へ出ていった。二、三分もしないうちに彼は帰ってきた。彼の青ざめた表情からぼくは、何かあったな？　と思った。

「何があったの？」

「ある場所にダイナマイトを仕掛けた。どうしてもそうせざるを得なかった」

「どうして？」

「今のままでは地球人は核戦争を起こして自らを滅ぼす。また核爆発によって人間の霊魂まで破壊されてしまう。すると、人間は二度と転生しなくなるのだ。いずれにしても地球人は自らのカルマによって滅びるだろう」

「それとダイナマイトを仕掛けたことがどう関係づけられるの？」

「地球人が核を使用する前に、ダイナマイトで滅ぼすのだ。肉体は滅ぼすが霊魂だけは救う」

世の終りが確実に近づいているようだ。

五月一〇日――ブロードウェイホテル（スリナガル・インド）
岡本太郎氏と北斗八星

夕闇に包まれようとしている。ぼくと妻は山の中腹の細い道でテーブルを挟んで三角に切った木瓜を食べている。ぼくはすでに二切れ食べ三切れ目を口に持ってこようとしたが、あまりにも種が黒々と密集しているので思わず身震いした。その瞬間ぼくの胸に去来したのは〈岡本太郎が死ぬ〉という予感だった。

いつの間にかぼくは岡本太郎さんの個展の飾り付けを行なっている大きな会場に姿を現わしていた。岡本さんはまるで病人のようにふらふらした足取りで作品の飾り付けに立ち会っている。心なしか岡本さんはこの個展が遺作展になるだろうということを予感しているように思えた。ぼくは思わず岡本さんに、「お大事にして下さい」といった。横にいた妻が急に泣きだした。顔中涙でぐしゃぐしゃにしながらついに大声をあげて泣きながらぼくの後から会場を出ていった。

状況一変、ぼくはイラストレーターの及川正通君と二人で見知らぬ夜の町を歩いている。彼の手には大きなショッピングバッグ。バッグの中にはマリファナでも入っているのか、盛んにバッグの中の品物を気にしている。二人はどうやら京都のぽんと町のお茶屋さんに行くところらしい。だが目的のお茶屋がなかなか見つからない。誰かに道を聞こうとした所へお巡りさんが近付いて

きた。ぼくは及川君のマリファナ？　のことが気がかりになったのでお巡りさんを避けるように背を向けた。が、及川君は恐れずにお巡りさんに道を尋ねた。

お茶屋さんの縁側に沿って小さな川が流れていた。水が恐ろしく透き通っていて川底の小石が電燈の光を受けて金色に宝石のようにきらきら輝いている。あまりの美しさにぼくは心を奪われ、じっと水の面を見つめていた。やがてたとえようのない幸福感が心の中から湧き起こってきた。その上お茶屋のおかみはわれわれのために心をこめて京都の料理をこしらえてくれている。こんなことがぼくを一層幸福にしてくれるのだった。

お茶屋の奥に食堂があった。数人の人達が集まって野球の話題に熱中している。なんでも巨人軍の四人の選手が解雇されたそうだ。長嶋イズムからはみ出した選手だそうだ。こんな話に聞き耳を立てている時、家の外の壁に誰かがボールを投げつけている音がした。見ると話題の四人の選手が壁を相手にボール投げの練習をしていた。四人共両眼から大粒の涙を流しているのが夜目にもはっきりわかった。

ぼくはしばらく彼等の練習風景を眺めていたが、妻が車でぼくを迎えに来てくれたのでこの場を立ち去った。車には妻の他に英、美々、それに以前家のお手伝いをしてくれていた金子ひろみさんがいた。車窓から遠くにビルディングが林立しているのが見えた。そしてその上空に北斗七星が瞬いているのが目に入った。だが北斗七星の柄杓（ひしゃく）の柄の先きにもう一つ見なれぬ星があった。〈あんなところに星があったかなあ？〉と思って見ていると、急に八つ目の星が、ぐんぐん大きくなり、猛烈なスピードでわれわれの車目がけて接近してきた。頭上を通過した時、それは燃え

るようなオレンジ色の楕円形のＵＦＯであることがわかった。あっという間の出来事だったため車の中の連中は誰一人としてこのＵＦＯに気付いた者はいなかった。間もなくぼくの頭の中に不思議な印象が起こった。〈今のＵＦＯは実体ではなく上空の母船によって投影された映像のＵＦＯである〉と。

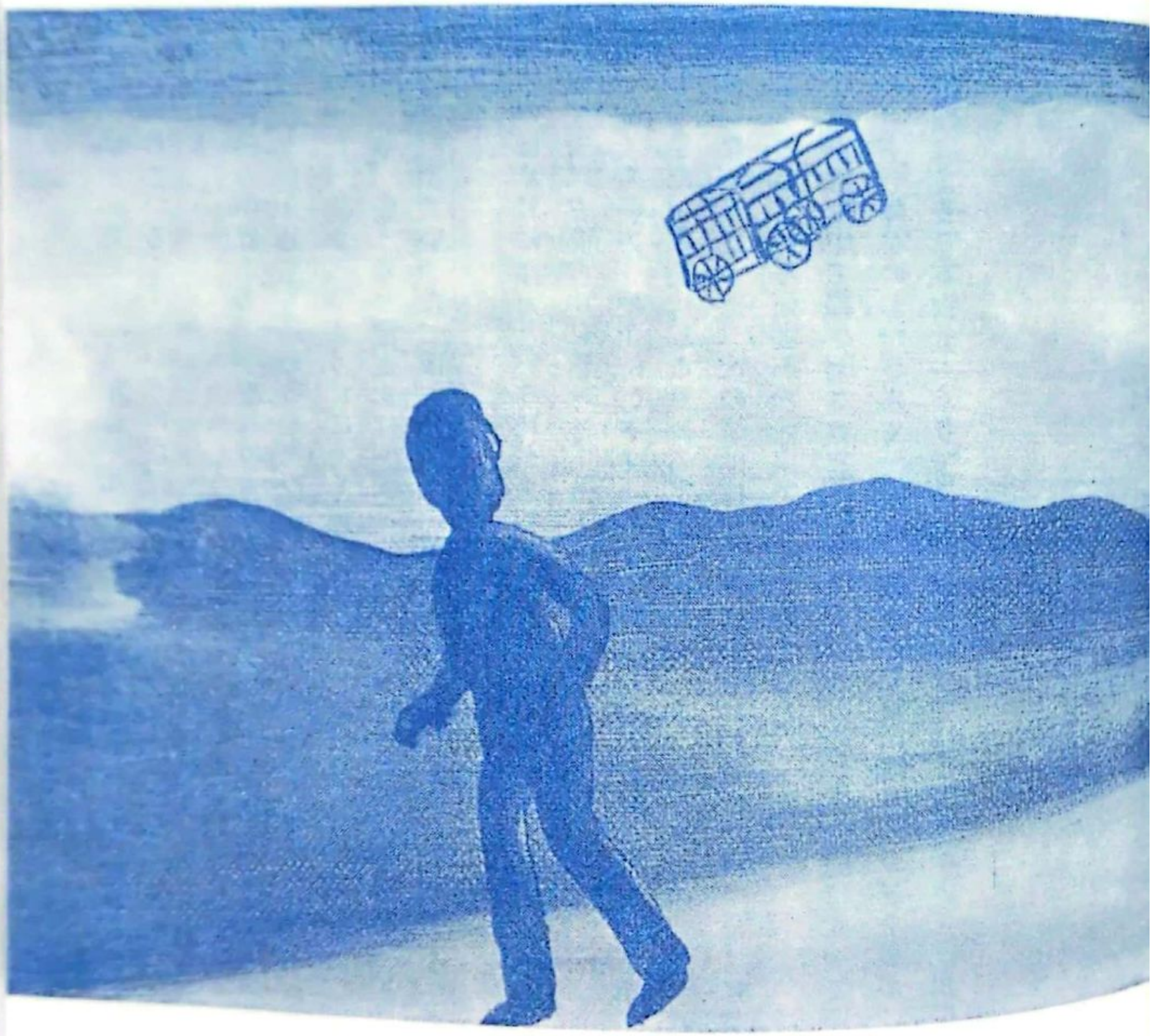
妻の運転する車は間もなく左折した。しばらく走ると三宅一生さんのところの皆川魔鬼子さんが電話ボックスで電話をしているのが見えた。ぼくは車を降り、「今夜ぼくの家に食事に来ませんか？」と誘った。彼女は母に了解をとるといって電話をした。彼女のお母さんは「昨夜も遅くなったので今日は早く帰りなさい」といった。

ここで突然状況が一変、ぼくは郷里の西脇の豊川橋の袂に立っている。川は増水していたが水は青々と美しく、ちょっと手ですくって飲んでみたい衝動にかられた。その時背後に人の気配を感じた。金坂健二さんが立っていた。そこへもう一人現われた。彼の友人らしい。どういうわけかこの人物がぼくのエッセイ集の序文を書いてくれることになっている。ぼくはくれぐれもよろしくと挨拶した。彼は人のよさそうな笑を浮べてしきりにてれた。

五月一七日——ブロードウェイホテル（スリナガル・インド）

大蛇とカブト虫

その1——



1976年５月17日——大蛇とカブト虫

間もなく洪水が来るという想念が起こった。このことと妻が大蛇を身体にまきつけることとが関連づけられている……というのだ。

その2――

銭湯。湯舟の中はまるで芋を洗うような混雑振り。湯舟の中で立ったまま、しゃがむこともできない。もうもうと立ち込める湯気の中でぼくは高倉健さんを見つけた。健さんはすぐ湯舟から上っていった。後を追うようにぼくも湯舟の外へ。脱衣場も大混雑。裏口から出ようとした健さんとばったり。逢うなり健さんは「横尾さん、実はぼくは最近ＵＦＯを見たんですよ！」とややためらった口調でいった。ぼくは健さんがＵＦＯを見たことを知って大変喜んだ。

その3――

西脇市のはずれに津万（つま）という村がある。村の中央を走る国道をぼくは妻らしき女性と歩いている。周辺はすでに夕闇の中に溶け込もうとしている。灰色一色の風景。

突然、ぼくの後方、地上一〇メートルから鉄製の骨組だけの玩具の電車がぼくに向って音もなく降下してきた。現実に起こり得る光景ではない、きっとＵＦＯの一種か或いはそれと関連したものに違いないと思った。次の瞬間ぼくの頭にひらめいた印象は、ぼくに異次元からコンタクトを求めようとしている何者かの仕業であるということだった。

玩具の電車は空中で掻き消された。妻とぼくは一軒の農家の庭に立っていた。クラスメイト（高校）の定本一郎君のお母さんも一緒だ。彼女の足元に玩具のカブト虫が一匹。玩具といいながらその動作はまるで本物そっくりである。それもそのはず玩具のカブト虫はついに本物の生物と化

してしまった。このような不思議な現象は定本君のお母さんにもともとそなわっている霊力がそうさせているのである。

その4——

家族全員がタクシーに乗って夜の坂道を走っている。ある家の前で停った。タクシーから降りた場所はどこかのビルの屋上のような所だ。われわれの他に、タクシーの運転手と数人の学生がいる。突然隣のビル越しに一機の大きなUFOが飛び出してきた。直径四メートルの円型のUFOの底部には中心に大きな窓のようなものとその周辺に小さな窓が円周にそって開いており、この物体はパラシュート状のもので吊り下げられていた。

UFOはわれわれの頭上一〇メートルの低空を越えて、別のビルの陰に隠れてしまった。学生達はUFOの後を追って屋上を駆け抜けていった。変なUFOだなあと思ってあっけにとられていると、そこへ「スポニチ」の記者だと名乗る男が現われ、ぜひ佳代子さんについて一度インタビューをしたいといいだした。あまりの唐突さにぼくは一瞬ためらった。

街から遠く離れた所に見える連山の上空を、一等星の二倍位の明るさの二つの光体が上下にもつれ合うようにして飛んで行くのが見えた。

五月一九日――ブロードウェイホテル(スリナガル・インド)
ホッケーと悪阻

豪華な邸宅である。元「芸術生活」の黒沢靖夫さんが広大な庭でホッケーを愉しんでいる。だがホッケーに興味のないぼくは部屋に戻って窓越しに黒沢さんを見ていた。

どの位見ていたのだろう、ふとぼくの横に人が近づいた気配で我に返った。一人の女性が立っていた。以前どこかで逢ったような気もするが、中々想い出せない。そういえば歌手の佳川ヨコに似ている。もしかすると本人かも知れない。二人はまるで恋人のように寄り添って窓の外の黒沢さんのホッケーを見ている。だがぼくの心は隣の女性に向いている。

ぼくはそっと彼女の左手に触れた。ぼくは彼女のブラウスの袖のボタンを器用に指ではずし、袖口から手を彼女の腋の下まで突っ込んだ。腋の下にぼくの指が触れた途端、彼女の全身の力は抜け、ぼくの胸の中に寄りかかってきた。この隙を見てぼくはいきなり、空いていた左手を彼女のブラウスの首元から突っ込み、彼女の左の乳房を握りしめた。ぼくの手に触れた乳首は戦いたように一瞬硬直した。

彼女は完全に全身の力を失い、その全てをぼくに預けてきた。

彼女はぼくの股間に片足を入れてきた。すでに勃起したぼくのペニスは彼女の太股に触れ、今にも射精しそうだ。ぼくは彼女を押しのけるようにして、ズボンの上から股間を握りしめ、あわてて便所に駆け込んだ。ペニスの角度が高過ぎ、思うように便器には射精できず、辺りに精液を撒

き散らす結果になった。

黒沢さんが便所にぼくを呼びにきた。女が窓際で倒れて苦しんでいるというのだ。黒沢さんは倒れている女に駆けより、抱き起こしながら「悪阻(つわり)のようです」とぼくを下から見た。〈そんな馬鹿な、さっきのぼくの行為によって妊娠したとでもいうのか〉。それでもぼくは心の中で〈ぼくではない!〉と否定し続けた。

五月二九日——午前六時〜七時＝インペリアルホテル（デリー・インド）

女の性器と悲鳴

ある女性と一緒に彼女の家にいる。彼女は以前ぼくの知り合いであったような気もする。彼女は現在結婚、あるいは同棲しており、彼氏は台所で料理を作っている。ぼくと彼女は窓際に座って表通りを眺めている。どことなく戦前の風景を思わせる。懐しさが込み上げてきた。自転車屋、鍛冶屋、鉄工所、畳屋、豆腐屋などが軒を並べている。

こうして彼女と二人でいるとまるで恋人か夫婦のような気がする。彼女は丸顔で目がとても大きく、肉感的で大柄である。時々ぼくを悩ましそうな表情で見つめ、扇情的なポーズを取ってみたりもする。そんな彼女が時には妻に思えたりもした。二人はすでに肉体関係を持っているようにも思えた。

何を思ったのか彼女は急に洋服を脱ぎ出した。全裸の彼女は見事なプロポーションをしていた。

胸はさほど大きくはないがお椀を二つ伏せたような実に美しい乳房とやや突き出したピンク色の乳首、ウエストはくびれその分だけヒップが大きく張り、茂みはまるで人工的に整えられたように美しく、どう見ても日本人離れしていた。

彼女はぼくの方にお尻を向け頭を下げてしゃがみ込んだ。だから彼女の陰部は丸見えになった。ところが性器だけが別の場所にあった。陰部寄りの左の臀部についていた。性器はまるで魚のえいの口に似て笑っていた。性器というより唇である。中から小さな歯さえ覗いていた。歯は肉でできていた。さぞかし名器に違いないと思った。いつの間にかぼくの性器は硬直した肉塊に変っていた。この様子を敏感に察知した彼女はいきなり手でぼくの熱い物に触れ、それを自分の性器に近づけようとした。ぼくも彼女の突き出した乳首に指を伸ばした。

その時、誰かがわれわれの側を横切った。二人はあわてて行為を中止した。彼女の驚きようは異常だった。悲鳴のような声をあげてそこにあったふとんを頭から被って、二度と出てこなかった。通り過ぎた男はぼくが以前勤めていた日本デザインセンターの神崎さんのように思えたが……。

六月一三日――ワルシャワ・グランドホテル八二〇号室（ワルシャワ・ポーランド）

長嶋監督とオレンジ色のユニフォーム

る。この食堂の経営者はぼくの高校時代のクラスメイト井上孝

君のお姉さんだ。
「筒尾さんが川上選手と大下選手と一緒に写真を撮られた時NETテレビの了解を取らなかったということで、私はNETの人から顎がはずれるほどこっぴどく叱られたのよ」
彼女は自分の顎を突き出すようにしていった。彼女の話によると彼女はこの仕事のマネージャーだったようだ。
さて、この問題は落着して、ぼくは再び長嶋監督と写真を撮ることになっているようだ。彼女がぼくに着せるために持ってきたジャイアンツのユニフォームは濃いオレンジ色で胸の文字は黒に近いグリーンだった。この新しいデザインのユニフォームを着て写真が撮れるのかと思うと、ぼくはまるで自分がジャイアンツの選手になったような気になった。
いつの間にかぼくは風変りな野球場に来ている。グラウンドの上にも屋根が覆っている室内野球場だ。ぼくが着ているユニフォームはどうやら堀内投手のを借りているようだ。ぼくの頭髪が短いため野球帽やユニフォームがわれながらよく似あっているように思えた。このままマウンドからボールを投げてみたくなった。すると観客はきっとぼくを堀内だと思うかも知れない。だが果たして投げたボールがキャッチャーのミットまで届くかどうか疑問だ。こんなことを想像しているところに長嶋が笑いながらベンチからやってきた。室内球場のせいか辺りは非常に薄暗いが、長嶋の笑顔とオレンジ色のユニフォームだけが妙に輝いて見えた。
ぼくと長嶋は野球の雑誌の表紙でよくとるようなポーズを作って、篠山紀信と思われるカメラマンによって写真を撮られた。

六月一四日――午後三時＝ユーロビルディングホテル五五四号室

白光体とグリーンの背広

西脇の生家の前に立ってぼくは夜空に向ってテレパシーを送っている。勿論ＵＦＯと交信するためだ。空は一面どんよりした雲によって覆われている。もしＵＦＯが現われるとすると雲の下だろう、そうするとかなり大きく見えるかも知れない、とそんな期待を抱いてぼくはかなり長時間、首が痛くなるほど空を仰いでいた。

と、何やら白く光ったものが二つ、南東から北西の方向に走った。その白光体は薄く滲んだように見えたので、きっと雲の上だったのだろう。〈ＵＦＯ！〉。強い感応がぼくの内から起こった。ふと近くの田んぼにＵＦＯが降下したような気がして、長屋の裏手にある田んぼに向って走った。ぼくがそこで発見したものは暗闇の中に二つの光が飛びかった跡だった。それははっきりと残像を描いていた。まるでもつれ合ったネオン管が宙に浮いているように見えた。光の残像が浮いているちょうどその下の地面には自転車の車輪が転がっており、スポークだけが飴のようにくにゃくにゃに曲ってしまっていた。どうやらＵＦＯから放射されたフォース・フィールドのエネルギーによって破壊された模様だ。また田んぼの中にはぼくの背広の上衣だと思われるグリーンのチェックのものが、まるで銃弾を受けたように無数の穴が開いたまま泥の中に投げ捨てられていた。ＵＦＯの仕業に思えたが、サタン的ＵＦＯでなければいいのにと心の中で祈った。

六月一八日――午前四時＝ホテル・アストリアパレス八一六号室（バレンシア・スペイン）

しもた屋と娘

一軒のしもた屋である。その家の中に四人の人達が深い悲しみに包まれて、それぞれが向い合ってうずくまるようにして座っている。こんな様子をぼくはその家の外から眺めている。ぼくの立っている隣には、この家の娘と思われる二〇歳を少し過ぎた女性が、同じように家の中を覗いている。家の中の三人は、この娘の両親と、この娘の妹であることがすぐわかった。

ぼくの目に写る情景はそれだけなのに、ぼくの内部から声なき声によって、次のような観念が湧き起こってきた。

この娘の父親がまだ娘が幼かったある日ふとしたことで、この娘をこっぴどく折檻したことがあった。彼女は父親に叱られたことがよほどショックだったのか、そのまま家出してしまった。そしていつの間にか十数年の歳月が経った。残された三人は娘の行方を捜し続けたが、ついに消息がつかめなかった。そんな悲しみから逃れるために、この家に娘の代りに女中を雇い、彼女を家出したわが娘のように、いやそれ以上の愛情をもって可愛いがった。このことは父親にしてみれば唯一の罪滅ぼしでもあったようだ。

そして長い年月の末、今やっとわが娘と再会したものの、娘は父親を初め、家族の者の顔や幼い頃の記憶を一切忘れてしまっていた。このことを知った家族は取りかえしのつかない深い悲しみと、自らのカルマのなす運命をただ憎むだけであった。

家の中からは娘の妹の悲しみに満ちた嗚咽が空気を震わせながらぼくの耳に届いてきた。

六月二〇日――午前六時ーバラドールナショナルホテル三〇三号室（カルベ・スペイン）

茶色のセーターと三島由紀夫の亡霊

ぼくと妻はかなり年数のたった日本家屋の一室にいる。部屋の大きさは八畳位だろう。しかし家具が多いのと、部屋中が雑然としているせいもあって、足の踏み場もないほどだ。部屋の中央にある座り机を挾んでぼくと妻はこの家の主人と思われる人物と向い合っている。どこかで見たことのある顔だ、としばらく考えていたが、やがてこの人が総持寺の板橋老師であることがわかった。

板橋老師は眼鏡の奥の優しい小さな眼で笑いながら、われわれに一着の男物のセーターを示した。何の変哲もない茶色の無地のセーターである。

「なかなかいいセーターでしょう。私はこのセーターが大変気にいっておりましてねえ。またこのセーターについて三島由紀夫先生が評論を書いて下さったのです」

といって、数枚の原稿用紙をぼくに手渡した。

かつて見慣れていたこの原稿用紙は既製品の、茶色の罫の入ったどこにでも売っているもので、生前の三島さんが愛用していたものに間違いなかった。またそこに書かれている文字も疑いもなく三島さんの直筆であった。万年筆で書かれた文字は流麗ではあるがどこか荒々しく、三島さん

の性格をよく表わしていた。

しかし驚いたことに、この三島さんの文章は三島さんの死後に書かれたものであると老師は説明した。ぼくは、三島さんが何の理由でこのような文章を書いたのかまた、どのようにして死者がこの原稿を書くことに成功したのかがどうしても理解できなかった。想像できることは、老師かあるいは霊媒に三島さんの霊が乗り移って書かせたいわゆる霊界通信であるということだ。このことが事実ならば、大変な事件であるとぼくは思った。

ふと背後に人の気配を感じて、ぼくは後を振り向いた。庭に面した障子が少し開いて、そこに一人の男が立っていた。男の顔からは生気が全く失われていたが、まるで武士のような威厳があった。頭に鉢巻をして、その眼は虚空を睨んでいた。

男が三島由紀夫の亡霊であるとわかるまでには、そんなに時間を必要としなかった。ぼくの体は一瞬金縛りになったまま、恐怖のため口もきけなかった。三島さんの亡霊の出現はぼくにある種の懐しさを感じさせてくれたが、三島さんが亡霊であるという事実にはやはり恐怖せざるを得なかった。

亡霊の三島さんの顔は生前と比べようもないほど変ってしまっていた。頭髪や眉毛までが薄くなり、しかも白くなっていた。眼は例によって大きく見開いているにもかかわらず生気がなく、まるでガラス玉のようであった。おそらく霊界にいる間に、こんなに年老いてしまったのかも知れない。この三島さんの変容がぼくには増々恐ろしく感じられた。

しかし、次の瞬間ぼくはふと、この男は三島さんの亡霊ではなく、それを装った者の仕業ではな

いかと思い始めた。するとこの男はつかつかと部屋の中に入ってきた。そして部屋の中に敷いてある万年床に何くわぬ顔をして頭からもぐっていった。この男が三島さんの亡霊ではないとわかると、急にぼくは金縛りから解放され、勇気がでてきた。この時とばかりふとんの上から男にのしかかって、首を締めつけながら、妻に「一一〇番に電話!」と叫んだ。

六月二一日——午前五時三〇分=ホテル・カルトン六〇六号室(アリカンテ・スペイン)
地の底の死者と奇妙な体操

ぼくは暗い地下の洞窟のようなところにいる。ここは人間が死ぬと最初に来る地の底らしい。しかしぼくにはどうしても自分が死んでいるという自覚がないだけに、なぜこのような場所にいるのかがわからない。ぼくの立っている周りには大勢の死者達が素裸のまま並んで、新入者のぼくをこれから取り調べようとしている。

死者の多くは老人であるが、中には中年の男女もおり、彼等の大部分が外人のように見える。また彼等の肉体は大方たるんでいて、蠟人形のように生彩がなく、不気味な物体にしか見えない。ぼくはこの連中に取り囲まれながら彼等がまるでボッシュの絵の登場人物にそっくりだと思った。一体これから何が起きようとしているのか、ぼくにはわからなかったが、心の中にはどうにでもなれという覚悟のようなものができていた。いよいよ取り調べが始まった。ぼくは皆んなと違って洋服を着ていた。彼等の一人が、空港のボディ・チェックと同じような方法で、洋服の上から

身体を強く撫でるようにして触った。そしてその手が上から下に降りて、肝心のところに手がきた時、彼はぼくの股間を握りしめた。こんな風に、ぼくは二、三人から同じようなボディ・チェックを受けた。目的は、死の国に入国する時死者が武器を持っていないかどうかを調べるためらしかった。

ボディ・チェックが終るとぼくは裸の男に連れられるようにして土の階段を昇らされた。昇った所はかなり広い洞窟になっていたが、そこには無数の死者がひしめき合っており、まるで朝の通勤電車のように身動き一つ出来ない状態だった。ぼくはいつの間にか、後からどんどん押されながら人混みの中心まで来てしまった。引きかえすにも行くにも全く自由がきかない。ただたとえようのない恐怖と不安が襲ってきた。

突然体が宙に浮き上ったかと思うと、物凄い勢いでぼくは群衆とともに前方に押し流されていった。どこかに大きな穴が開いて、一斉にその穴の中に吸い込まれて行くような感じだった。

（いよいよおしまいだ！）と思った途端、ぼくはひとりぽつんと別な場所に立っていた。辺りは真暗で夜のようであるが、どうやら地上らしい。ふと横を見ると高校時代の同級生の旦岡君が立っていた。彼を見るなり（助かった！）という気持が起こった。というのも彼がお守をさせてあったからだ。彼がきっとあの地獄の底からぼくを地上に導いてくれたのだろう。

二人が立っている場所は成城学園の並木の道に似ていたが、路に電車のレールが敷いてあるところから判断すると、東京の場所のようでもあった。こんな見知らぬ町に来てしまって、さあ困ったと思案している時、突然前方の暗闇の中から一台の古びた都電が走って来た。車輌と…

ルの軋む音が闇を突いて異常に大きく、また不気味に聞こえた。電車は二人の前を通過して行ったが、車内には灯がなく真暗だった。しかし車内から微かに若い女の声が聞こえる。声は次第に大きくなり、「怖いッ!!」とか、「助けてッ!!」という悲鳴になっていった。ぼくはきっと電車の振動を怖がっているのだと考えたが、それにしても電車が遠ざかるにしたがって逆に女の悲鳴だけは大きくなっていくように思えた。

しばらくは電車の音と悲鳴が聞こえていたが、いつしかそれらも闇の中に掻き消され、辺りは元の静けさに戻った。民岡君とぼくは街灯もない夜の桜並木をレールを踏んで歩いていった。しばらく行くと、見なれた成城学園前の中華料理店の角に出た。が、奇妙なことにこの中華料理店の角の通りだけは昼のように明るい。いや通りだけではない、空までがきれいな青空である。

その晴れ渡った青空を見上げながら歩いていたぼくの目に一瞬キラッと光る物体が映った。(おや? ＵＦＯかな?)と思い、しばらく空を観察していたがそれは二度と見えなかった。

中華料理店の角を曲ってしばらく行くと見晴らしのいい田畑の道に出た。道に面して一軒の家が建っている。その家の前に浅丘ルリ子さんの妹さんが立っていた。どうやらルリ子さんの義弟の漆田れいいち氏の家だとわかった。漆田さんは留守でいなかったが、ぼくと民岡君は家の中に入れてもらった。案内された部屋は四方壁で囲まれた和室だったが、(空が見えないのが残念だなあ)と思った途端、目の前の壁が透明になって家の裏の畑の風景が現われた。

裏の畑では三人の若者がこちらを向いて奇妙な形の体操をしていた。ところがよく見ると中央の

CamScannerでスキャン

男は自分だった。こちらにいるぼくは坊主刈りであるが、あちらで体操しているもう一人のぼくは長髪で、風が吹くたびに髪が顔にうるさくからまった。そして風の方向が変ると、どういうわけか長髪の隙間から坊主頭がチラチラと見えた。
両側の二人の若者に比べるとぼくの表情はさえず、なぜか空虚で、悲しそうだ。
「一、二、三、四！　五、六、七、八！　九引く一は八、九、十、十一！」
と奇妙な掛声をあげながらほかの二人は元気よく、おかしな体操をしている。ぼくは家の中からそれを眺めながら、最近の若者は実に面白いなあ、とつくづく感心していた。

六月二二日――午前三時＝ユーロビルディングホテル一〇七〇号室（マドリッド・スペイン）
地軸の大変動と死の瞬間

生家の表通りに面した縁側に立って、父がぼくの高校時代の制帽を目の高さに翳し、校章に書かれていると思われる文字を感嘆まじりの声で読んだ。
「『青年の家』か……」
ぼくはそれを横目で見ながら、玄関に立って美しく晴れ上った青空を見ていた。家の中から母の呼ぶような声がした。ぼくは家の中に入り、母と一言、二言話した後、再び外に出た。
その時「おや？」と思うことが前方の空に起こっていた。地面が壁のように空に突っ立っていた。蜃気楼のようだ。ぼくは白日夢を見ているような気持でこの奇現象を食い入るように眺めていた

が、次第になんともいえぬいや～な予感がしてきた。

突然足もとがグラッとしたかと思うと、ぼくはあっという間に地面にたたきつけられた。そして足の方から下方に、体がずるずると引きずられるようにして滑り落ちていった。ぼくは咄嗟に玄関の敷居に両手を伸ばしてしがみついた。地面が大きく傾き始めた。

（地軸の変動が起こった！）直感的にぼくはそう思った。これで全てが終りだとも思った。死に直面したたとえようもない恐ろしさに、ぼくは一瞬意識を失いそうになった。その時ぼくの頭を掠めたのは子供と妻と両親のことだった。特に子供のことが気になった。今この瞬間ぼくと同じような恐怖に襲われているのかと思うと、気も狂わんばかりだった。

ぼくは、子供にいつか近い将来地軸が変動する、ということと、もしその時が来ればアトランチスやムー大陸が海底深く沈没したように、われわれも同じ運命になるということを教えておけば、わけもわからずに死んでいくよりよかったのではないかと後悔した。

いよいよ地面が大きく傾き、手で敷居をつかまえているのがやっとだった。地球の重力の位置が完全に狂ったようだ。ぼくの体は目に見えない力で足の方から引っぱられている。すでに地面は四五度の角度に傾いている。家もメリメリと大きな音をたてて崩れ出した。地面のあちこちに亀裂が生じた。地球の大変動が起こったのだ。人類がかつて経験したことのない未曾有の大異変である。ぼくの体は崖っぷちにぶら下っているような感じになってしまった。手を離せば、どこまでもどこまでも地表を滑り落ちていくしかない。そしてやがて下に口を開けて待っている巨大な地割れの中に呑み込まれていくのだろう。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

死は目前に迫っている。死から逃れられないと観念するが、一方では何んとしても助かりたいという願いは消えない。一秒でも二秒でも生きていたい。地面が再び沈み始めた。ぼくはこの沈んでゆく地球から体を宙に浮上させたいと思い、何度も足で地面を蹴って飛び跳ねる真似をするが、地球の引力は増々下方に働くばかりである。突然大きな音と共に、手を掛けている敷居がぐらりと傾いた。見るとぼくの足元に大きな亀裂が入った。地面は完全に垂直に立っている。その巨大な黒い亀裂が全てを呑み込んでいる。家も田畑もその中に濛々たる砂煙を上げながら物凄い勢いで落ちていく。あと数秒でぼくの体も地球の内深く落ちていくのだ。

死の恐怖が頂点に達した時、ぼくは思わず神に救いを求めた。世の終末にＵＦＯが救いに来ると信じていたが、空にはその印さえない。ぼく一人を残して全ての人達は運ばれていったのだろうか。

大きく、家がぐらっと揺れたかと思うと、ぼくは家と共に何百メートルもの下方に落ち始めた。

「死ぬのが怖い!!」という観念が、ぼくの全身を電流のように貫いた。

六月二九日――午前三時＝ホテル－アルフォンソ一三世一六一号室（セビリア・スペイン）

股間と手淫

集会場。教会のようでもあり、講堂のようでもある。長椅子が沢山並んでいる。人はまばら。ぼくが腰を掛けている前の長椅子に「プレイボーイ」のカメラマン、多田善一さん。またぼくの隣

の長椅子にはスペイン在住の松尾さん。どうやらここは旅先のスペインか。松尾さんは黒人のように日焼けした上半身裸で、彼の前の長椅子の浜田さん（バークレーでぼくの通訳をつとめてくれた女性）と思われる女性と立った姿勢で抱擁している。彼女は松尾さんのズボンの上から彼の股間の辺りをまさぐっている。見る見る彼の股間は彼女の刺激を受けて隆起し始めた。彼女の細い指が器用にズボンのファースナーを外したかと思うと、中から隆々とした肉塊が垂直に頭をもたげた。彼女の二つの手が握りしめてもまだ亀頭部がのぞいているほどの巨根である。彼女の十本の指がせわしなく密着した二人の下半身で動き続けている。

抱擁しているのが彼等だけだと思ったら、まだ他にもいた。二組ばかりの外人の男女も松尾さん達と同じような行為にふけっていた。男女共上半身裸である。このことを多田さんに合図して知らせたが、彼は彼等を一瞥しただけだった。

場面が変って建物の外。スペイン独特の花に飾られた白い壁。それによりかかって手淫にふける松尾さん。三〇センチもあろうと思われる巨根がズボンの外にのぞいている。

七月八日——自宅

セロテープと新天地

新西脇駅の近くを流れる加古川の堤をリュックを背にした若尾真一郎君（イラストレーター）と歩いている。ぼくは急いでいたので歩くのが遅い若尾君を後に先きに行くことにした。

ぼくの行き先は自我に目覚めた人達が輪廻の果てに到達する最終的な場所、——新世界なのである。川の下流に和布（村）がある。そこへ行けば目覚めた人達が沢山いるはずだ。

やがて、そこに辿りついた。スペインの町の中にある広場に似ていた。色とりどりの洋服を着た人達がテーブルを囲んでベンチに腰を下している。地面には堅くなった雪が積っており、どうやらここは日本アルプスの立山の中腹のロープウェイがある場所？　のようだ。〈ここが新天地か?!〉。別段高揚した気分も起こらず。すると、どうやらここは新天地ではなさそうだ。

その時、テーブルの上にあった小さなニッケル状のリングが雪の上に転がり落ちた。ニッケルは半ば凍ついた氷のような地面をどこまでも転がっていった。転がりながらニッケルのリングはセロテープに変っていった。

セロテープが転がるのを止めた時、セロテープの金具（テープをカットする部分）が示した方向に新天地があるという想念がぼくの内部から起こってきた。やがてセロテープは転がるのを止めた。

金具が指す方向には、天に届かんばかりの峰が濃紺の空に白銀色に輝いて聳え立っていた。そこには人を寄せつけない自然そのものの姿があった。

七月二三日——自宅

ナイアガラ瀑布と頭蓋骨

[illegible]——ティアオ[illegible]

四方壁に囲まれた薄暗い部屋の中で二、三人の人達と一緒に新聞を見ている。社会面のトップに横長の写真が掲載されている。ナイアガラ瀑布の写真だ。写真のナイアガラ瀑布は完全に凍結してしまっている。北米を襲った寒波のせいらしい。よく見ると写真のあちらこちらに人の頭骸骨が見える。水が凍結してできた自然現象だろうが、それにしては頭骸骨がはっきり写り過ぎている。いわゆる霊写真の一種か。人類の明日を予感しているようであまり気持のいいものではなかった。

七月一五日——午後五時＝自宅
妻の睡魔と浮上

妻と二人で映画館に入った。彼女は後の方の席に座ったが、前の方がスクリーンが大きく見えて迫力があるからといって二人で齧付き(かぶりつき)に座った。スクリーンは真正面の他に右側の壁にもあった。そしてこの両方に同じ映画の同じ場面をアングルを変えて撮った二種類のフイルムが上映されていた。共に白黒の画面である。
妻は首を横に振りながら観るマルチスクリーン映画が苦痛なのか、間もなく居眠りを始めた。ぼくは折角新型の映画を観に来ているのだから、ちゃんと見るように妻を諭すのだが彼女は自らの睡魔に勝てないらしく、絶対に目を覚まそうとはしなかった。ぼくも一人で観ているのがつまらなく感じたので、妻と共に映画館を出ることにした。

場所が変って妻とぼくは中国風の建物の中にいた。神社か仏閣のように思われた。建物の隅には何百本という数の線香が煙を上げていた。建物の中一杯に香煙がたちこめているにもかかわらず、匂いがない。にもかかわらずぼくにはこの線香が白檀であることがわかった。またここがインドであることも直観でわかった。それにしてもなぜこんなところに、と思っている時、背後にある公衆電話に電話が掛かった。電話に出ると相手は暇々堂の谷口さんだ。今、京都駅にいるからすぐ逢いたいという。ぼくもたった今ここに来たところだから谷口さんに来てくれるように頼む。

谷口さんと逢った場所は全く別の場所だった。谷口さんと妻、そしてぼくの三人は切り立った深い深い穴の中にいた。直径一五、六メートル。深さは三〇メートルとも一〇〇メートル以上とも思われた。計り知れない深さである。穴の壁は黒い粘土状の土で多分に水分が含まれているように思えた。穴の底から上を仰いでも口の辺りが真暗で、そこが夜空なのか、それとも地底の空洞なのか、全く実体がつかめないまま心細い気持になってきた。

突然身体が軽くなったかと思うと身体が宙に浮き上った。三人共同じようにして、ゆっくりだが上昇し始めた。身体が宙に浮いているというより魂が抜けていく感覚といった方が正しい。

七月一五日――午後八時・自宅

湯舟と女の生首

ぼくは一人で旅館の家族風呂にいる。湯舟は木でできている。風呂場の戸を開けたままだから庭

下を行き来する女中の姿が湯気の向うに見える。誰も裸のぼくに関心を示そうとする者はない。湯が熱いので水を加える。何かの拍子に手にしてた鍵を湯舟の中に落とした。湯舟の中の鍵はみるみる三、四〇センチの大きさに拡大された。鍵を拾うために片足を湯舟に入れた。足の爪が剥がされるような痛みを感じた。熱湯に近かった。徐々に身体を湯舟に沈めた。体積の分だけ湯が溢れ出した。湯舟の縁を湯が光りながら滝のように流れ落ちた。

どうしたことか、身体が湯舟に沈まず、浮き上ってしまう。ふと湯舟の縁を見ると、そこには汚い茶色の苔がびっしりへばりついている。指で触るとぼろぼろと剥げて、湯舟の中にこぼれ落ちた。あまりの気味悪さに全身に悪寒が走った。

その時、戸が開いたままの入口から老婆がぬーっと顔を突き出した。老婆の左手に女の生首がぶら下っている。ぼくは湯舟の中で腰を抜かさんばかりに驚いた。大声をあげて老婆を追い返そうとしたが、金縛り状態で声が出ない。恐怖が極限に達した。手を振り上げて何かを投げつけようとするのだが、その手も動かない。

老婆は睨みつけたままぼくに近づこうとしたが、何を思ったか急に思い止（とど）まって後ずさりした。

その時、老婆の首が胴から切り離されるようにすーっと消えていった。

八月一日――高輪プリンスホテル三六六号室

少女達と至福

[illegible]

[illegible]

[illegible]

天井がぽかっと外れたかのようだった。ぼくの身体はこのまま無限の夜空に吸い込まれていくような錯覚を憶えた。そして不思議なことに、この夜空はぼくの頭の中に実在しているという感覚が起こった。肉眼で見ているのではなく一種の脳内視現象というやつである。それにしてもあまりにも強烈で鮮明な現実感である。

次にぼくの意識を通して次のようなメッセージとも印象ともつかないものが伝わってきた。

〈宇宙船からの力によって自分は改造されつつある〉

またしてもUFOとの接触だ。嬉しい感情と同時に、一体どうなるのだろうという不安が襲ってきた。金縛りは益々激しさを増してくる。次第に意識が朦朧としてきた。隣の妻は何も知らない。このまま気を失ってしまったのだろうか。ふと気がつくと、コンクリートで縁を固めたどぶ川を挟んで両側に汚らしい家がひしめき合っているとても雑然とした場所に立っていた。塵で半分埋まったようなどぶ川に淋しそうな表情を浮かべた綺麗な一人の女が木の長椅子を持ち込み、その上に何やら植物の実のようなものを沢山並べて干している様子だった。どこかで見た顔である。記憶を辿ってみると、二〇年前結婚したばかりの頃住んでいた神戸の青谷のアパートの近くの若い人妻だった。彼女とは一度も口を利いたことはなかったが、ぼくの中から不思議な懐しさが込み上げてきた。

彼女の気を引こうとしている時、ふとしたことからどぶ川の中の長椅子にぼくの身体が触れ、彼女が干していた植物の実の一つが汚物の中に落ちてしまった。汚物の中から拾い上げた植物は、赤ほうずきのようでもあるし、正月のお飾りに使う何かの一部分のようでもあった。

彼女を後にしてぼくはどぶ川のコンクリートの幅の狭い縁を歩いていった。ぼくが歩いているのを見つけてどぶ川に面した家々の中から見憶えのある郷里の商店街のおばさん達が姿を現わした。どの顔も懐しく感じたが、以前から特別親しくしていなかったこともあって自分から声を掛けるには少々気恥ずかしく思えた。

彼女達の視線を背にぼくはさらにどぶ川の上流に向って歩いていった。しばらく行くと妻と思われる女性がこちらを向いて立っていた。彼女が妻であるかどうかは定かではなかったが、彼女がぼくに与える波動にはとても他人とは思えない親しみと安心感があった。彼女に接するなりぼくの気持は一度に解放され、言いたかったことを口にした。

「ぼくは昨夜UFOによって何らかの影響を身体に受けたようだ」

妻と思える女性は何もいわずにただ微笑を浮かべて聞いているだけだった。彼女の反応が知りたかったためにさらに続けた。

「ぼくは近頃、少しサイキックな面が強くなったように思うんだが……」

彼女は黙ったままぼくと肩を並べて歩き出した。

八月一〇日——自宅

四つの輪とUFO

陽が傾き始めた西の空にO字型のオレンジ色の輪が三つ浮かんでいる。

CamScannerでスキャン

〈ＵＦＯかもしれない〉そう思って目を凝らして見ていると、四つ目の輪が現われた。突然現われたというより、描かれたというべきだろう。最初は小さな光点であったが、それがゆっくりと動きだし、円を描いたのである。やがて四つの輪は風に流されるように歪みながら次第に色が薄れていった。ＵＦＯが描いた飛行雲――か。

ＵＦＯだとわかると急にぼくの気持が高ぶってきた。それを合図のように小さな光点がスピードを増してぼくに接近して来る。オレンジ色から燃えるような真紅の色に変りながら。ぼくの頭上一〇メートルの所でＵＦＯはぴたっと停止した。ＵＦＯの底面に三個の丸い着陸ギアーが回転しているのが見えた。アダムスキー型と呼ばれるＵＦＯである。

やがてＵＦＯはぼくから少し離れた地面に着陸した。ＵＦＯが着陸した場所は郷里の実家の近くにあるガレージの前のように思えた。下から見た時はアダムスキー型だったが、全体の型はむしろ底の丸い灰皿を二つ合わせたような土星型に近いタイプだった。そして球体の部分が赤と青のペンキで荒々しく塗装されていた。

ＵＦＯの中から一人の男性の宇宙人が現われて、ぼくに同乗を勧めた。ＵＦＯとの遭遇がこのように現実になるとさすがに恐ろしくなってきた。だが横に友人のカメラマンの倉橋君がいたのを幸いに彼を誘って思い切ってＵＦＯに搭乗することにした。宇宙人は大いに喜んでわれわれをＵＦＯの内部に案内した。

ＵＦＯの内部は非常に狭く、中央のテーブルを囲んで椅子が三脚あった。三人乗りである。シートベルトをしめると間もなくＵＦＯは離陸した。一瞬身体が座席に沈んだかと思うとあっという

1976年8月10日——四つの輪とUFO

間に上空に達していた。壁の一部分がいつの間にかスクリーンになり、下界の風景がそこに映し出された。機はどんどん上昇しているのか、見る見る地上が遠ざかっていった。〈ついにＵＦＯに乗った！〉という感動がぼくの中からとめどもなく込み上げて来た。〈このままどこかに連れて行かれるのじゃないか？〉という不安もあったが正面に座っている宇宙人の笑顔を見るとその心配も消えてしまった。宇宙人はやや浅黒い皮膚の色をして、ポリネシア人のように鼻が少し横に広がっていた。宇宙人は器械に強い倉橋君にＵＦＯ内の器械装置の説明をしながら電話器についているようなダイヤルを指で回している。仲間と連絡を取る装置らしい。ぼくはＵＦＯの内部の様子をくまなく観察し、頭の中に全てを記憶するために意識を集中した。またこの感動を意識の深淵に叩み込むことも忘れなかった。どこをどのように飛んだのか知らされなかったが、やがてもとの場所に降りて行くようだった。

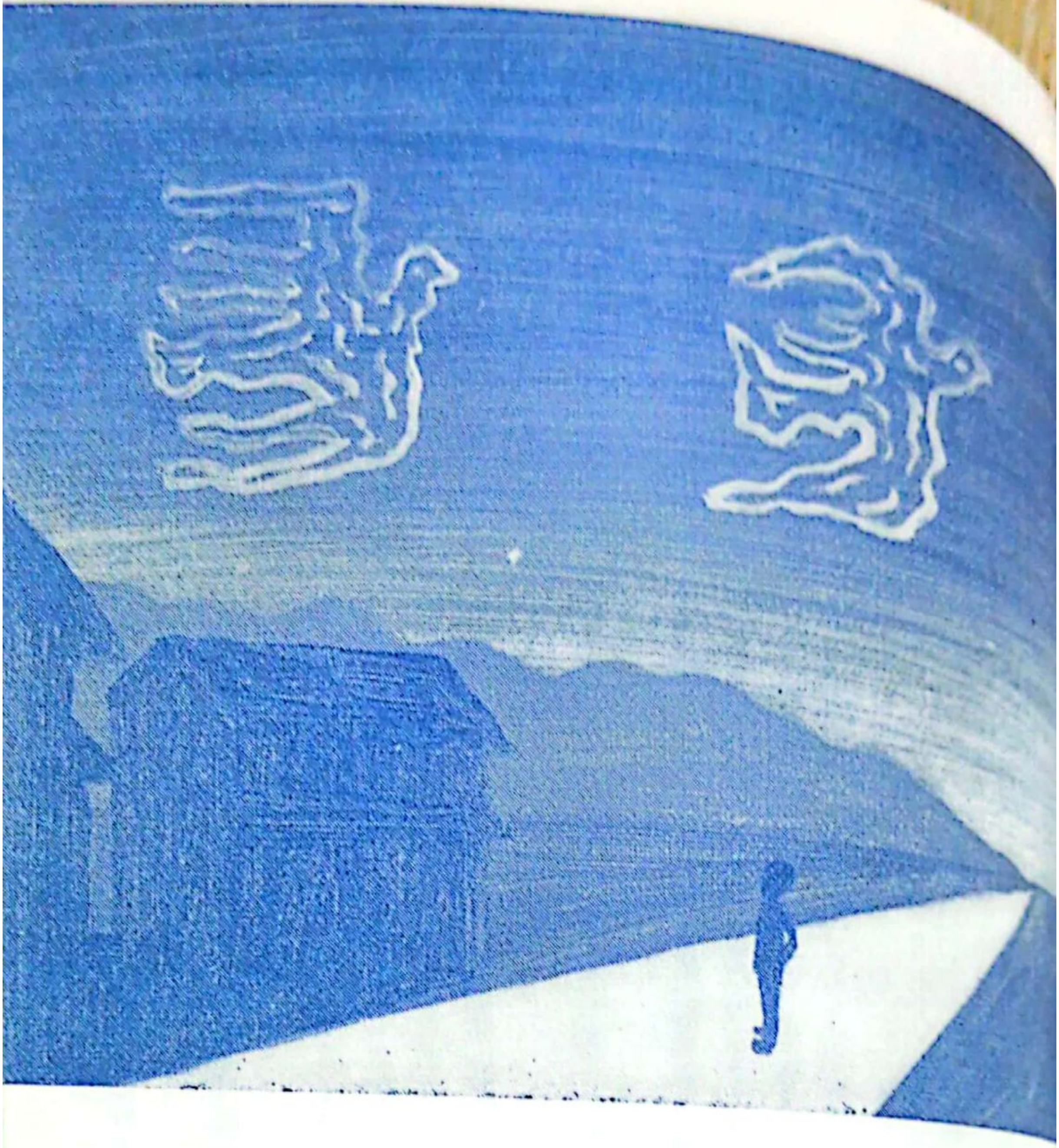
八月一六日——滝寺荘かげろうの間（滝野・兵庫県）

鳥の絵模様と大山

夜の見知らぬ田舎の国道を歩いているぼく。夜空に何か白く動くもの。白く薄ぼんやりした巨大な鳥の絵が二つぼくの進行方向と平行にゆっくりと移動している。まるでインカの遺跡に描かれている絵模様そっくり。絵の線の部分が時々白銀色にキラッと光る。

ぼくはこの絵模様がＵＦＯと深い関係にあるように思えた。ぼくはこの絵模様の形をはっきりと

CamScannerでスキャン



1976年8月16日――鳥の絵模様と大山

CamScannerでスキャン

頭に記憶するために、目で形をなぞった。この作業は困難をきわめた。このような超常現象に触れるのが初めてのことだけに非常に興奮していたからだ。

しかし、夜空を飛ぶ鳥の図形は次第に薄れ、いつの間にか広大な闇空間に吸収されるように溶けていった。

と同時にぼくが立っている路上に突然二人の人間が姿を現わした。まるで降ってわいたように目の前に出現した。二人は日本の神話の世界の主人公そっくりの姿をして突っ立っていた。二人と言葉を交したような気がするが、何が語られたかは記憶にない。二人が立っている後方に山が見える。大山——。絵模様の鳥。神話の人物。大山。この三つは何か深い関連で結ばれているように思える。だが、その意味するところがつかめない。

ぼくは二人の人物の正体を知りたいと思った。と、その時ふと心に起こった印象を口にした。

「宇宙人？」

言葉と同時に二人の人物はその場から掻き消された。〈やっぱり宇宙人だったのだ！〉消えたはずの二人は次の瞬間ぼくの後方二、三〇メートル先きの田んぼの畦道に立って、こちらを見ているではないか。テレポーテーション（瞬間移動）である。宇宙人は神代の時代から大山に来ていたのである。大山の秘密がわかったような気がした。

八月二〇日――三宝院・高野山
山羊の足と三島由紀夫

荒涼とした平原である。ただひとつ遠くに岩山が霞んで見える。アメリカの西部らしい。なぜぼくがそこにいるのかはわからないが、ぼくの他に数人の人々がいる。この人々に混じって、一人の男が銃を構えて、十数メートル離れたところに建っている南北戦争時代の兵士の銅像を狙っている。よく見るとその男は三島由紀夫さんである。「ズドン！」。銃声がしたが、銅像はびくともしなかった。

「当らなかった、というより当てなかったんだよ！」

といって三島さんはわれわれの方を振り向いて笑った。

再び三島さんは銃を構えた。今度は真剣そのものの表情である。銃口はぴたっと止り、微動だにしない。本気で撃ち落とす気だな、とぼくは思った。みんなの視線が一斉に銅像に集まった。腹の底に響くような銃声と共に銅像の剣を捧げた左手首が宙を一回転して地面に落ちた。

三島さんは「どうだ？」というような得意な表情を浮かべてわれわれを見廻わした。しかしぼくは、三島さんが感動しているほど感動していなかった。三島さんのアトラクションが終ると人々はそれぞれの馬車に乗って引きあげていった。ぼくは三島さんと同じ馬車に乗ることになった。われわれの馬車が走り出した時、ぼくは馬車の後から不思議なものがロープにつながれてついてくるのに気づいた。一瞬奇妙な形をした動物に思えたが、よく見るとそれは山羊の片足だった。

山羊の片足が生きもののようにロープにつながれたままぴょんぴょんと跳びはねるようにしてついてくる。
ぼくは随分おかしなことがあるものだと思いながら馬車の中からこの山羊の片足を眺めていた。馬車が平原の中にある公衆便所の前にさしかかった時、山羊の片足はロープをくっつけたままひとりで用をたすために便所の中に駆け込んでいった。そのためにわれわれの馬車は急停車して、山羊の用たしが済むまで公衆便所の前で待たなければならなかった。
山羊の片足が便所に駆け込んでいく姿を見てぼくは、一体こいつのどこに頭や目があるのだろうか？　また、用をたすための器官がどこについているのだろうか？　と、思案にふけっていた。やがて用をたした山羊の片足が便所から出てきたので、よく観察した。足の付け根のところに大きな薄い桃色をした袋のようなものがついていて、この袋がどうやらこの奇妙な動物の用をたすための器官であるように思えた。
こんな不思議な出来事は、きっと夢にちがいない、だからこの情景をぼくは夢日記帖にちゃんと記さなければならない、そう思いながら、ぼくはそばにいた三島さんに、
「たった今、三島さんの夢を見ましたから、夢日記に書きますよ」といった。三島さんはちょっと驚いたような表情をして、
「おい、あんまり俺の変な夢は書くなよ！」といった。
ぼくは今度出版する夢の本の序文を三島さんにお願いしようと思い、目の前の三島さんにこのことを話しかけようとした。が、三島さんがすでにこの世の人ではないことにふと気づき、非常に

残念だなあと思った。

八月二一日——三宝院・高野山

加山雄三と磁場

ソ連の海岸か。波打際から三メートルの浅い砂地の海の中にぼくは立っている。その砂地に白線が引かれている。白線の左側には加山雄三氏がぼくと並ぶようにして立っている。ぼくと彼は波打際まで何歩で行けるかという実験をしている。波打際までの三メートルをぼくは七歩、彼は五歩だった。もう一度やってみたがやはり同じだった。同じ距離がどうして二人でこんなに違うのだろう？　今度は二人が白線を挟んで入れ替わった。すると今度は五歩で行けた。まるで体が宙に浮いたように軽々と歩けるのには驚いた。どうもこの位置は重力が弱いようだ。また水の中の足がかなり大きく見えるので計ってみた。一七センチあった。今度は白線の右側で計ってみた。一五センチだった。白線を境に左側は磁場が変化しているのだった。このことはいずれ来るだろうと思われる地球の異変に何か非常に大きな関係があるように思われた。

六月二三日——[illegible]

ポスターと霊力

実家の風呂場が改造され、とてつもない大きな部屋になった。壁にはいろんなポスターや写真がペタペタと貼られている。ぼくと父は隣の部屋にいる。ポスターの貼られている部屋にはどこからともなく淡い光が差し込んでおり、部屋全体が茶色っぽく輝いている。だがぼくがいる部屋までは光が届かず、部屋は薄暗い（コゲ茶色）。隣の奇妙な茶色の部屋を眺めていると、まるで異次元に誘われそうな催眠的な魔力に引き込まれていった。一体誰が何のためにこんな部屋を作ったのだろう。

と、その時壁のポスターが一枚音もなく剝がされたかと思うと、茶色の部屋を横切って隣のぼくの部屋に向って、スーッと宙を切るように、飛んできた。その飛び方にはポスターの意志が働いているようだ。一種の超常現象であろう。茶色の部屋には何か特殊な宇宙的な霊力が働いているのか。それともぼくの想念がポスターに影響を与え、このような超常現象を現わしたのか。どうやら後者のような気がする。

二枚目のポスターが飛んできたのは一枚目がぼくの部屋に消えた直後だった。

八月二四日——自宅

母と九本指の手袋

実家の前の道路に立っていると向うから今は亡き母(養母)と実母が並んでひょこひょこやって来た。実母はどうしたことか今にも姿が消えんばかりに希薄な印象で、全体が黒くぼやっとしている。

ぼくの前に現われた時は母一人で、実母は途中で消えてしまったのかすでにいなかった。ぼくは母と随分久しく逢っていないような気がした。母は何を思ったのかぼくに左手を突き出した。その手には濃い緑色の手袋がはめられていた。握手の積りだと思いぼくは母の差し出した手を握った。

ところが母は握手が目的ではなかった。母の拡げた手袋の掌には五本の指の他に四本の指が人指し指の根元のあたりについていた。指が九本のための手袋だ。この時ぼくの胸に不吉な予感が走った。〈誰か親戚の者が死ぬ!〉ぼくの頭に浮かんだイメージでは実父だった。母にぼくは心の中で、そうか? と尋ねたら、彼女は首を縦に振った。

母はぼくの前から立ち去ろうとして再び歩き出した。ぼくはこの時初めて母の顔を見た。母の日焼けした顔にはとてつもなく大きいサングラスの痕がはっきりと白く残っていた。着ているものといえば何んとも派手な感じの洋服である。元来が地味な母だけにこの奇抜な洋装姿には、さすがのぼくも恥ずかしくなった。

母はぼくに一言も口をきかなかったが久し振りで東京から西脇に帰って来た風であった。

八月二九日——静岡県[illegible]主婦

UFOと宇宙人の上司

家族から離れてぼくは高台に独りで立っている。蒸し暑い夜だ。遠くで人々の異様な叫び声が聞こえる。「何事だろう？」と思って声のする方に走っていった。その時突然建物の陰からオレンジ色に輝いたUFOが飛び出した。ソンブレロ型のUFOである。ぼくに気づいたUFOは高度を下げてどんどん近づいてきた。この時もう一基どこかにいるという印象が脳裏を走った。「その一基は騒いでいる人々の頭上にいるに違いない」

UFOの出現を家族に知らせようと思ってそちらに駆けていった。UFOもすかさずぼくを追って頭上に覆い被さってきた。家族のいる場所にたどり着いた時、UFOもそこに着陸した。ソンブレロ型のUFOはいつの間にかゴンドラのような型に変っていた。ゴンドラ型のUFOから色のやや浅黒いアラブ人のような顔つきの、年齢三〇歳位の小柄の宇宙人が降りてきて、長男をUFOに乗せたいとぼくに告げた。長男は一人で乗るのが怖いからみんな一緒に乗って欲しいといいだした。だが妻がどうしても拒否して乗りたがらない。結局長男とぼくが、UFOに同乗することになった。だがここからUFOに乗るわけにはいかないらしい。この宇宙人の上司が帝国ホテルで待っているために必ずそこへ行き、上司の了解を取らなければならないといった。

さらに面倒なことに帝国ホテルに入るために長男の姿を消す必要があるというのだ。長男は宇宙人が持っていた小さな細長い箱の中に身体を縮小されて入れられてしまった。箱の中には光線銃が一挺入っていた。帝国ホテルに向う途中ぼくは箱の中の長男が心配になったので宇宙人に頼んで箱の蓋を開いてもらった。長男は箱の中で小さくなっていたが意外に元気だったので安心した。

ぼくは宇宙人に訊きたいことが山ほどあったので手始めに一つ質問してみた。

「地球人をUFOに乗せる時、宙に人を浮かしてUFOの底面から機内に吸収するが、あの原動力は何によるのか？」

「今は一切何も話すことはできません！」

厳しい口調で答が返ってきた。彼の任務は長男を上司の所に連れていくことだけが目的のようだ。

帝国ホテルに行くはずが、気がつくと郷里の実家の向いの遠藤さんの家を訪ねていた。遠藤さんの家は四軒続きの長屋の北の端にあった。家の中には沢山の人々が雑談しながら菓子を頬ばったり、ゲームに興じていたが、われわれ家族と宇宙人が来たことに彼等はほとんど無関心の様子だった。というのも彼等もわれわれの家族同様、すでに宇宙人によってここへ案内された連中ばかりだったのだ。やがて家の奥から恰幅のいい初老の紳士が現われた。一目見てこの紳士が宇宙人の上司であることがわかった。

「あちらの方に準備ができておりますので、さあどうぞ」

宇宙人の案内でわれわれ地球人は十数メートル離れた所にある藤原製材所の二階に移動することになった。製材所の入口には沢山の警官が列を作り、警備に当っていた。宇宙人はすでに警察の

協力を得ていた。宇宙人と国家権力との間でここまで事態が進展していたことにぼくは先ず驚いた。製材所の二階は大広間になっており、すでに大勢の人々が集まっていた。顔見知りのデザイナーばかりだ。亀倉雄策さん、田中一光さん、永井一正さん、和田誠君もいる。

横尾君がどうのこうの……とぼくの作品と宇宙人との関係について話しているのは亀倉さんだ。ぼくは亀倉さんに知られないようにそっと最後列に座った。和田君がぼくに気づき「やあ！」と声を掛けた。宇宙人に案内されて集まった人達ばかりである。宇宙人がここまで地球人と接触して活動しているとは思いもよらなかった。前方の壁には大きなシネマスコープ用のスクリーンが用意されていた。地球と宇宙の関係を描いた宇宙人制作の映画が上映されるらしい。ぼくは人類の運命がいよいよ最終段階に来ていることをこのような宇宙人の活動を通して予感せざるを得なかった。こんなことを夢想している時、隣の和田君が、

「こんな映画を観せて、きっと後で会に入れとか何んとかいって金を取るのかも知れんよ」

と言った。

九月一日――午前六時＝高輪プリンスホテル三六六号室

夢の挿絵とサンドウィッチ

ぼくは以前見た夢（西脇高校のグラウンドの上空で十字架と仏陀が合体した夢）の挿絵（夢日記のための）を描くために、夢の現場である母校西脇高校のグラウンドにカメラ持参でやって来た。

数枚シャッターを切った時、ぼくの脇に和田誠君と灰塚印刷の専務がいるのに気づいた。また姿こそ見えないが和田君と義父である平野威馬雄さんもいるような気もした。
和田君か専務のどちらかがぼくに質問した。
「いったいここでどんな夢を見たの？」
ぼくは見た夢の情景を手の中のガラス（なぜ手の中にガラスがあるのか？）の上に指で描いて説明した。
専務と平野さんと別れて（多分）ぼくは和田君と二人でグラウンド全体がもっとよく見えるやや高台にある建物の中に入った。この建物は大きな都会の駅のようだ。沢山の人々が往来している。ぼくは建物の中からグラウンドを撮っているのだが、時々大きな柱が邪魔になって、全景が画面の中に入らない。その時目の前にハッとするような美人が現われた。ぼくは急いでこの美人を画面の中に入れ込んで一枚撮った。美人は写真を撮られたことに気づいたが、そのまま駅の人混みの中に消えていった。
和田君が急に、腹がへった！　といい駅の構内の隅にある汚い食堂のカウンターに腰を下して勝手にサンドウィッチを注文して食べ始めた。小さなパンの腹にナイフを上手に入れて、中にまずそうな野菜やハムやチーズをはさんで黙々と食った。和田君が「横尾ちゃん、食べる？」と聞いたが、「あまりうまそうじゃないから食わないよ」といった。

九月二日――高輪プリンスホテル三六六号室

水上スキーと魚の舌

海の近くのヨットハーバー。建物の一部が海の中に突き出している。とてつもない大きさ。体育館ぐらいだ。海水は建物の半分近くまで引き込まれている。

ぼくはこの建物の中にある波打際に立って水上スキーを試みようとしている。亀倉(雄策)先生が運転するモーター・ボートに引かれるところだ。間もなくボートが走りだした。ぼくの手に急に強い力が加わってぼくをぐいと前方に押しやった。危うく前に身体がのめり込むところだった。思い切って身体を伸ばし、胸を張り腰に重心を落とすようにした。すると姿勢は物の見事にしゃんとして、スキーは波を叩きながら水面を走り出した。多少の不安定さは残ったが初めての水上スキーにしては我ながら上出来だった。

今年の夏スペインのイビサ島で水上スキーをしていた女性の不様な格好がぼくの脳裏をよぎった。〈なぜこんな簡単なものが彼女にうまくできないのだろう〉。建物が大きいため、まるで室内競技場で水上スキーをしているような錯覚にとらわれた。もうすぐで建物の外に出るだろうと思われた時、亀倉先生のモーターボートとぼくを繋ぐロープがはずれてしまった。

足元の海の水は青黒かった。水面ぎりぎりまで海藻が茂っているせいでもあろう。気がつくといつの間にかぼくの手に釣竿が握られていた。そして釣糸の先きには一匹の赤い大きなおこぜに似た魚がひっかかっていた。魚の口深く釣針が食込み、濡れた悲しげな眼がぼくを下から見つめて

いた。ぼくはスキーを穿いたまま海面を上手に蹴って建物の中の岸辺に上った。
岸に上ったぼくは何んとかして魚の口から釣針を外してやろうと試みたが容易に取れるものではなかった。釣糸を引っぱる度に魚は目を丸くして苦しそうに身を捩じらせた。誰かに手伝って貰おうとしたが辺りには人の気配がない。ぼくは思い切って糸を強く引っぱった。無気味な音がして釣針は取れたが、釣針の先きには珊瑚の色をしたピンクの肉片がぶら下っていた。舌の一部である。可哀想なことをしたと思ったが、これしきのことで死ぬことはあるまい。
海の中に放してやった魚は、浅瀬でしばらく傷の痛みを癒しているのか、じっと身動き一つしなかった。きっと苦痛をこらえているのだろう。

九月六日——山田別荘・百合の間（別府・大分）
水たまりとタイ焼

川に平行して広い道が走っていた。道の中央に大きな水溜りがあった。水溜りには沢山の魚が泳いでいた。ぼくは思わず手にしていた網で魚を、すくい上げた。網の中で沢山の魚が白い腹を見せてキラキラ光っていた。
「二百匹ぐらい捕れた！」
振り返って後ろにいた友人に自慢げに叫んだ。
だが、目的もなく魚を捕るのは可哀想だから再び水溜りの中に返してやることにした。すでに網

の中で弱っていたのや、鱗が落ちたのもいて、全体に元気がなかった。どこかの女の子が後ろで、「まだこんな所に一匹落ちているわよ」、といって道端の草むらの中を指差した。そこには泥まみれになった一匹の平ったい形をした茶色の魚が白い腹を上にして口をパクパクやっていた。手で拾い上げ、水たまりに逃がしてやろうとした時、急に魚の白い腹が縦に裂け、中から小豆のあんこが食み出した。驚いたぼくは、頭を魚に近づけてよく見た。〈タイ焼ではないか!〉そこにはタイ焼の魚が生きていた。

九月九日――国民宿舎「コスモス荘」二一〇号室（長者原・大分）
剝製の海亀と全裸の女性

電気がついて場内が急に明るくなった。映画か芝居が終わったのだろう。今日はこの劇場のオープニングで、コクトー風の古典的前衛作品が上映、あるいは上演された模様。内容に関しては全く記憶にない。
観客はぞろぞろと出口に向った。劇場の床は低い階段によって傾斜を作っていた。先ず人目を引いたのは通路の所々にペンキで白く塗りたくられた大きな剝製の海亀が何匹か鎖に繫がれていた。床も同様白いペンキで塗装されていた。
出口近くで聞きなれた声が背後でした。亀倉（雄策）先生が若いデザイナー（石黒紀夫君がいた）数人と語りながら出てくる所だった。劇場の外には高校時代の同級生の高瀬洋君がいるのに

気づいた。彼と肩を並べて歩き出した。銀座、三原橋の裏通りだが、現実の風景とは少し異なっている。また以前この近くにぼくが勤めていた会社（日本デザインセンター）が見えたが、えらい粗末な感じの黒い建物に変っていた。建物の玄関の横に芥箱がある。覗くと二、三通の外国封筒が捨ててあった。もしや会社気付のぼく宛のものではないかと思ってその内の一通を拾いあげてみたが、他人宛のものだった。

再び高瀬君と歩き出した。

「横尾君、今日の芝居のこと三島由紀夫に教えてあげなよ」

「うん」

「絶対あれは三島好みだよ。第一、二〇円という料金が三島的だよ。何んでも新しく、珍しい物は他人より先きに知りたがる人だろう？」

「その通りだ、明日早速三島さんに電話してみるよ」

辺りが暗くなって急に大粒の雨が降りだした。雨は滝のようになって地面をあっという間に川のようにしてしまった。家の屋根に落ちた雨が真白な水飛沫をあげている。豪雨。

高瀬君と家の方向が違うぼくは彼と別れて雨の中を西銀座の方に走った。銀座は、まるで昭和初期の時代に溯ったようにぼくの目には写った。事実、銀座は当時の様相を呈していたのである。店という店は戸閉まりがされており、その上街は停電で辺りは夜のように暗い。心細くなったぼくは、日比谷方面からやってくる空車（「空車」の赤い標示板が印象的）のタクシーを止めようとしたが、車は通り過ぎていった。

もし本屋が開いておれば、そこで雨宿りをしようと思い、あちこち捜し廻ったが一軒も本屋はなかった。ぼくは手にカラーフルな大阪（頁数はそんなにない）の洋書を持っていたので、たとえ本屋が開いていても、店内には入れないように思った。万引と間違えられると困るからだ。ぼくが日劇ミュージックホールの入口の所まで来た時雨は完全に止んでいた。だが身体は水中から出てきたようにずぶ濡れ。地下鉄で帰ろうとしたが、運よくタクシーが日比谷方面からやって来てぼくの前で停まった。だが空車ではなかった。二人の全裸の女性が乗っていた。二人共日本人ばなれした豊満な肉体をしていた。大きな二つの肉体はせまい後部座席でぶつかり、からみ合っていた。彼女達の濃いメーキャップから踊り子であることがわかった。舞台が終った直後か、二人共全身から玉のような汗がしたたっている。渇色の肌は汗で雨後のアスファルトのようにキラキラと光り輝いていた。二人の熱気は車の外までむんむん伝わってくる。せり上った腹部から覗く黒いヘアーまでが汗で濡れ、渇色の下腹部にべっとりとまつわりついていた。手前の女のヘアーは奥の女のそれより密集しておりおそらく下着をつけても横からはみ出して見えるほど立派な代物だ。

ぼくの脳裏に彼女達が裸でからみ合いながらレズのシーンを演ずる光景が鮮やかに描き出された。そして見る見るぼくの下半身は火のように熱くなっていった。下腹部の肉塊が鉄のように硬直し始めるまでそう時間はかからなかった。

九月二三日——午前四時三〇分＝高輪プリンスホテル三六六号室

痙攣と激

突然身体全体が痺れだした。一瞬何か変なものを食べたかな、と思った。痺れが痙攣に変った。いい知れぬ不安と恐怖。死ぬと思った。横にいた妻の名を呼んだ。次第に意識が薄れていく。死にたくないと思った。必死で薄れゆく意識にとりすがった。目を大きく見開いた。その途端目を開いた状態で夢から覚めた。

九月二四日——高輪プリンスホテル三六六号室

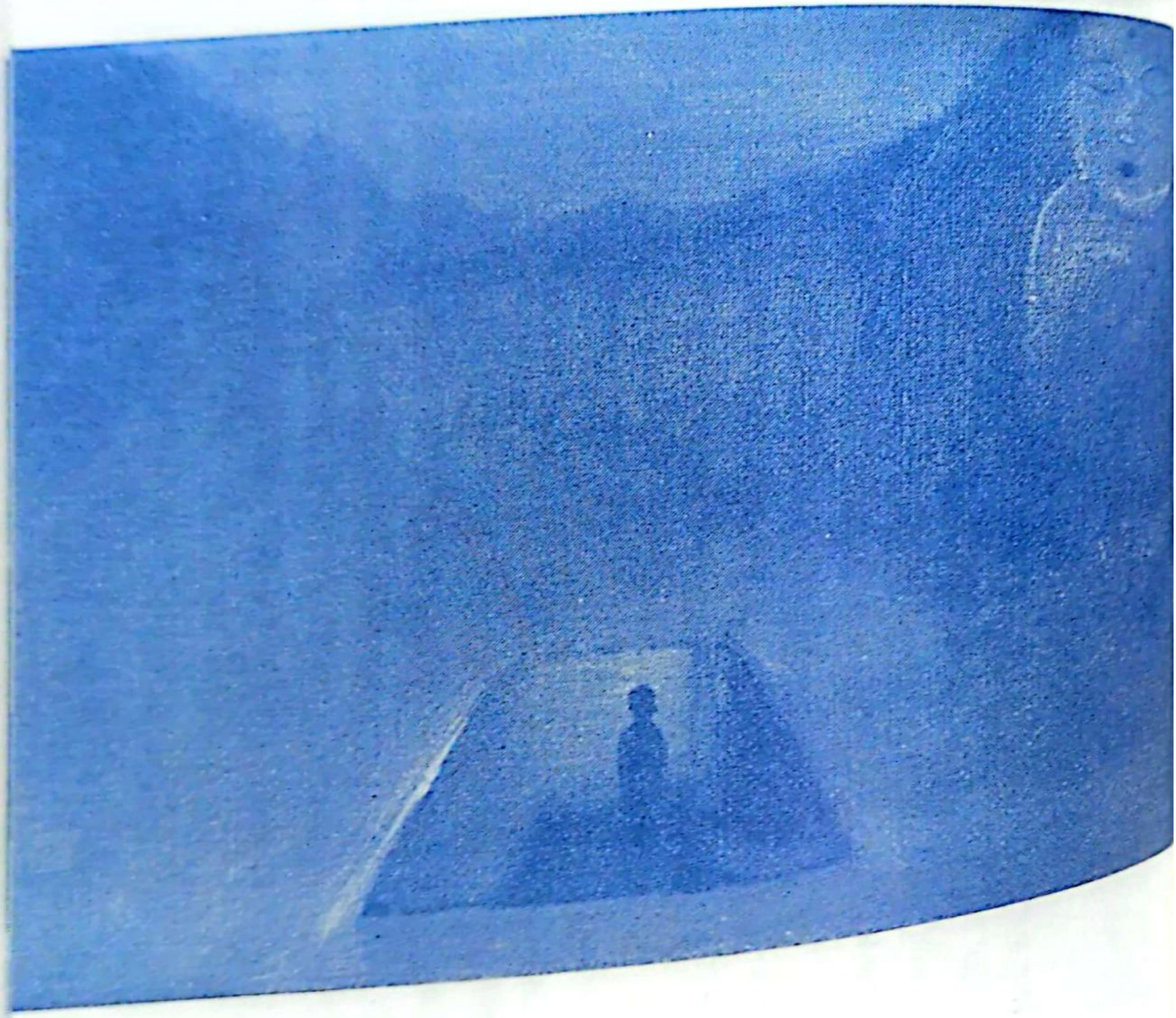
黒い穴と大日如来

山の中である。湿った地面の一角に今しがた掘られたと思われる二メートル×四メートルぐらいの長方形の黒い穴がポッカリと口を開けている。ぼくは穴の中に飛び込んだ。穴の深さはぼくの身長位だった。湿気を帯びた土の臭いが四方からぼくを包んだ。穴の底には荒削りの鍬のあとが残っており、所々に地下水が溢れた形跡がある。辺りは夜のように暗い。ぼくは穴の中からふと頭上を見上げた。暗い夜（？）の空に向って切り立った巨大な岩壁が左手にあるのが目に入った。岩壁の上部が何かの光を受けて鈍い青銅色に光っていた。どうやらその部分は石像の顔であることが夜目にも薄々わかった。

〈大日如来像だ!〉
闇に目が慣れるに従って確信が持ててきた。摩崖仏の大日如来像である。するとここは熊野の杵木の山中か?
大日如来との遭遇を喜んだものの、大日如来が何んだか青黒く見えるのがぼくにはどうも気に入らなかった。ぼくが期待したのは光り輝く大日如来だった。穴から這い出したぼくは闇の山中をあてどもなく歩き出した。心の中で大日如来が輝いてぼくを一刻も早く闇から解放させてくれますように、と願いながら。

九月二六日――自宅
ブリキ屋とUFO

ぼくの後ろで誰かが、円盤だ! と叫んだ。そこは西脇の旭町通りのはずれ、内橋理髪店の隣のブリキ屋の前。思わず見上げた空は青黒い。そこに一瞬光るものを見たが、UFOかどうか? 次に現われた時は光体はジグザグ運動を示した。すぐ消えたが間違いなくUFO現象だ。三度目に現われた時はもっと大きな光体になっていた。南から北へ不思議な模様を描きながら飛んだ。象形文字のようでもあった。ぼくは図形を頭の中に記憶しようと努めた。だが次々と別の図形が現われるのでとても憶えられない。
ぼくの横にいた人にUFOを教えた。彼は、どこ? どこ? というだけでUFOが見えないふ



1976年9月24日——黒い穴と大日如来

CamScannerでスキャン

うだ。何んて不思議なことだ。

一〇月一八日——午前一二時＝総持寺・旦過寮二号室
ちぎれたペニスと肖像画

仕事場。突然ぼくのペニスがちぎれてしまった。驚いたがどうすればいいかわからない。〈セックスのし過ぎか？　いやそんなことはない。それともたまにしたセックスのせいか？〉

床の板間にちぎれたペニスが落ちている。ぼくの他にカメラマンの倉橋正君ともう一人誰か（ぼくのアシスタントの山本法香か）いる。倉橋君も心配してくれているが、なすすべがなく困った表情。やがて妻と子供達がやってきた。

「一体これは何んてことよ!?」

床の上のペニスを見て驚いた声をあげた。妻の表情は怒っているようにも、悲しんでいるようにも見えた。英は「どうしたの？」と聞いた。「オチンチンが取れたんだよ！」というと「ヘエー！取れたの?!」といって驚いた。美々は恥ずかしいのか全く関係のないような顔をしている。妻は加悦医院に行くべきだといったが、ぼくはそれは困るといった。というのも加悦先生に頼まれている肖像画がまだ描けていないからだ。妻はそんなことといっておれないでしょう！　というような顔をしている。それにしても困ったものだ。ぼくは床のペニスを拾い上げ、セロテープで元の場所に固定した。だが思うようにくっついてくれない。次第にたとえようもない恐怖が襲ってき

た。

一〇月二六日——午後

UFOの搭乗と夢

実家の近く。昼。曹家。UFOが来るような予感。すでに来ているか？ どこかに降りたようだ。

ぼくを連れに来たのだろうか？ 期待と不安。

大きな建物の中にいる自分。目の前にUFOが

すでにUFOの中の自分。UFOの内部は直径五、六メートル。中央に斜柱。天に巨塔の赤い線体。ぼくの他にUFOのコンタクティーの紹介者。UFOの研究家の紹介者も同乗。なぜぼくが選ばれたのだ？ きっと二人のコンタクティーに便乗しているのかも。

三人は窓に寄り添ったままUFOが離陸するのを待っている。一瞬UFOがゆらっと傾いたかと思うとすでに上昇していた。飛行感覚ゼロ。

どのくらい経ったのかUFOは元の場所に着陸。機外に出た。そこには宇宙人がいた。日本人そっくりの容貌。背広着用。

Q——いつからここに？

A——以前から日本に来ている

Q——あなたの他には？

A―日本には一五人の宇宙人がいる

Q―外国にも？

A―アメリカには三〇人（数字が少し聞き取りにくかった）

Q―どこから？

A―宇宙連合のグループからではなく、自分たちだけで別個に行動している

Q―目的は？

A―……（テレパシックな印象では、人類の進化のための援助のようだ）

他にも多くの重要な質問をしたが、その解答は不思議なことに何一つ記憶していない。ぼくは両親にUFOに乗ったことを話すべきかどうかについて少々迷ったが思い切っていった。両親は信じてくれた。だがぼくは両親を必要以上に驚かさないために次のようにいった。

「夢かも知れないがUFOに乗ったよ」と。

一〇月二九日――文京区本郷東大教室二〇七号室

加持祈禱とモスラ

教室の中は学生と一般の人々であふれんばかりに混み合っていた。教壇には数人の密教の僧侶が並んで加持祈禱を行なっている最中である。人の息と線香の煙で教室内の空気は濁っていて重い。そのせいか教室一杯に拡がる読経の声が息苦しく喘いでいるように聞こえる。

[illegible]

CamScannerでスキャン

やがて加持祈祷が終り、一人の僧侶が教室の全員にエッセイを書くよう命令した。そして書き終った者から順番に自作を朗読しなければならない。ぼくの隣の席の和田誠君はいち早く書き上げてしまった。

「本当にもう書いてしまったの？　ところで何を書いたの？」

「『あなたへのぼくへ』と題する自分が見た夢の話さ」

「エッ!?」ぼくは思わず絶句した。

夢はぼくのテーマではないか。ぼくはまるで彼に自分のテーマを横取りされたような気持になり、くやしさが込み上げてきた。

「ところで何字？」腹立たしい気持を押さえて冷静に尋ねた。

「六百字ぐらいだよ」

和田君はぼくに原稿用紙の代りに小さなメモ用紙をくれた。

再び加持祈祷が始まり、一斉に読経の声が教室に響き渡った。

腹の底から突き上げてくるような読経はぼくを完全に密教の曼荼羅的世界にトリップさせるに充分な魔力を持っていた。〈禅もいいが、密教もいいぞ〉というぼくの内なる声が聞こえてきた。

読経を耳にしながら、ぼくはエッセイのテーマを捜すのに必死だった。目を教室からふと外に向けた時、隣の校舎の屋根の上に何やら黒い塊りのようなものが浮いているのが視界の端に感じられた。ぼくは首をひねるようにしてその物体に視線を向けた。

そこには黒煙を吹き上げながらこちらに向ってくる巨大な機関車の腹が映った。ぼくは一瞬息が

止まるような恐怖を覚えた。機関車というより巨大な黒い怪物が頭上から迫ってくるといった方が当たっている。（もしやこの機関車はＵＦＯと関係があるかも知れない）という考えが頭を掠めた。空に浮かぶ機関車は何か不吉なことが起こる前兆のように思えた。

やがて教室の人々もこの空からの突然の機関車の出現に気づき、全員がパニック的な恐怖に襲われ始めた。あわてて廊下に逃げ出す者、目を見開いたまま硬直してその場に突っ立ったままの者、悲鳴をあげている者、いずれも全員の顔からは血の気が引いてしまっている。

机や椅子が廊下に飛び出す人の流れに押し流され部屋の一角に集まっている。ぼくも人の後を追って廊下に飛び出した。各教室から飛び出したと思われる人々で廊下はごったがえしていた。まるで逃げ場を失っているかのようだ。その時、機関車が現われた校舎と反対側の校舎の屋根が微かに動き始めた。（何かが起こる）という不安と恐怖がぼくを襲った。見る間に屋根は大きく波打ち、校舎全体が揺れ始めた。突然屋根の向う側から得体の知れない巨大なオレンジ色の丸い形をした怪獣が現われた。芋虫のようでもあるが、かつて映画で観た怪獣モスラのようでもあった。怪獣によって校舎の屋根はたちまち破壊され、一斉に立ち昇った煙と火が怪獣を包んだ。この間にぼくは人混みを分けて廊下を出口の方に向って走った。ぼくの後から誰かが追って来る気配を感じたが、後ろを振り向く勇気がなかった。追手の距離は次第に縮まっているのが背に伝わってくる、見えない手が今にも首筋を摑まえそうだ。〈つかまった！〉と思った瞬間、ぼくの目の前に笑顔を浮べた双児の少女が手に大きな花束を持って立ちはだかった。〈助かった！〉と思うと同時に、こんな所でぐずぐずしていたら今に教室が怪獣によって壊されるのではないかと恐れた。

モスラと双児の少女——。この少女達がザ・ピーナッツであることは映画『モスラ』が証明している。少女がぼくに差し出した花束は菊の花だった。そして、

「あなたは『ジョーズ』を作った人ですね？」とぼくに尋ねた。

自分がこの映画の監督・スピルバーグでないことは知っていたが、この場合彼女達に逆らわない方が安全だと思ったので「ハイ！」と応えた。

花束に結ばれた大きな白いリボンの先きに毛筆で、

『智利美奈子』と聞き覚えのない女の名前が書かれていた。

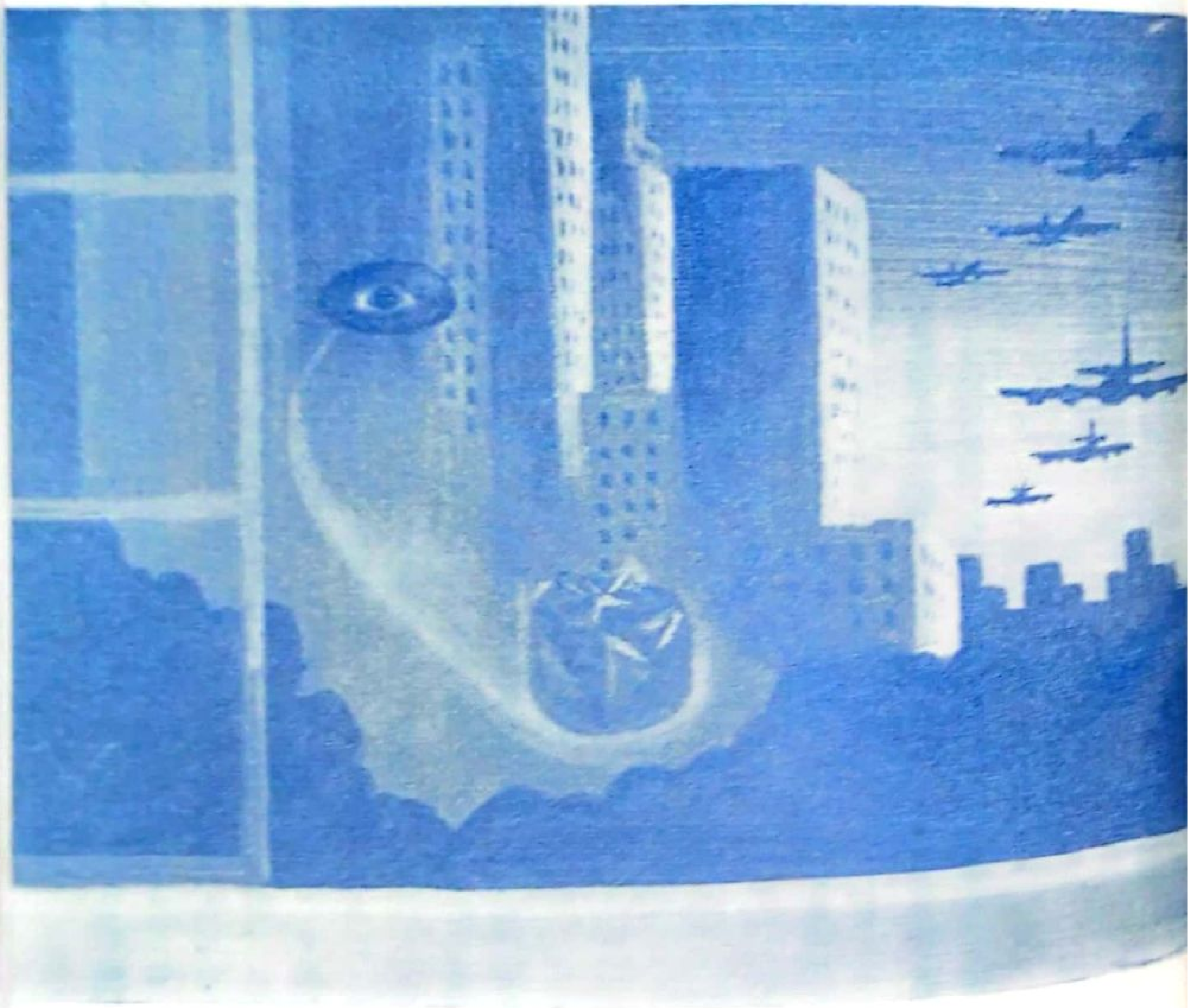
われわれの周辺を人々は右往左往しながら逃げまどっていた。

一一月一日——文芸春秋軽井沢寮二〇七号室

火球？と湧水

実家の玄関先きに立ってぼくは夜空を眺めている。空気が澄んでいるせいか夜空の闇が無限に深い。そこにばら撒かれた無数の星、星、星、星。

星空を眺めているとどこからともなくUFOが飛んでくるのではないかという予感がしてきた。一つ念でも送ってみようと思った時、南の空に東西に走る一条の白い線を目撃した。流星だろう。流星がきっかけでぼくの気分は高揚してきた。ぼくは思わず家の前の道路に出た。その時右手の方角に何やら光るものを感じた。ぼくのところから二〇メートルも離れていないところの中空か



1976年11月2日——ビルディングと[illegible]

CamScannerでスキャン

ら野球ボール大の火球？ が落下してくるところだった。オレンジ色に輝いた光体はかなりのスピードで、あっという間に道路中央の地面の中にすっぽりと消えてしまった。その後には五〇センチ四方土がえぐれたように掘りおこされていた。火球はどこにも見当らなかった。それに代って地面の穴からまるで血官が破けたように勢いよく水が湧き出した。

再び家の前まで引き上げたものの、まだまだ何か変ったことが起こりそうな気がしたので空から目を離さなかった。すると、今度は北の空の高い一角から物凄いスピードで斜め（四五度の角度）に落下してくる光体を発見した。まるで黒いカーテンに亀裂が入って二つに裂けるような鮮烈な光だった。光体は地面すれすれ、あわや激突と思った瞬間、右に直角に折れ、今度は地面と平行に飛んでいった。光体は家の陰に隠れたためにどこへ消えたかは知らない。こんな芸当をできるのはきっとＵＦＯに違いないのだ。

一一月二日——文芸春秋軽井沢寮二〇七号室

ビルディングと仏様の御加護

自分の家のような落ちつきと安心感があるが、間取りが違っているのでもしかしたら他人の家かも知れない。

ぼくはこの家の庭に面した古ぼけた小さな部屋の窓際に寄り添って外を見ている。外は夜である。空には沢山の星が点在しているが街の灯りが空に反射してせっかくの星空がだいなしだ。広い庭

には背の高い大きな樹や茂みが沢山植わっており、ちょっとした森の趣きを呈しているように夜目には思えた。庭の向うには摩天楼のような高いビルディングがいくつも怪物のように黒々と、半ば夜空に溶け込んで林立していた。この光景はちょうど深夜のニューヨークのセントラルーパークからマンハッタンのビルディングを望んだ時と酷似している。
ビルディングの林の右手にやや空間があり、そこから濃いオレンジ色の空が覗いていた。上に行くにしたがってオレンジ色は紫に変化し、やがて黒一色の星空に吸い込まれていた。まるで夜空の一か所が赤く燃えているようだ。戦時中の空襲を思わず想い起こしそうな不気味な空である。オレンジ色の空はガラス張りのビルの側面を炎が這っているように照している。
その時、突然巨大な飛行機が三機、オレンジ色の空間に出現した。飛行機はオレンジ色の源に向ってゆっくりと飛んで行った。と同時にまた別の巨大な飛行機三機がさらに上空に現われたと思うとこちらに向って飛んできた。向うに行く飛行機とこちらに来る計六機の飛行機が、ぼくを増増不安にさせた。一種の終末のような予感がぼくを襲い始めた。
ふと誰かがぼくを見つめているような予感がして、林立するビルの辺りに目をやった。黒いビルの中ほどに何か物体が浮いているように思えた。〈何んだろう?〉と思って物体に目を凝らした。それはフットボールのような型をしたＵＦＯだった。ＵＦＯには違いなかったが巨大な目がぼくを見下しているとしか考えられなかった。ぼくは完全にＵＦＯに釘づけされた。
ぼくがＵＦＯに気づいたことを相手も気づいたのか、ＵＦＯは次第にぼくの方に近づいてくるような動きを見せた。しかしＵＦＯが黒いため辺りの闇に同化してその姿は見失ってしまった。だ

が、強烈な意志がぼくに接近して来るということだけは感じられた。ぼくは完全にこの見えない意志の支配下に置かれているように思えた。

やがて闇の中に薄ぼんやりとした小さな物体が姿を現わした。それはさっきのUFOではなく、紫色の四角い風呂敷包みみたいだった。風呂敷包みはまるでリモートコントロールか或いは何かの意志によって操作されているみたいだった。包みは多少ゆらゆらと揺れながらゆっくりとぼくの方に近づいてきた。少し揺れていることがかえって現実感を伴った。しかし、現実にはあり得ないようなことが起こっているのだ。〈奇跡！〉を目の前にしてぼくの魂は神聖なものに触れた時のように高揚している。神からの授かり物でも受け取るように、ぼくは手を差しのべて包みを手にした。ずっしりとした重みが体の中に拡がった。

家の奥にいるはずの家族にこの授かり物を披露しようと思ってぼくは高鳴る胸を押さえながら窓際から離れた。家の中には子供の姿だけで妻が見つからなかった。やがてトイレにでも入っていたのだろう、妻が現われた。今あった出来事を妻や子供達に話そうとするのだが、興奮しているせいか、順序を追って話すことができない。それでもやっと何とか伝えることができたが、彼等の表情には疑心暗鬼の色が浮かんでいた。だがぼくの真剣な表情に少しずつ彼等の表情からも疑いの色が消えていった。

家族四人が風呂敷包みを囲んだ。包みの中からは漆黒の重箱が表われた。蓋を取るとそこには盛り沢山の色とりどりの料理がぎっしりつまっていた。もう一方にはつくだ煮のような黒い料理がこれまたぎっしりつまっていた。ぼくはこの料理が未知の神秘的な存在者から贈られたことで非

常に感動している。
「きっと仏様が下さったのかも知れないわ」
と妻がいった。
「そうだ！　きっと仏様の贈物に違いない！」
ぼくは叫びながらさっきの窓の所に走っていった。
「仏様、神様、どうもありがとうございました」
何度も同じ言葉を繰り返しながらＵＦＯがあった場所に手を合わしてお礼をいった。仏様の御加護を受けているという実感が体の隅々まで水が染みるように拡がっていった。
もとの部屋に戻った時、二、三人の女性が現われた。高校時代のクラスメイトのようでもあるし、最近知りあった女性のようでもある。早速ぼくは彼女達に今の出来事を出来るだけ詳しく話した。信じてもらえるかどうかということが不安だった。彼女達がどのように受け止めたかは定かではなかった。

一一月八日――自宅
三島由紀夫と喫茶店
見なれぬ町。夕刻。灰色の風景。三島由紀夫、楯の会員二人、ぼく。死んだはずの三島さんが目の前にいるのが何んとも奇異。死後の世界から再び帰ってきたのだろうとぼくは思う。それにし

てもこんな通りに三島さんがいるのはまずい。みんなに知れると大変なことになる。
三島さんは何やら句を読んでいる。死んだことを後悔した句のよう。三島さんと二人の若者は明るい商店街に向った。三人共楯の会の制服だから目立つ。他人に気づかれなければいいがと思ったが、本人はむしろ気づかせることを期待している様子。
三島さんは明日再び死ぬことを決心しているようだ。そのことが知れると逮捕される可能性が充分ある。ぼくの心配をよそに三島さんは派手な言動で一軒の小さな喫茶店に入っていった。数人の人が三島さんの存在に気づいた。どこからともなく現われた三島夫人は「みんなに知れたらどうするんだろう。本当に困った人だわ」といった。ぼくが心配するほど三島夫人は心配していないのにはちょっと驚いた。

一一月一〇日――自宅
長屋と死んだ母

西脇の家の近所に母方の親戚で稲垣さんという人がいる。稲垣さんの家は数軒からなる長屋の一つだ。何の用があって訪ねていくのかわからぬまま、ぼくは稲垣さんの家を捜している。よく似た家が沢山並んでいてどの家が稲垣家かわからない。これと思われる家の戸を開けて中を覗いた。暗闇同然、何も見えない。声を掛けた。「こんばんは」。闇の中に人影が動いた。近寄った人影は死んだ母だ。懐しい感情が一気に込みあげてきた。ぼくに気づいた母は笑っている。死んだ母が

なぜここにいるのだろう？（亡霊かもしれない）。そうだとすれば間もなく消えるはずだ。もう一度死んだ母を見つめた。

一一月一三日——成城

神様と骸骨面

古い建物の中にあるアトリエにぼくと妻と、デザイナーの木村恒久さんがいる。どうやら学校の図工室のようだ。部屋の中央に机があり、その上に木村さんが造ったと思われる建築の模型が置いてある。ぼくと木村さんは模型を囲んで椅子に腰を下している。

建築といってもまるで紙芝居の枠を型取ったような非常にお粗末な品物である。大きさは一メートル四方で、全体が茶色で彩色されている。木村さんはこの作品をデザイン学会に発表するという。彼の研究テーマは国民所得のアンバランスの是正とその告発で、要するに資本家と労働者の経済の不均衡を問題にしたいと語った。

この問題と彼の作品がどこでどのように結びついているのかちっとも理解できなかったが、このことがかえって木村さんらしいと思えた。

ぼくと木村さんはいつの間にか郷里の家の前にいる。そこへ妻が息せききって現われた。「一体どうしたの？」とぼくは驚いて聞いた。

「また神様を見たの！」

「木村さん、女房はよく神様を見るんですよ……」

木村さんに妻のことを話そうとしたが、それよりたった今見たという妻の話を直接聞いた方がいいと思ったので、彼女に話すようにいった。

「たった今、大阪の心斎橋筋の人混みの中で本当に神様を見たんです！」

ぼくの頭の中に心斎橋筋を往きかう人混みの情景が浮んできた。そしてその人混みの中を向うから歩いてくる光り輝くイエス・キリストのような神様の姿を想像した。想像であったがこの情景はまるで自分が目撃しているように鮮やかに描き出された。

われわれ三人が神様のことを話している時、一人の男がさっと影のようにわれわれの側を過った。この男は黒い帽子に黒いコートを着ていた。一瞬だったがぼくはこの男の顔をはっきりと見た。皮膚は黒く、目は洞窟のように窪み、頬は削がれたようにこけて、歯がいやに前に突き出していた。まるで骸骨面だ。

〈悪魔！〉。そう思った。

明らかにわれわれの様子を伺うために現われたのだ。そしてまだ前の家の垣根の陰に身を潜めているのがぼくにはわかっていた。

一一月一八日——高輪プリンスホテル三六六号室

便器と磁力

便器の前に立ってズボンのファスナーに手をやった時、便器の中でうごめく赤いものが目に映った。と同時に便器の底の穴からいきなり大量の水がいきおいよくせり上ってきた。今にも床のタイルにあふれそうになっている便器にぼくは放尿した。たちまち水がレモン色に変色した。レモン色の中から浮上してきた赤いものは一匹の小さな金魚だった。

放尿はとてつもなく長く感じられた。今にも水が床にこぼれ落ちようとした時、便器はいきなり部屋いっぱいに拡大された。便器はいつの間にか生簀に変っていたが、便器の穴の部分だけはそのままだった。赤い金魚は広くなった生簀の中を悠々と泳いでいる。生簀の底に開いている小さな穴から次々と小魚の群が、浮きあがってきた。みるみる間に生簀の中は小魚の大群でいっぱいになった。彼等はまるでビリヤードのボールが台の上を駆けまわるように敏速に群をなして鋭角的な動きを見せていた。

ぼくは海岸から五〇メートルほど離れた海の中に立って陸を見ている。海も空もまぶしく輝いて、風景全体がハレーションを起こして発光している。気分は非常に爽快だ。右手の海岸線には沢山の人々が群がっているのが白く光って見えた。陸は平坦で、所々に白い建物のようなものが映ったが、もしかすると白い土の山かも知れない。

そんな白一色の風景の中にひときわ目立つ鮮やかな真紅の色が左手後方の海の中で炎のように映えていた。赤毛の馬に跨がった赤い甲冑に身を固めた一人の武将である。海岸の群衆の中の一人の男の合図でこの馬は波を蹴って海岸線と平行に右手の方に駆け出した。馬上の武将は源義経だ。義経は槍を両手で握りしめ一直線にぼくの前方二〇メートルの浅瀬を矢のように駆け抜けていっ

た。武者絵を見ているようだ。義経の行く手には一人の武将が、馬上で義経が攻めてくるのを身がまえて海の中に立っていた。黒い馬、黒い甲冑。一瞬赤と黒の二つの色がぶつかった。黒い馬の武将は義経を刃ではらった——ように見えた。

海岸の白いものはやはり白い土の山だった。その上に沢山の人々が腰を下して海の中の戦を観戦していた。人々の中にぼくはアメリカ人の友人ジョン・ネイスンさんとその夫人を発見した。彼に声を掛けようとしたが逆に向うから話し掛けてきた。

「今の新藤兼人の撮影見ましたか？」

「なーんだ、あれは映画の撮影だったんですか」

ジョンさんはまだ三〇代だというのにまるで八〇歳の老人のような白髪と不気味にたるんだ灰色の皮膚をしていた。

先日彼の家でパーティがあった時、風邪で行けなかったことを詫びた。撮影が終って人々は海岸から引き上げていった。この後ぼくはある仲間の集会に行かなければならなかった。この集会は郷里の八幡神社で行なわれることになっていた。神社の建物は複雑な構造の上、沢山の人々が押し掛けていたので集会の場所がなかなか見当らなかった。人混みに押し流されていつの間にかぼくは外に投げ出されてしまった。

その時、目の前に見覚えのある女性が現われた。黒田征太郎君の奥さんである。

「こんなところで何をしていらっしゃるの？　Kさん夫妻にお逢いになりました？」

見るといつの間にかKさんと一人の女性がぼくの横に立っていた。Kさんの隣の女性がどうやら

最近再婚した夫人のようだ。てれかくしか、Kさんはいつもより険しい表情を浮かべてぼくを睨みつけた。K夫人の年齢は四〇歳前後だろうか。目尻の皺が深く刻まれていたが、それがかえって理知的に見えた。K夫人の顔を見ているうちに、ふとこのことが夢の中の出来事のように思えた。〈ぼくは夢の中でK夫妻に逢っているのだ〉。〈いつか現実にK夫人と逢った時、夢の中の彼女が現実化するかも知れない〉。そう思ったぼくは彼女の顔を明確に記憶するため彼女の表情に意識を集中して頭の中でデッサンを描き始めた。

集会に参加することを半ば諦めたぼくは神社を後に参道を下りた。K夫妻も一緒だ。林に囲まれた参道を下り切った左手に小さな窪地があった。窪地には棚が架けられ、数本の曲りくねった木が頭上いっぱいに枝を張りめぐらしている。棚の下の数脚の床几には四、五人が腰を降して、甘茶を飲んでいた。〈花まつりでもないのに変だなあ?〉と思っていると、一人のお坊さんが「毎月八日にはお釈迦さまの生誕を祝って甘茶を飲んでいただいております」といってぼくに茶碗と箸を与えた。

茶碗の中には二切れのごぼうと二匹のえびが入っていた。ごぼう一切れとえびを一匹食べ、次のえびを食べようとした時、えびが半煮えで、まだ生きているのに気づいた。気持悪くなったぼくはそのまま茶碗を屋台に投げ出し、その場を去った。

道をはさんで窪地の前は広い空地になっていた。数台の車が駐車している。空地に出た時、俄かに空がかき曇り、辺りが夕方のように暗くなった。と思った瞬間、いきなり無数の雹が滝のように降ってきた。全身雹にたたきつけられたぼくはその場に立ちすくんでしまった。同時に強力な

磁力が働き身体が地面に釘づけになった。磁力に抵抗しながらもぼくは車の陰に逃げ込もうとした。ふと神社のある森の上空に目をやると、低くたれ下った真黒な雲は竜巻状に渦巻いていた。かつて体験したことのない恐怖が全身を貫いた。竜巻がそれてくれることを祈った。竜巻はぼくのいる場所とは反対の方向に移動するかに見えた。

場面が変って家が建て込んだ狭い道を誰かが運転するトラックで走っている。K夫妻も一緒だ。路上には明るい陽差しが差していた。

一一月二五日——高輪プリンスホテル三六六号室

新聞の切抜きと地球救助作戦

「こんにちは！」

聞きなれた女性の声がアトリエの玄関でしたかと思うと、その声の主は息せき切って階段を昇ってきた。

「あわてて一体どうしたの？」

「ちょっと聞いて、聞いて！」

暇があればいつも遊びにくる女の子である。(だが、現実には彼女は存在しない)

階段を駆け上るなり彼女は小脇に抱えた大きなスケッチブックをぼくの前に投げだして、中を開いた。そこにはタブロイド版の夕刊から切り取られた記事が貼りつけてあった。

「たった今、ここに来る時駅で買って来た新聞なの」

たった今買った新聞の切抜きがすでにスケッチブックに貼られているのには驚いた。

切抜かれた記事の概略は次のようなものだった。

東京の中野の或る家が、ある夜何の痕跡も残さず、忽然とこの世から蒸発してしまった。ところがこの事件が発生する数日前にこの家の中にどこからともなく野球ボール大の一個の光体が闖入し、部屋から部屋へとまるで生きもののように隈無く観察するようにして飛び廻った。翌日この家の主人からこの話を聞きつけた近所の人々が、再びこの奇怪な現象を期待してこの家に集まったが、この時はついに光体は出現しなかった。そして次の日この家は家族もろとも跡形もなく蒸発した。さらに不思議なことは、蒸発する夜、各地に散らばっているはずの家族が全員この実家に戻って来たということである。

ぼくはこの記事を読んだ時、直観的にこれは宇宙人の仕業で、家の中に飛び込んだ光体はいうまでもなく偵察用小型円盤であるということがわかった。蒸発寸前宇宙人によって家族は呼び寄せられ、家もろともどこかの惑星に瞬間移動させられたのだ。そしてこのことは宇宙人によるスペース・プログラムの一環である地球人救助作戦がいよいよ本格的に開始されたことを物語る非常に重大な出来事であるとぼくは判断した。

一一月二六日――自宅
キノコ雲と地下室

昼下りの都心のビルの一室。壁いっぱいの窓ガラス越しに、林立したビルが見える。ありふれた街の風景である。
突然頭上でドン、ドンという大きな音がした。一斉にみんなが（妻を含む数人の人々）窓際に寄った。
〈原爆が落とされた!!〉
視界いっぱいの巨大な真黒なキノコ雲。キノコ雲の中心の柱は物凄い勢いで全てを焼き尽くして上昇していくエネルギーと化している。やがて上昇したエネルギーは最上部で巨大な半円型のアイスクリーム状の光る雲を形成していった。恐ろしい――。被爆――。死の灰――。全滅――。死ぬ――。どこかに逃げなければならない。どこへ？　いろんな想念が頭の中を駆け巡る。あと数時間で死ぬのか？　死の恐怖がじわじわと襲ってきた。だがどうすることもできない。観念するだけだ。いずれ死ぬんだから、と思うと少しずつ気持が落ちついてきた。だがいつまでもここにいても仕方ないと思ったぼくは階下に降りていった。地下室（鉄工所）のような所に沢山の人々が不安と恐怖の表情を浮かべてテレビの前にかじりついていた。ニュースによると原爆が投下されたのではなく、どこかの製精所が爆発したそうだ。全員ほっとした表情で胸を撫で下した。一たん死を覚悟していただけに喜びはひとしおである。

一二月三日——竜泉寺（浜松）

射精と父の首

ぼくの友人に歌子というのがいる。彼女は最近イギリス人の若いマーチンという恋人をつれてアメリカから帰国した。その彼女がどこかの綺麗な喫茶店の隅にあるテーブルの上で、マーチンとセックスを始めた。最初は見て見ぬふりをしていたが、次第に気になりだし、こちらもいつしか欲情して体が熱くなってきた。下半身が今にも起爆しそうになったぼくはあわてて股間をズボンの上から握りしめ、郷里の生家の裏口から座敷に駆け込んだ。と同時に射精が起こった。ぼくはズボンの中から勃起して赤く充血したペニスをひきだし、座敷中に精液を撒き散らしながら、父の死体が寝かせてある部屋に飛び込んでいった。

すると、死んでいるはずの父が、不意にむっくりと上半身を起こした。が、どうしたことか父の胴体には首がない。見ると首は畳の上にころがっている。それを、父は手探りで懸命に捜している。やっと捜しあて、両手でかかえながら胴体の上に持ってゆき、上手に切り口を合わせてくっつけた。ぼくはその光景を目のあたりに見ながら、別段驚きも、不気味さも感じなかった。それより父に、ぼくが欲情して精液を撒き散らしたことがわからなければいいと思った。

一二月一二日――高輪プリンスホテル三六六号

黒い靴下と露店

見知らぬ他人の家。大勢の人。ぼくのはいている黒い靴下が燃えだした。脱ごうとするが、皮膚に食い込んでなかなか脱げない。熱さは感じないが、結局足の甲は焼けただれてしまった。高校時代の友人、定本一郎君がぼくを自転車に乗せて病院に連れていくことになった。

鄙びた温泉地によくある風景。川縁に沿った道を自転車で走る。生活共同組合などがある。少し行くと薬屋があった。薬屋といっても露店商のようだ。垂幕には水脹れの巨大な足の絵が描かれていた。いかにも恐ろしげに。こんな露店のじゃ治りそうにないと思った二人は別の病院を捜すため来た道を引っかえすことにした。一刻も早くという焦りの気持を押さえながら――。

町角に来た時、長男の英が立っているのに気づいた。最新式の茶のスーツ。シャツも無地の茶。その下は黒のTシャツ。首にペンダント。こんな着飾った長男を見るのは初めて。いよいよ彼も一人前の若者か――、と思うと親の自分から離れていくような気がして淋しくなった。不良にならなければいいが、と願わずにおれない。

一二月一四日――釈迦の霊泉・月光館一一号室（群馬県）

平野威馬雄さんと韓国のブッダ

郷里の生家の近くに韓国の人達が住んでいる地域があった。ぼくはそこの入口の所で、東京の知人と思われる人と立ち話をしていた。そこへ平野威馬雄さんが自転車に乗って通り過ぎようとした。ぼくは声を掛けようと、体を乗り出したが、ふとぼくが話をしている相手が平野さんと意見の合わない人だと気づいて、止めた。

ところが、平野さんの方でぼくがいるのに気づいたのか、自転車をUターンさせて近づいて来た。しかし、何を思ったのか再びUターンしてしまった。きっと自分の嫌いな人がいたからだろう。そのまま行ってしまうのだろうと思っていたら、またUターンして戻って来た。しかし前と同じようにもう一度Uターンした。今度こそいよいよ行ってしまうのだと思っていたら、再三Uターンしてまた近づいて来た。が、ぼくの前まで来るともう一度Uターンした。結局三回円を描いて、一言も口をきかずに行ってしまった。

平野さんが行った後、立ち話をしていた人とも別れて、ぼくはある用事のため道を急いだ。途中まで来た時、道の両側に沢山の韓国の兵隊が並んで、道を通らせてくれなかった。

「どうして通れないのですか?」

「大変偉い人が来られるからです」

いつの間にか見物人が沢山集まって、道の両側は人垣でいっぱいになった。

「いったい誰が来るんですか?」

と見物人の一人に尋ねた。

「ブッダがお見えになるのです」

CamScannerでスキャン

ぼくは仰天した。信じられないことだが、もし本当にブッダの御姿が拝めるなら又とないチャンスだ。
「そのブッダはどんなお方ですか？」
「韓国のブッダで、大変痩せておられ、年老いた方です」
ぼくの頭の中にはガンジーのようなブッダの姿が浮かんだが、韓国のブッダというのは聞いたことがない。本物のブッダなら一目見たいと思ったが、韓国にブッダがいるとは信じられなかったのでぼくはもと来た道を引き返していった。

十二月
美少女と金属

友人の編集者と一緒に銭湯に入った。——そこは薄暗くてその上非常に狭く感じた。友人は衣服をさっさと脱いで風呂場に入っていった。狭い湯舟は三、四人で満員になっている。友人は裸のまま困った様子で湯舟があくのを待っていた。あまり早く裸になっても仕方ないと思ったぼくは、風呂場の様子を見ながらゆっくりと衣服を脱ぐことにした。
その時ぼくの横を通り抜けて一人の少女が風呂場に入っていった。勿論裸のままである。しかも彼女は最近テレビなどで活躍し始めたややボーイッシュな美少女である。ぼくは心臓が急に高なるのを覚えた。衣服を脱ぐ手を休めてぼくは彼女の憂いを含んだやや翳のある端正な横顔と、少

年のような肢体に目を奪われうっとりと見とれていた。
突然ぼくの背後に人の駆けてくる足音を耳にして振り向いた。たった今まで銭湯だったのが、いつの間にかサンフランシスコに住む友人のイラストレーターのサテイの部屋に変り、通りに面した入口から三人の男が細い廊下を走ってあわただしく駆け込んできた。ぼくは咄嗟に彼等が宇宙人であることがわかった。全身白い宇宙服で身を固めており、それぞれ手に器具のようなものを持ってぼくの方に駆け寄り、乱暴にぼくを取り押えた。一瞬の出来事で一体何が起こったのかわからなかったが、ぼくは非常な恐怖に怯えた。
三人の宇宙人の顔は見えなかったが、彼等はぼくを床の上にねじふせるようにした。そして一人がぼくの首の後ろの辺りに何か小さな金属のようなものを埋め込もうとした。痛みは感じなかったが、確実に異物が押し込まれつつあった。宇宙人によってぼくは人造人間のように変えられるのではないかという恐怖が一瞬全身をつらぬいた。その途端ぼくの意識は薄れ始めた。意識を喪失してしまうとやばいと思ったぼくは必死になって消えそうになる意識に抵抗した。だが手足の感覚が次第に失われ、まるで床から手足が離れ、身体が宙に浮き上っていくように感じた。ぼくは最後の抵抗を試みようとして、目を思い切り見開いた。

●一九七七年

CamScannerでスキャン

六月二二日——成城

坐禅と恐竜の子

どこかの禅堂で井上義衍老師と並んで坐禅をしている。坐布を沢山敷き過ぎたせいか、上手く坐れない。坐布がずるずるとすべり落ちる。井上老師の背後で老師の先生という人が老師を指導しておられる。姿は見えないが立派な方のようだ。

場面が変って井上老師とぼくは池の縁で坐布を高く積んで坐禅をしている。左後方に運動場がある。そこから来たのだろう、外人の男女が五、六人われわれの所にやってきた。その内の一人の女性がぼくの名を呼んで、プレゼントをくれた。

「これを食べなさい」

彼女が差し出したものはカンナクズだった。およそ食べられるものではないが、この場は彼女を喜ばすためにも、「後で食べます」というより仕方なかった。

池の左手に小さな家があった。空家？　家の中は一間で、そこには犬のぬいぐるみともう一つ壊れたような動物の人形が横たわっていた。この動物の頭には別の木製のものがくっついていた。ぼくが近づくとこの動物はいきなり起きあがり、まるで生きているように動きだした。ぼくを見て逃げ出すかまえでいる。だが一間しかなく、ぼくが入口に立っているものだから逃げ場を失って、この奇妙な動物は頭で畳をこづき、中に入り込もうとあせっている。

ふと縁の下を覗くとそこは水槽のようになっていて、黄色の汚水が一杯たまっていた。その中に

1977年６月22日――坐禅と恐竜の子

CamScannerでスキャン

一尺ぐらいの恐竜の子が数匹もいた。恐竜のそれぞれの背には五センチたらずの小人が馬乗りになって、恐竜を彼等の乗物の代用にしているようだった。ぼくが水槽に顔を近づけると小人達は驚いて緑の下の奥の暗い所に恐竜を泳がせて身を隠してしまった。

六月二五日——自宅
小川と桃源境

妻と二人で大きな河の中州を歩いている。夜のようだ。昔見た青一色の映画のような色彩が辺りを支配している。やや無気味な雰囲気。一刻も早くこの場所から抜けたいと思っている。中州には鉄道のレールが敷かれている。それにそって歩く。前方は夜の闇。中州をどのくらい歩いたのだろう。ふと気がつくと二人は夜の闇を抜けて、驚くほど明るい場所を歩いている。林の中。光。色。薄いピンクの美しい花を咲かせた樹々の中。桃の木? 浅い小川。びっしり敷かれた小石の上を黄金色の水が、魚の鱗が光るように流れる。二人は小川の縁に立った。小川の中に二つ、三つの大きな石。
「ここを渡ればいいよ」と妻に石を指さすが、彼女はすでに別の石を見つけて、そこを渡っていた。妻の白いスラックスの裾には泥が付いていた。小川を渡り切った所は、一段と桃の木? が生い茂り、むせるような花の香りが空気に染みていた。樹々の間から光がシャワーのように地面に突き差している。

かと思うのブルーンウサギの大群、中国の農場で、ここはきっと快適なのだ！ 言葉に言いな
いつか彼が先輩から教えてもらったこの光景を写真に納めておこうと考えた。

「ぼくは一人でも大丈夫さ」

アルバムと女の声

静かな店でアルバムを見ている。なかなか白の懐かしい風景、懐かしがっているぼく。

目的地かい？祖納の〜のカップルを散歩している。林の中から遠くの田園風景が見える。（実際の風景は少し異なっている）。早朝、今しがた昇った朝日で辺りは薄桃色に輝いている。小鳥の鳴き声がする。

「キャーアイザイアス」。突然女の甲高い声がした。美しい声だ。耳もとで囁いたようでもあり、頭の中のようでもあり、遠くからのような気もした。声がした瞬間、ぼくは思わず「オハヨウアイザイアス」と返した。その時、ぼくの内から「女の声」という印象が湧き起こった。突きとばされるような感覚だが、ぼくも家に駆けつけた。そのことは誰にも分からないかもしれないが ら両親には伝えようと、家に入ると両親（すでに死んでいる）はぼくを待つように居間で並んで座っていた。微笑を浮かべた優しい顔。「声」のことを二人に話した。二人は信じてくれた。そして喜んでくれた。その声がけへいたって何よりも嬉しいと思えた。

「アリガトウ」。女の声だ。先ほどの優しい女の声。と同時に少年の声がとぎれとぎれに入って

きたが聞きとれない。器械が故障した時のように。

天の声に両親もぼくも大喜びしたことが、声の主に伝わり、「アリガトウ」という返答が返ってきたのだろう。この後またしても声が入ってくる気配がした。だがその瞬間ぼくは金縛り状態になった。しかし両親は三度も天の声がぼくに語りかけようとしていることを察知して、嬉しそうに微笑を浮かべた。

● 一九七八年

CamScannerでスキャン

三月一日——自宅

母船とカネダさん

実家の前。筋向いの製材所の上空を巨大な母船が静かに浮いている。箱を伏せたような型。ダーク・グリーン。ズシンと腹の底に響くような大きな音を立てて道路に降りた。と、次の瞬間UFOは同色の大きなトラックに変形して、ジワジワとぼくの方にやってきた。無人車？ やがて一人の眼鏡を掛けた無表情な男（東南アジア系の人物？）が運転していることに気づく。彼の表情にどこか恐ろしいものを感じる。色が黒いせいか？ ぼくの先入観かも知れぬ。トラックは家の前で止まった。男が降りてきた。

（UFOに乗るよう誘われたらどうしよう？ 帰れなかったら？ でも乗りたい）複雑に心が揺れる。（彼を信じるべきか？） ぼくの心の迷いが相手に伝わったのか、ぼくの横にいた人（UFO研究家の南山宏氏？）に宇宙人（或はその代理人）は「カネダさん（南山氏のことか？）結果（UFOによる想念の調査）がよかったのです。さあ」とカネダさん（或るいは南山氏）をトラック（UFO）に誘った。カネダさん（？）が誘われたのならぼくも怖いが誘われたいと思ったが、宇宙人はぼくには見向きもしなかった。トラックの男を信じなかったぼくの心をどうやら読まれたのかも知れない。

五月一九日——日光

妻と貸切バス

妻がバス一台を借り切り、子供（まだ赤ん坊で、妻が抱いている）と二人で乗ることになった。全く贅沢な話だ。他のバスに乗り遅れた老人が妻のバスに殺到してきた。運転手が彼等をバスの中に乗り込ませた。

妻「勝手なことをしないで頂戴！　このバスは私が借り切っているのよ！」

運転手「それはわかっています。だが奥様とお子さん二人じゃ座席は二つあれば充分でしょう」

妻「じゃ何もタダで他の客を乗せることないでしょう！　払うのは私ですから！　しかも手数料（何のためか？）を三千円も払っているのですよ！」

妻に助け舟を出す積りで——

ぼく「運転手さん、じゃ三千円の手数料だけは全員でワリカンにしたらどうですか？」

運転手「御主人様、もしあなたが本当に奥様を愛していらっしゃるなら、その三千円はあなたがお払いになるべきですよ」

ぼくは運転手のいうことがもっともだと思った、一人で乗るのも多勢で乗るのも妻にとっては同じことだというのに。やはり彼女の考えはおかしい。

五月一九日——自宅

密教行者と百万円

新築されたばかりの家の中。密教の行者風の男がぼくのために祈祷してくれている。ぼくがいい加減な気持でいるなら、一向に効き目はないという。もし効いた場合は、その状態を「百万円」と呼ぶのだそうだ。「百万円」とはつまり神との合体に成功した者を指す称号のようなものである。

どうせインチキだろうと思って、ぼくはいい加減に合掌して、行者の様子を眺めていた。突然ぼくの身体が落雷を受けたように粉々に散った。物凄い衝撃が脳天から尾底骨に走った。思わず大声で「イヤーッ!!」と叫んだ。そしてそのまま天井まで吹き飛ばされた。ぼくの身体はすでに白銀色の光のカタマリとなって屋根を突き抜けようとしていた。

これで何かがふっ切れた。そして健康体が戻ってきた、そう感ぜずにはおれなかった。

六月——自宅

キリストの絵とトカゲの尾

新西脇駅にチッキ用の荷物を抱えてやってきた。駅の窓口には切符を求める人々で長い列ができていた。荷物係の窓口は別のところにあったので列に並ぶ必要がなかった。荷物を預けると、係

の姿はくちゃくちゃに絵を描いた。キリストが空から舞い降りてくる絵であった。この絵がどうやら西陣の関係者たちのめにとまったように思われた。絵を受け取ったぼくは、大事にどこかへしまった。後日ゆっくり眺める積りであった。

キリストの絵を描いたのが結んだのか、ぼくは浮き浮きしながら長い列に並んで来た道をたどった。鴨川の家の前まで来た時、家の中から、人の若い女が飛びだし、ぼくの前に立ちはだかった。ぼくをじっと見つめた。大柄の女であった。女は素裸の上にゆかたを、肩骨まるだけだった。胸が大きく開いて、白い肌が見えていた。乳房は大柄な女にしては小さい方であったが、乳首だけはゆかたの外からでもそれとわかるほど突き出していた。ぼくの視線は自然にその突起物にそそがれた。

女と別れて橋の方へ向った。川上の四条にはグラフィカルなイラストレーションの画割風の絵を額のように高く掲げてしなりに歩いてくる一団があった。アメリカのイラストレーターのミルトン・グレイザーの演出らしい。その一団はぼくが立っている橋の下を潜り抜けて川上に向かおうとしていた。だが、橋を潜り抜けると、彼等はモーターボートに乗った一団に早変りしていた。ボートの中から一人の男が橋の上のぼくに向ってカメラを構えた。十数年前、ぼくが日本デザインセンターに勤めていた頃、よく見かけたカメラマンの山本という人であった。

橋を渡ってぼくは家路に向った。道路わきから一匹のトカゲが飛びだした。咄嗟のことにぼくはトカゲの尾を踏みつけた。驚いたトカゲは自らの尾を切断して草むらに逃げ込んだ。切断されたトカゲの尾は宙に舞ってぼくの首筋にからまってきた。

七月九日――自宅

二人の僧侶と魔王尊

実家の裏庭を横切って母屋と離れの間の土間からヌッと現われた僧侶、松原哲明師と金丸宗哲師。台所を挟んでぼくは母屋のみずやが並んでいる板間から突然の来訪者を啞然として見つめていた。異様な霊気が家の中を駆け巡っているように思えた。〈霊力が支配している……〉。二人の僧侶は無表情のまま微動だにしないで立っていたが、ぼくの潜在意識に強烈な言葉のようなもの（言葉ではない）が感応してきた。

「魔王尊なる神をお連れ申した」

魔王尊――？　聞いたことのない名だ。だが、魔王尊なる姿はどこにも見当らなかった。

一〇月二一日――自宅

大蛇とまずい心

郷里の実家の裏通り。人間の背丈もあろうと思われるほどの巨大な緑色をしたバッタが背に子バッタをおぶって道路を横切ろうとしている。この様子を見つけた近所の子供二人が駆け寄ってきた。バッタは彼等から身を守ろうとして、道路脇に植わっている大きな熱帯樹の葉隠に身を寄せようと必死になった。子バッタは危うく親バッタの背から落ちそうになった。

子供達が熱帯樹のところに駆け寄った時バッタが突然緑色の大蛇に変身した。全長六、七メートルもあろう大蛇に。その時すでに一人の子供は大蛇に巻かれ、身体の一部を食われた。
「辛い！」大蛇がそういった。
再び大蛇が大きな口を開けて子供にかみついた。
「心はまずい！」再び大蛇がそういった。
あまりの恐ろしさに子供を助けるどころではなかった。ぼくは逃げるようにして家路を走った。
ぼくのすぐ後を宙を飛ぶように大蛇が追ってきた。

夢日記をつけてみようと思いたったのは、空飛ぶ円盤が夢の中に飛んでくるようになった1971年の頃からです。それまでぼくは空飛ぶ円盤なんてものには全く興味がありませんでした。だからなんでこんなものが夢に現われるようになったのか、どう考えてみてもその意味がわかりません。その頃、今のように誰も彼もがＵＦＯ、ＵＦＯといっている頃ではなかったので、ぼくにとっては全く突然の出来事としかいいようがなかったのです。夢は日常の願望が具現化したものであるといわれていますが、空飛ぶ円盤に関しては、どうやらこの法則（説）を無視していきなり宇宙からぼくの眠りの中に飛び込んで来たというしかないのです。それが連続的に次から次へとやってきたものですから、ぼくはただ唖然とするばかりでした。

その結果、ぼくは次第にＵＦＯに興味を持つようになりました。何しろ潜在意識からＵＦＯの存在を叩き込まれていったわけだから、疑いようがないのです。ＵＦＯの次に説得されていったのは神仏の夢でした。神仏の出現の夢はＵＦＯと同様、全く夢とは思えないほどの強烈なリアリティを持っていて目が覚めてからも夢の続きの高揚感が持続するのです。ぼくが精神世界の事柄に興味を持つようになった最大の原因は何んといってもこのような夢を見たからこそです。

フロイト流にいうと自分が夢を導くことになるのでしょうが、ぼくの場合は夢が自分を導いてくれているということになる。そんなわけでぼくにとって夜の夢は昼間同然、非常に重要なのです。特に夢の中には自分さえ知らない本当の裸のままの自分が描かれ、われながらゾッとすることがあります。昼間書く日記では知らず知らず自分にウソをついてしまいますが、その点夜の日記、つまり夢日記は正直です。それだけに他人に読まれるのは大変怖いことだし、勇気のいることかも知れません。

誰の夢もそうでしょうが、ぼくの夢はいつも奇妙なシュールレアリズム的です。夢そのものが芸術で、このまま映画にでもしたい衝動にかられます。意図的に夢の世界をそのまま作品化したことはありませんが、何んらかの形で深く影響し合っていると思います。夢日記はできるだけ忠実に書きました。一切の創作は加えていません。夢の中での感念などもそのまま書きとめたつもりです。このことは多少言い訳になるかも知れませんが、言葉の上でもっと素晴しい表現をすれば文章が引き立ったかと思える個所が沢山あります。しかし、できるだけ夢の中で感じとった感情を書き印すことにしました。日頃もそうですが、夢の中でのぼくは特にわれながらいやになるほど幼稚です。だが、これがぼくの本性だから仕方ありません。

またぼくの夢にはほとんど色があるように思えます。色そのものを意識しない夢もありますが、色が夢の中で大きなウェイトを持ったものもあります。このことはぼくの職業とは無関係な気がします。というのも夢の中でアーチストとしての眼はあまり感じたことがないからです。夢にも色んな夢があって、夢の中で目を覚ます夢とか、夢の中で「この光景はまるで夢のようだ」と思

っていることもあります。

よく人から「よく夢の一部始終を憶えていますね」と聞かれることがありますが、このことはわれながら感心するほど小さなディテイルまでちゃんと憶えているのです。と、いって全ての夢がそうかというと、そうではありません。書きとめている夢はちゃんと記憶しているものだけです。日常とあまり変らない夢はほとんど忘れています。こんな夢はぼくにとってもともとそう重要ではないような気がします。

昔の人は夢は五臓六腑の疲れといいますが、ぼくは不思議とよく眠った時に限って、夢を沢山見、そして記憶しています。ここに掲載した夢日記の他にもまだ沢山見ているのですが全部掲載することはできませんでした。夢日記はこれからもつけていく積りです。

口絵の竜の絵は、小学二年生の時、家の前の電柱から、天空の暗雲に駆け昇る竜の姿を当時描いたものです。この夢の話を父にすると辰年(たつどし)の父が是非描いてくれといって、それを掛軸にしました。ぼくの記憶の中での最初の夢です。

もう一つ忘れられない夢があります。それはいつも見る夢です。夜の暗い森の中から絣の着物を着たオカッパの少女が背に赤ん坊をおぶって大阪地方の子守唄を歌いながら沼の淵をL字形に曲って消えていく夢です。この夢は最近見なくなりましたが、子供の頃はよく見た夢です。

また、これは夢ではないと思うのですが、(夢かも知れない)子供の頃、常に頭の中に浮かぶ映像が二つありました。ひとつは汽車の格納庫を小高い丘から眺めている風景と、もうひとつは成人した自分がカフェーか、ダンスホールのような所でオシャレして踊っているシーンです。この

二つの映像の意味するところは全くわかりませんが、子供心にいつも気になっていました。まさか前世の記憶ではないでしょうね？

ところで本文の装画は夢の情景をスケッチしたものです。大変下手な絵で作品というようなものではありません。夢は文章にするのも、絵にするのも両方共難かしいものです。

夢日記の大部分は書き下しですが、中には「展望」、「週刊プレイボーイ」、「エピステーメ」に掲載したものも含まれています。この本を上梓するに当り、角川春樹社長初め、佐藤吉之輔、大和正隆、豊嶋和子、門田ヒロ嗣氏等に何度も足を運んでいただきました。この本は以上の方々の御苦労によってできあがりました。感謝いたします。

一九七九年二月

横尾忠則